

博士学位論文

地域組織活動での相互交流による独居高齢者の健康維持

令和3年3月

山口大学大学院医学系研究科保健学専攻

金森 弓枝

目 次

序 章

第1節	研究背景	1
	1. 独居高齢者の現状	1
	2. 独居高齢者の健康課題	1
	3. 地域組織活動	2
	4. 独居高齢者が地域組織活動に参加する効果	3
	5. 研究の着眼点	5
	6. 研究背景のまとめ	6
第2節	論文の構成	7
	序章文献	8

本 論

第1節	研究目的と意義	1 1
第2節	用語の定義	1 1
第3節	研究方法	1 1
第4節	結果	2 1
	1. 独居高齢者の個別分析の結果	2 1
	1)N1 の結果	2 1
	2)N2 の結果	2 5
	3)N3 の結果	2 8
	4)N4 の結果	3 2
	5)N5 の結果	3 5
	6)N6 の結果	3 9
	2. 独居高齢者の総合分析の結果	4 3
	3. 家族同居高齢者の個別分析の結果	4 8
	1)N7 の結果	4 8
	2)N8 の結果	5 2
	3)N9 の結果	5 6

4)N10 の結果	6 0
5)N11 の結果	6 4
6)N12 の結果	6 8
4. 家族高齢者の総合分析の結果	7 4
第5節 考察	7 9
1. 対象の特性	7 9
2. 独居高齢者の特有性の同定	7 9
3. 独居高齢者の特性	8 5
本論文献	9 1
終 章	
第1節 総括	9 4
第2節 研究の限界と今後の展望	9 5
資料	9 7
謝 辞	1 0 2

序 章

第1節 研究背景

1. 独居高齢者の現状

現在、わが国では65歳以上人口が3,600万人を超え高齢化率は28.7%（R2年9月）となり過去最高を記録している¹⁾。また、高齢者数の増加とともに65歳以上人口に占める独居高齢者の割合は増加傾向にあり、現在は男性13.3%、女性21.1%となっている²⁾。世帯別にみると65歳以上がいる世帯のうち、単独世帯の割合が26.4%であり、高齢者がいる世帯において4世帯のうち1世帯は単独世帯、つまり独居生活を送る高齢者がいる世帯ということになる²⁾。単独世帯数の割合が30%を超えるスウェーデンやドイツ、アメリカなどの欧米に比べれば、日本の単独世帯数の割合は決して高い水準ではないが³⁾、日本は1970年以降欧米に比較して24年間という急速なスピードで高齢化率が7%から14%に移行したという特徴を持ち⁴⁾、且つ現在も団塊の世代が75歳以上を迎える2025年が直近に迫りくるなど、ますますの高齢化の進展とともに独居高齢者の増加が見込まれている。

一方で、現在平均余命と健康寿命の差は約10年あり⁵⁾、独居高齢者は独居生活の継続を望みながらも⁶⁻⁷⁾、疾病の悪化や転倒による怪我等によって独居生活を断念せざる得ない事態が起きている⁸⁾。そのため、独居高齢者が健康を維持することによって、望むQOLを実現できるよう支援することは喫緊の課題となっている。

2. 独居高齢者の健康課題

独居高齢者を対象にした研究については、海外では1950年代から発刊され顕著に増え始めたのは1980年代からであったが、日本では、1990年代に入り、ちょうど我が国の高齢化率が14%を超え高齢社会に突入する前後から増加し始めているという動向であった。また、独居高齢者を対象とした研究は、国内において社会学、社会福祉学、看護学、理学療法学など多岐の学術分野に渡っていた。そのため、ハンドリサーチを中心として独居高齢者の文献を93件集め、その中から独居高齢者の健康課題について述べられている43文献を抄読し、健康課題の内容について把握した。その結果、独居高齢者は、社会的孤立のリスクが高いこと⁹⁾

¹⁰⁾, 将来, 病気や要介護状態になることへの心配を半数以上が抱え病気や事故などで生活スタイルに変化が生じることを不安視していること ¹¹⁻¹²⁾, 将来の日常生活自立度をみてみるとその低下は家族等の同居者がいる高齢者に比べて大きいこと ¹³⁻¹⁴⁾ や抑うつ傾向にあること ¹⁵⁻¹⁹⁾, 物忘れがある者の割合が高いこと ²⁰⁾, 緊急時対応のための自己管理 ¹¹⁾ の必要性など, 身体的, 精神的, 社会的側面からの独自の健康課題を抱えていることがわかった. そのため, 独居高齢者の健康維持支援を考えるにあたっては, 独居高齢者が抱える課題の特性を考慮する必要性が考えられた.

3. 地域組織活動

公衆衛生看護は, ウィンスローによる「公衆衛生とは, 環境衛生の改善, 伝染病の予防, 個人衛生の原則に基づく個人の教育, 疾病の早期発見と治療のための医療と看護サービスの組織化, および地域社会のすべての人に健康保持のための適切な生活水準を保障する社会制度の発展のために, 共同社会の組織的な努力を通じて, 疾病を予防し, 寿命を延長し, 肉体的, 精神的な健康と能率の増進をはかる科学であり, 技術である ²¹⁾」とされる公衆衛生の定義を基盤とし, 地域に生活する人々の健康の保持・増進に貢献することを主要な目的として活動している. そして, 公衆衛生看護技術の一つに地域組織活動の支援があるが, これはウィンスローのいう共同社会(コミュニティ)の組織的な努力を通じて地域住民や地域社会の健康増進を図ろうとする技術であり, 現代においても健康課題解決のための重要な活動の手立てとなっている.

中村は, 「地域組織活動は, 住民みずからの健康問題(課題)を明らかにし, その解決に取り組むための活動手段である.」とし, 「個人の健康問題が出発点であったとしても, それを地域の問題として地域組織活動によって取り組むことで, コミュニティの形成がはかられ, エンパワメントやアドボカシーを可能にしていくことにつながり, 地域組織活動は, このような過程を踏むことによって住民たちが地域の問題を解決する力を身につけることを目指している.」と述べている ²²⁾. すなわち, 地域組織活動とは, 保健師が地域で健康課題の解決に取り組もうとする住民組織を支援する際の活動手段として使用する概念(言葉)であり, その類型には委員型, 地縁型, ライフステージ型, 自助グループなどがある. 委員型は, 健康づくり推進員や母子保健推進委員など市町村から委嘱された委員を中心に

行政から受託する内容に応じて住民主体で活動するもので、地縁型は、自治会や町内会、愛育班、婦人会等住民が特定の目的を達成するために生活の中の様々な側面における相互関係を維持・強化するために行われるコミュニティ活動である。特に、高齢者に関しては、地域福祉や健康維持の側面から老人クラブやサロン、見守り活動、自治会活動など地縁型の組織を基盤に地域組織活動が行われることが多い現状にある。

日本では明治時代に衛生行政が整備されたが、同時期に住民による自主的な活動として衛生自治組織が各地に発足したのが地域組織活動の始まりと言える。その後、戦後になって、貧困や母子保健、結核・感染症が大きな健康問題となり行政主導による地域組織活動が展開される中で、先述のウインスローの考え方が打ち出され、「蚊とハエをなくす運動」²³⁾の精力的な活動が契機となり、住民は母子分野の愛育班活動、結核予防婦人会等を中心に意欲的に活動を行い効果も上げていった^{24, 25)}。一方で、1960年代以降高度経済成長期を迎えると、健康問題は生活習慣病や公害問題にシフトするとともに、若者の都市化流出が顕著になり住民の間には、個人志向と地縁関係の希薄さの兆しが見え始めた。その後1980年代に入ると、住民の地縁関係の希薄化は一層進むとともに²⁶⁾、社会では少子高齢化により生じる子育て支援や高齢の健康づくりに対する対応を迫られるようになった。そのような中、1978年に国は「国民健康づくり対策」を発表し、その一環として、健康推進員や食生活改善推進員などを配置し住民の自主的な活動を期待した。その後、健康問題を住民主体で解決していくための健康や福祉の活動が各地でみられるようになり、現在のヘルスプロモーションの理念に基づき健康づくりを目的とした地域組織活動の土台が形成されたとと言える。

4. 独居高齢者が地域組織活動に参加する効果

高齢化の進展とともに独居高齢者数も増加の一途をたどっているが、独居高齢者は、将来の日常生活能力が他の居住形態の者より低いことや抑うつ傾向にあること、閉じこもりのリスクが高いことなど独自の健康課題を抱えていることが明らかになっている。よって、独居高齢者の健康課題解決の手立てを探るため、本研究では地域組織活動への参加が要介護認定期間の短縮に寄与する可能性²⁷⁾や社会参加は生活機能の維持向上に関連があること¹⁸⁾²⁸⁻³⁰⁾に着目し、独居高齢者の地域組織活動に関する文献レビューを行った。この目的は、独居高齢者を

対象とした地域組織活動の研究動向を知るとともに、地域組織活動が独居高齢者にもたらす効果について明らかにすることである。

方法は、医学中央雑誌 Web 版 Ver. 5 にて「独居高齢者 or 一人暮らし高齢者」and「ボランティア or 教室 or サークル or 介護予防 or 健康づくり or 町内会 or 自治会 or 老人クラブ」をキーワードに、会議録を除き発行年は設けず検索した。分析は対象の研究手法、結果・考察(独居高齢者のグループ活動に関する言及箇所)に焦点を当て内容を整理、検討した。

結果は次のようになった。検索の結果 38 件が該当し、表題や抄録を確認して地域組織活動に関する記載無しの論文を除いた 11 件を精読し、独居高齢者と地域組織活動の関わりについて具体的に記載がある 7 件¹¹⁾²⁹⁾³¹⁻³⁵⁾を対象とした。発刊年は 2002 年と 2007 年に各 1 件、2015~2018 年に 5 件で、原著論文 4 件(量的研究 2 件、質的研究 2 件)、解説 2 件、事例 1 件であった。また、地域組織活動に参加する独居高齢者の健康感に関する文献が 1 件、独居高齢者の社会的孤立対策に関する文献が 1 件、グループ活動による交流の広がりや近隣の関係性構築に関する文献が 4 件、グループ活動参加により近隣住民との交流が再開した事例が 1 件であった。独居高齢者においては、グループ活動に参加している人は、体調を良好に維持できていると感じるなど³¹⁾全体的健康感が高く²⁹⁾、当該活動への参加により友人や知人が増えて³³⁾、交流が広がっていた³¹⁾。また、これは声かけやお裾分けという形で日常生活にも波及すると同時に、緊急時等に遠慮なく助けを求められることを期待した³²⁾良好な近隣関係構築に繋がっていた。

結論として、独居高齢者の地域組織活動に関する研究は僅少であることが分かった。この理由としては、独居は居住形態の一つであり、且つ、高齢者に占める割合も男性 13.3%、女性 21.1%のため、高齢者が増えているといえども、量的調査に対応するだけの一定数を確保するためには、相当の大規模調査を必要とすることが考えられる。また、独居高齢者のうち、地域組織活動に参加している者は 8%程度ではないかと推察されることから³⁶⁾、対象者の確保に困難性があり少ない研究数に留まっていると考えられた。

一方で、独居高齢者が地域組織活動に参加する効果として、友人や知人が増えて近隣互助関係が構築されることや地域組織活動で他の参加者と対話したり³¹⁾、見守りや運動^{11,31)}など共通の活動を話し合いながら進めるなどの相互交流が動機づけの役割を果たすことで健康感や QOL の高さ²⁹⁾につながっているのではな

いかと考えられることから、地域組織活動への参加は総体的に健康の維持に寄与していることが示唆された。しかし、地域組織活動での相互交流がどのようにして健康の維持につながっているのかの構造を示した知見は見当たらなかったため、今後は明らかにする必要がある。

5. 研究の着眼点(図1)

飯島は、虚弱(フレイル)の始まりは、社会とのつながりの喪失であるとし、社会性の低下→生活範囲→心→口腔→栄養→身体という流れの社会性の低下から始まる負の連鎖について示している³⁷⁾。また、浅野らも高齢者の健康度の向上については社会参加が重要であると指摘し²⁹⁾、社会参加による活動量の増加は精神的・身体的健康度の上昇につながるとされている³⁸⁾。さらに、年齢の上昇ともに社会活動範囲の狭小が発生するという特徴を持つ高齢者にとっての身近な社会活動であり、住民誰もが健康課題の解決を目的として参加することが可能な地域組織活動については、不参加者より参加者の方が健康感が高いことや抑うつ傾向の者が少ないこと、あるいは交流の広がりなど^{18, 29, 31, 33)}身体的・精神的・社会的側面のいずれからも参加の効果が明らかになっている。よって、本研究では、社会とのつながり(社会的側面)が健康維持の切り口であると考え、その焦点を地域組織活動に当てた。

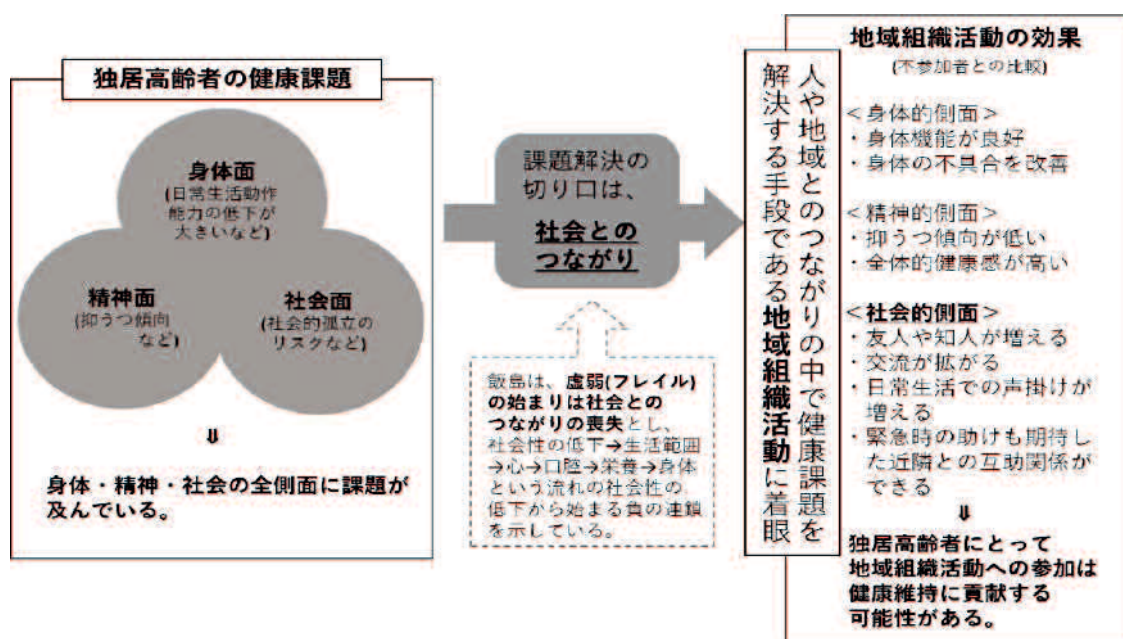
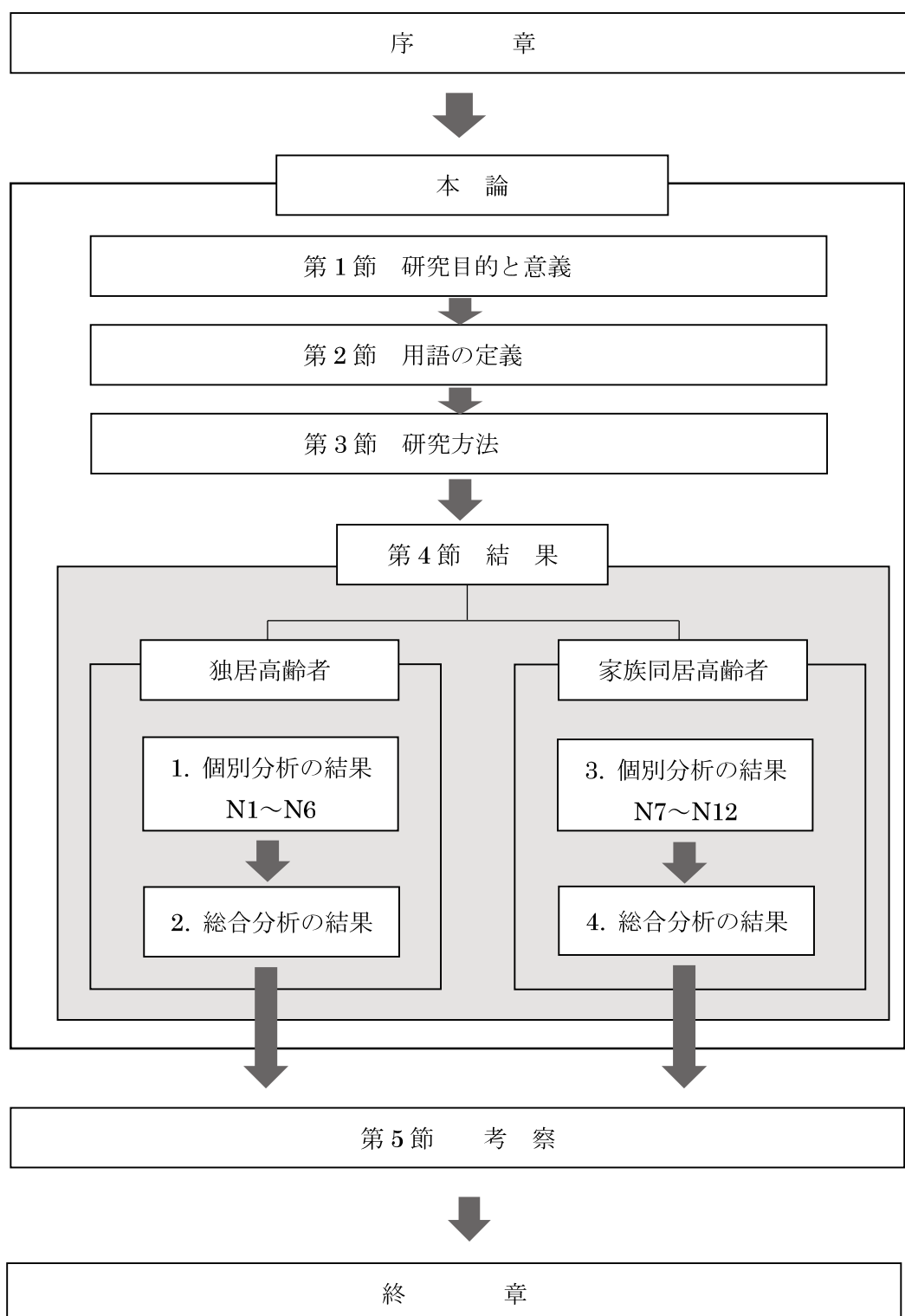


図1 研究の着眼点

6. 研究背景のまとめ

以上のことから、地域で活動する保健医療福祉の専門職が、独居高齢者が抱える独自の健康課題を踏まえて健康維持支援にあたり、望む独居生活を継続できるよう取り組むことは、重要な課題であると考えられた。また、地域組織活動での相互交流は、独居高齢者の健康維持に寄与することが示唆されたことから、これに着眼し支援の在り方を検討することが有効であると考えられるが、現状、相互交流が健康維持に関わる様相を具体的に明らかにした知見は見当たらない。そのため、本研究では、地域組織活動への参加によって健康を維持していると考えられる独居高齢者において、健康は相互交流を基盤にどのように維持されているのか、その構造を明らかにし、独居高齢者支援の在り方について検討することとした。

第2節 論文の構成



序章文献

- 1) 総務省統計局. 高齢者の人口. <http://www.stat.go.jp/data/topics/topi1261.html> (参照 2020-12-25)
- 2) 内閣府. 令和2年度高齢社会白書, 第1章 高齢化の状況(1). https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/html/zenbun/s1_1_3.htm (参照 2020-12-25)
- 3) 内閣府. 平成27年度 第8回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査, 単身高齢世帯(一人暮らし高齢者)の生活と意識に関する国際比較 —4 各国比較一. https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h27/zentai/pdf/kourei_4_fujimori.pdf (参照 2020-12-25)
- 4) 内閣府. 令和2年度高齢社会白書, 第1章 高齢化の状況(2). https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/html/zenbun/s1_1_2.html (参照 2020-12-25)
- 5) 内閣府. 平成27年度高齢社会白書, 3 高齢者の健康・福祉. https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/zenbun/s1_2_3.html (参照 2020-12-25)
- 6) 福田早也香, 山辺茜, 池田亜弓, 他. 農村部の女性独居高齢者が住み慣れた地域で老いていくことに対する思い. 北海道公衆衛生雑誌 2009 ; 23 : 160-166.
- 7) 河野あゆみ, 田高悦子, 岡本双美子, 他. 大都市に住む一人暮らし高齢者のセルフケアを確立するための課題 高層住宅地域と近郊農村地域間の質的分析. 日本公衛誌 2009 ; 56 : 662-673.
- 8) 柄澤邦江, 稲吉久美子. 独居高齢者における独居を継続できなくなった要因に関する研究. 飯田女子短期大学紀要 2008 ; 25 : 21-33.
- 9) 伊藤ふみ子, 田代和子. 社会的孤立に関わる支援者の観点「一人では対応が困難になっている, 男性独居高齢者の社会的孤立への支援の検討. 淑大看栄紀要 2020 ; 12 : 69-77.
- 10) 小谷みどり. 孤立する男性独居高齢者の現状. 保健師ジャーナル 2017 ; 5 : 378-383.
- 11) 工藤禎子. 一人暮らし高齢者の地域での生活における安全の確保. 老年社会科学 2015 ; 37 : 36-41.
- 12) 内閣府. 平成27年版高齢社会白書. 第3節 一人暮らし高齢者に関する意識. https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/zenbun/s1_3_1.html (参照 2020-12-07)
- 13) A R Sarwari, L Fredman, P Langenberg, et al: Prospective study on the relation between living arrangement and change in functional health

- h status of elderly woman. Am J Epidemiol 1998 ; **147** : 370-378.
- 14) Saito E, Takai J, Kanagawa K, et al: Changes in functional capacity in order adults living alone;a three -year longitudinal study in a rural area of Japan. Nihon Koshu Eisei Zasshi 2004 ; **51** : 958-968.
- 15) 齊藤恵美子, 本田亜起子. 一人暮らし高齢者の生活を支える町の実践. 公衆衛生 2002; **66** : 51-53,
- 16) 上田雪子. 地域在住一人暮らし高齢者の精神的健康を高める要因と支援の在り方. 地域総合研究 2020 ; **47** : 1-13.
- 17) 山下浩平, 上城憲司, 仙波梨沙, 他. 地域在住高齢者の世帯構造別にみた心身機能および生活機能の特徴. 作業療法ジャーナル 2020 ; **54** : 709-715.
- 18) 藤井啓介, 北濃成樹, 神藤隆志, 他. 独居高齢者における地域活動への参加と抑うつとの関連性. 理学療法科学 2017 ; **32** : 105-110.
- 19) 藤井啓介, 藤井悠也, 北濃成樹, 他. 地域在住高齢者における運動実践と抑うつとの関連性. Japanese Journal of Health Promotion and Physical Therapy 2019. **8** ; 153-162.
- 20) 本田亜起子, 齊藤恵美子, 金川克子, 他. 一人暮らし高齢者の自立度とそれに関連する要因の検討. 日本公衛誌 2002 ; **49** : 795-801,
- 21) 松田正巳, 公衆衛生の理念 標準保健師講座1 公衆衛生看護学概論, 医学書院, 東京, 2019, 7.
- 22) 中村裕美子, 地域組織活動にかかわる概念 標準保健師講座2 公衆衛生看護技術, 医学書院, 東京, 2020, 208.
- 23) 関なおみ. 戦後日本の「蚊とハエのいない生活実践運動」ー住民参加と国際協力の視点から. 国際保健医療 2009; **24** : 1-11.
- 24) 大友優子. 戦後の愛育班活動に学ぶ-発展途上国への適応に向けて. 保健婦雑誌 2001; **57** : 998-1004.
- 25) 山口忍. 戦後, 地区組織活動の源流をみるー『保健婦雑誌』1951年~1960年の母子活動から. 保健婦雑誌 2003; **59** : 1094-1100.
- 26) 厚生労働省. 厚生労働白書. 地域における意識の変化. <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/05/dl/1-1d.pdf> (参照 2021-01-27)
- 27) Saito M, Aida J, Kondo N, et al. Reduced long-term care cost by social participation among older Japanese adults: a prospective follow-up study in JAGES. BMJ Open 2019 ; **9** : e024439.
- 28) 福島昌子, 清水千代子. 一人暮らし高齢者が自立できる要素. 群馬県立医療短期大学紀要 2004 ; **11** : 47-55.
- 29) 浅野榛菜, 木下美緒, 菊田有美, 他. 地域在住独居高齢者のQOLと社会・生活環境およびソーシャル・キャピタルについて. 北海道公衆衛生学雑誌

2017 ; 31 : 85-91.

30) 林暁淵, 岡田進一, 白澤政和. 大都市独居高齢者の全体的生活満足度における性差的特徴-日常生活満足度との関連から-. 生活科研誌 2003 ; 2 : 273-280.
大都市独居高齢者の全体的生活満足度における性差的特徴

31) 安孫子尚子, 原田小夜. 自主グループ活動に参加する独居高齢者の継続参加への意味づけ. 聖泉看護学研究 2017 ; 6 : 9-18.

32) 高橋和幸. 秋田県の過疎農村地域における社会福祉面の相互扶助と住民参加に関する研究(その 11)~大仙市大沢郷寺 I 集落における一人暮らし高齢者の生活実態をとおして~. 秋田看福大地域研報 総合第 2 報 2007 ; 2 : 17-29.

33) 若山好美, 大岩敦子, 池田由美子, 他. 閉じこもり予防事業が高齢者にもたらす結果について-参加者と非参加者の主観的健康感・身体・精神状態・医療費の比較から-. 地域保健 2002; 33 : 59-67.

34) 田高悦子. 独居高齢者の社会的孤立予防に向けた地域の在り方をめぐって. 日本在宅ケア学会誌 2018; 21 : 26-28.

35) 奥井鈴江, 江面澄枝, 鈴木剛. 地域の協力により笑顔を取り戻せた独居高齢者の一例 Therapeutic Research 2016; 37 : 1181-1182.

36) 内閣府. 平成 27 年度高齢社会白書, 2 人とのつきあいに関する意識. http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/zenbun/s1_3_2.html
(参照 2020-12-25)

37) 飯島勝矢. 厚生労働科学研究費補助金長寿科学総合研究事業 虚弱・サルコペニアモデルを踏まえた高齢者食生活支援の枠組みと包括的介護予防プログラムの考案および検証を目的とした調査研究 平成 26 年度 総括・分担研究報告書, 2015, 1-30.

38) 厚生労働省. 閉じこもり予防・支援マニュアル(改訂版). <https://www.mhlw.go.jp/topics/2009/05/dl/tp0501-1g.pdf> (参照 2021-1-17)

本 論

第 1 節 研究目的と意義

地域組織活動への参加によって健康を維持していると考えられる独居高齢者において、健康は相互交流を基盤にどのように維持されているのか、その構造を明らかにする。

これにより、民生委員や福祉協力員がまだ参加に至っていない住民に対し地域組織活動への参加を働きかける際の意味付けが強化されるとともに、地域で活動する専門職が介護保険法の地域支援事業に基づく訪問等によって、社会との繋がりが脆弱で虚弱への移行が予想される独居高齢者やその予備群への関わりを持つ際に役立つ健康維持の観点からの参加促進の根拠を具体的に得ることに寄与し、まだ参加していない者への参加の動機付けに資することができる。そして、このことは、独居高齢者が住み慣れた自宅や地域で今の生活を続けていくことに貢献する。

第 2 節 用語の定義

1. 独居高齢者

65 歳以上の者のうち、世帯員が一人だけの単独世帯¹⁾の者とする。

2. 地域組織活動

地域組織活動は、住民が健康課題の解決について、個人としての取り組みに留まらず、地域の問題としてその解決に取り組むための組織的な活動手段であり、高齢者サロンや見守りボランティア、自治会などの住民組織を基盤に住民によって主体的に取り組まれる健康づくりを目的とした活動のことである。

3. 健康維持

健康維持は、QOL を高めるために身体的・精神的・社会的側面から自己をコントロールすることとする。

第 3 節 研究方法

1. 研究デザイン

本研究のデザインは、質的帰納的研究である。

2. 研究対象

本研究の対象者は、(1)独居高齢者 6 名、(2)家族同居高齢者 6 名である。

1) 独居高齢者について

対象は、1 年以上独居での生活を送り、地域組織活動に継続的に参加している高
齢者 6 名である。本研究では、①②のどちらの要件も満たすことを対象者の選定
要件とした。

- ① 1 年以上独居生活を送る高齢者
- ② 地域組織活動に継続的に参加している者

<対象者を 6 名にした理由について>

本研究で、独居高齢者の対象数を 6 名にした理由について説明する。独居高齢
者が高齢者人口に占める割合は、男性約 15%、女性 22%とされ、さらにその中で 1
年以上地域組織活動に参加している者となれば、極希少な状況である。また、本
研究は分析方法として山浦により提唱された質的統合法 (KJ 法) を用いること
としており²⁾、山浦は著書の中で、同法の根拠となった KJ 法を開発した川喜田
や自身の経験を踏まえながら、分析過程において 6~7 人目ころから追加の意見
がなくなってくる傾向やデータの飽和については数という視点のみならずデ
ータのバラエティ (テーマに対する背景や考え方) の確保の重要性について述
べている³⁾。以上、これらのことを踏まえ対象者確保の実現性について検討した
ところ、男女比や地域包括支援センター職員の協力によるバラエティを持った
対象候補者選定の観点から、今回は 6 名程度での実行が現実的であると考えら
れ、たとえ 6 名程度であっても候補者選定の段階では日常的に協働している包
括職員の見極めも十分機能していることから一定のバラエティと飽和化が期
待できると判断した。また、調査が進捗する中で、もし 6 名では一定の飽和化が
できていないと判断した場合には、追加調査を行うことも念頭においていた。
さらに、本研究は、質的統合法 (KJ 法) を用いて、まず 6 例の個別分析を行いその
後総合分析を行って共通性の中から論理を発見するという手法を想定してお
り、同様の手法を用いた先行研究においても対象者は 3 名から 7 名とし構造化
しているものが多かったため⁴⁻⁶⁾、以上のことを踏まえ総合的な観点から 6 名が

妥当であると判断した。

2) 家族同居高齢者について

対象は、1年以上同居での生活を送り、地域組織活動に継続的に参加している高齢者6名である。本研究では、①②のどちらの要件も満たすことを対象者の選定要件とした。

- ① 1年以上家族との同居生活を送る高齢者
- ② 地域組織活動に継続的に参加している者

家族同居高齢者を対象とする目的は、地域組織活動での相互交流によって独居高齢者が健康を維持する構造が独居高齢者特有のものになっているかを同定するためである。よって、独居高齢者の対象者数に合わせ、家族同居高齢者の対象数も6名とした。

3. 研究対象のリクルート

今回、調査対象者のリクルートにあたり、A市内の地域包括支援センターに周知協力を依頼した。A市は人口約30万人、高齢化率は28%で、豊かな自然に囲まれ、気候が温暖な地方都市である。研究者はA市の地域包括支援センターに文書と口頭にて、対象者への広報を依頼し、文書にて承諾を得た。その後、同センターに、文書を用いて対象要件を満たす者に広報していただき、研究協力の意思を持った者から研究責任者に直接連絡を受けた。その上で、対象候補者に対し、研究目的や方法、個人情報取り扱いと保護、研究への参加は自由意思によるものであること、協力に同意後も自由に協力を中止し、同意を撤回できること等について紙面と口頭で説明を行い、研究協力の同意が得られた独居高齢者6名と家族同居高齢者6名の合計12名を本研究の対象とした。

4. データ収集期間

平成31年2月

5. データの収集方法

独居高齢者6名、家族同居高齢者6名に半構成個別面接調査を行った。

面接では、地域組織への参加を基盤にした相互交流が健康維持にどのように貢献しているのかを明らかにすることを目的に、活動では、今までに誰とどんな交流があったか、その交流はどんなふうに進んでいったか、地域組織活動に参加することは、自分の健康にどのように役立っていると思うか、などを尋ねた。インタビュー時間は独居高齢者が最短 48 分～最大 65 分の平均 57 分、家族同居高齢者が最短 48 分～最大 56 分の平均 51 分で、内容は本人の同意を得た上で IC レコーダーにて録音し、逐語録を作成した。

<インタビュー実施の概要>

(1) インタビューの日時・場所

インタビューは、各対象者と個別に連絡し、対象者が望む場所、時間にて日時を設定した。場所は、自宅あるいは公共施設の個室で実施した。

(2) インタビューの流れ・内容

インタビューの導入では、挨拶・自己紹介とインタビューの目的と内容の説明を行った。インタビュー目的は研究説明書(紙面)で示しながら口頭で説明し、研究協力への同意確認を行った。また、インタビュー時間は 50 分程度であること、内容について正確なデータを取るために、IC レコーダーに録音させていただきたい旨のお願いを行い、倫理的配慮の視点から、もし話したくないことがある場合は、「話せない」とお伝えいただき、お話いただかなくて構わないことなども伝えた。インタビューの内容は、次の通りとした。

①基本的属性

- ア 性別
- イ 年齢
- ウ 家族構成(※家族同居高齢者のみ)
- エ 独居年数(※独居高齢者のみ)
- オ 独居になった理由(※独居高齢者のみ)
- カ 居住歴
- キ 参加している地域組織活動の種別
 - ・自治会活動

- ・環境美化活動(植栽・清掃)
- ・交通安全活動
- ・老人クラブ活動
- ・要援護者支援活動(見守り・送迎・ゴミ出し等)
- ・地域の健康教室企画・運営活動
- ・その他

ク 活動年数

ケ 活動頻度

コ 1回の活動時間

② 地域組織活動における相互交流に関する質問

この質問の意図は、対象者にとって地域組織活動での相互交流がどんな意味を持つものであるのかを引き出すこととした。そのため意識的な誘導にならないよう下記の質問を主要質問としてお尋ねする一方で、質問に対する語りの中で発せられる健康や生活に関わる内容に沿って、その効果や変化などについて具体的に質問することとした。

<主要質問>

あなたが地域で参加されている活動について質問させていただきます。

ア それはどんな活動ですか。

イ その活動はどのようなきっかけで始めましたか。

ウ その活動では、今までに誰とどんな交流がありましたか。

エ 交流によりこれまでに自分自身はどんな影響を受けましたか。

オ 交流の中で、その方(相手)との交流はどんな風に発展していききましたか。

カ 交流がなかった頃と今では毎日どのように違いますか。

なお、インタビュー内では対象者の語りの流れに応じながら「仲間との交流は自分の健康にどのように役立っていると思いますか」や「地域組織活動を続けることで生活にはどんな影響があっていると思いますか」など、健康や生活などを意識した質問を挿入し、地域組織活動による健康維持への影響についてのやり取りも行った。

インタビューの終了時は、協力に対する感謝と研究結果の公表や同意の撤回など不明な点がある場合は、研究説明書に記載している連絡先(研究責任者)へ連絡をいただくよう伝えた。

6. データ分析方法

本研究のデータ分析は、質的統合法(KJ法)にて行った。

7. 質的統合法(KJ法)を採用した理由

質的統合法(KJ法)は、川喜田二郎氏が開発・体系化した「KJ法」をベースとして、山浦²⁾がその基本理念と基本技術に準拠しながら看護領域の研究者とともに積み重ねてきた看護実践の中から形を成している⁷⁾。質的統合法は、まず各事例固有の「個性・独自性」が把握されるとともに、普遍性・法則性に繋がる「論理」が把握されることで、事例の実態を把握できるとされる個別分析を行い、その後個別分析で得られたラベルを使用して総合分析を行う。総合分析は、個別分析の事例から普遍性・法則性へ近づくプロセスとされる。

本研究の対象である高齢期は人生で最終の発達段階とされ⁸⁾、その発達課題には人生の統合的意味が含まれる。そのため、対象が持つ思考や心情は発達段階の特徴に準じ、過去の人生の承認や永続的な包括的感觉ならびに絶望など様々な顕在的・潜在的事象が入り組んでいる可能性があり、個別分析を基盤に総合分析を行う同法であれば、独居高齢者の持つ個別性・独自性も把握しながら、普遍性・法則性を追求できると考え、地域組織活動での相互交流によって独居高齢者が健康を維持する構造を明らかにするには、この方法が適していると判断した。

8. 分析手順

本研究はまず独居高齢者の6例(N1～N6)と家族同居高齢者6例(N7～N12)の合計12例について個別分析を行い、その後独居高齢者N1～N6の個別分析から得られたラベルを使用して総合分析を行った。また、家族同居高齢者についても同様にN7～N12の個別分析から得られたラベルを使用して総合分析を行った。個別分析と総合分析の手順を以下に記載する。

1) 個別分析

対象者 12 名(N1~N12)の各個別分析を下記の順にて行った。

まず逐語録を 80~130 字程度で意味のまとまりごとに 1 枚のラベルの中に記載した(単位化：元ラベルの作成)。次にラベルの文章全体で訴える意味の類似性に着目して 2~3 枚集めてグループ編成し、グループの意味を表現する文章(1 段目の表札)を考え記述した(図 2)。これをグループ編成プロセスの 1 段階とし、2 段目、3 段目というように同様の作業を行って段階ごとに抽象度を上げ、ラベルの枚数が最終的に 5~7 枚に収まるまで繰り返した(図 3)。ラベル番号は、1 段目を「A001」、2 段目を「B001」というように表示し、どの段階のラベルかが常に検証できるようにした。その後、最終ラベルの関係性に着目して、テーマに対する関係性を探り、最終ラベルの訴える内容が意味上で最もわかりやすく、落ち着いたある相互関係になるように配置した(空間配置)。また、それぞれの最終ラベルが意味するところを【シンボルマーク】として付けた。【シンボルマーク】は、【事柄：エッセンス】の 2 重構造になっている。その後、ラベル同士の関係性を関係記号や添え言葉で示し、最終的に出来上がった図解について、論理的に叙述化した。

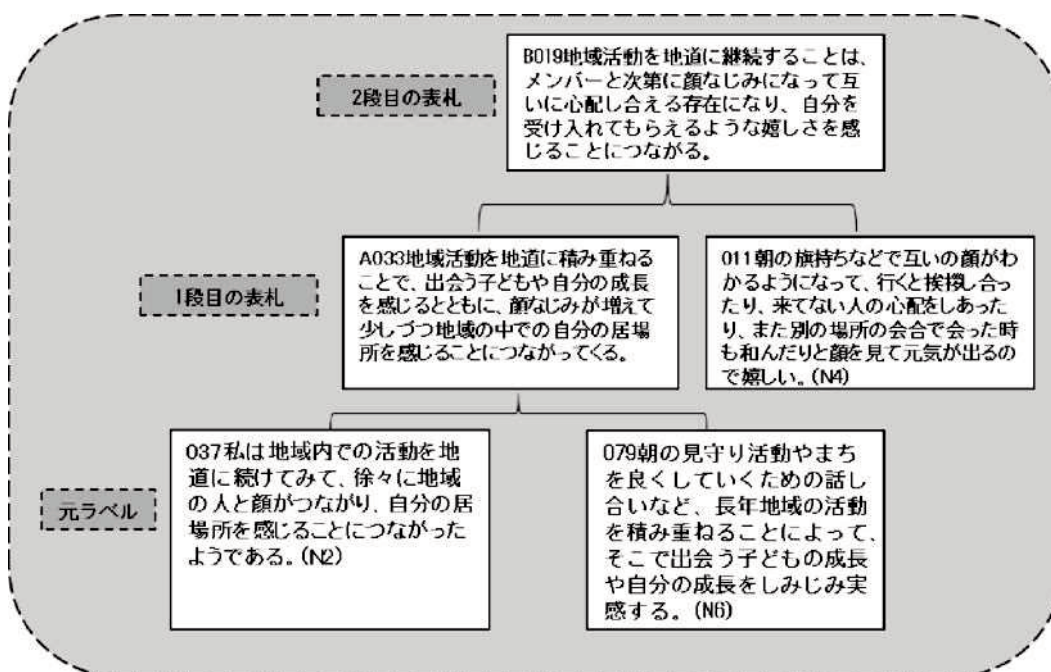


図 2 グループ編成例

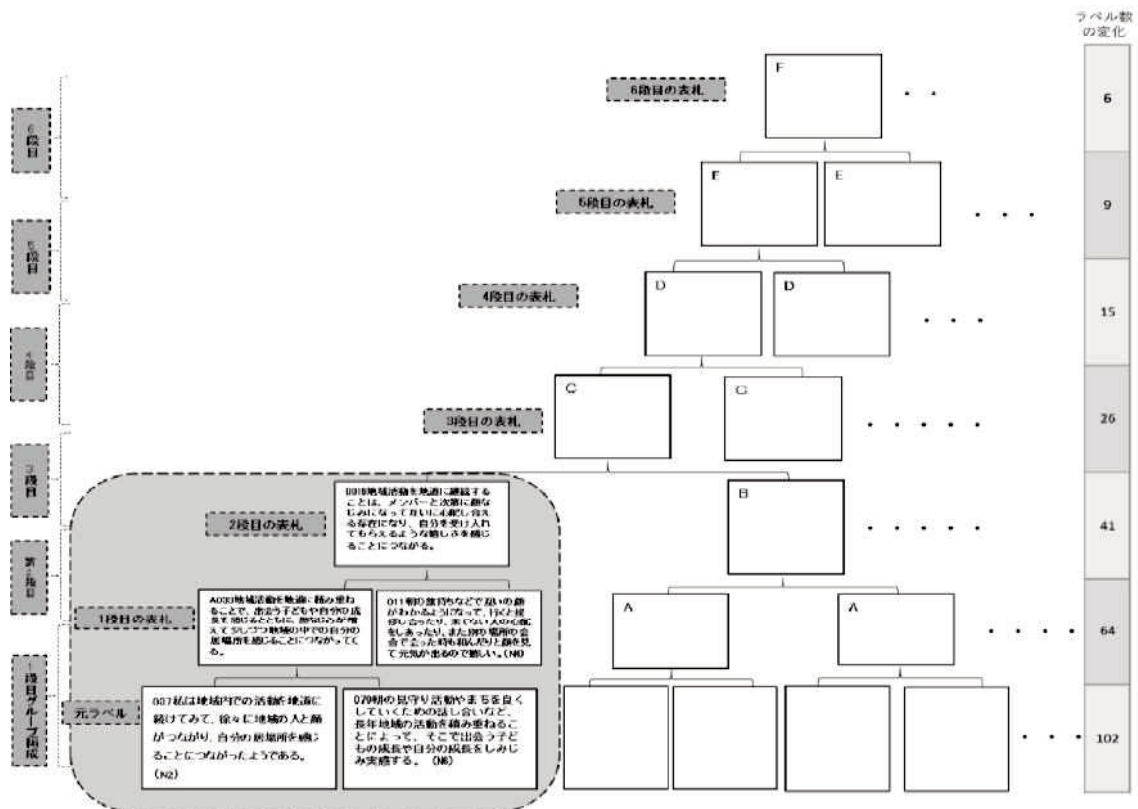


図3 元ラベルから最終ラベルまでのグループ編成イメージ

2) 総合分析

(1) 独居高齢者の総合分析

まず独居高齢者 N1~N6 の個別分析から得られた最終ラベルより 2 段階下のラベルを集め、総合分析のデータ(元ラベル)とした。次に、ラベルのすべてに目が行き渡るよう一面に広げ、ラベルの文章全体で訴える意味の類似性に着目して 2~3 枚集めてグループ編成し、グループの意味を表現する文章(1 段階目の表札)を考え記述した。これをグループ編成プロセスの 1 段階とし、2 段階目表札、3 段階目表札の作成というように同様の作業を繰り返し、段階ごとに抽象度を上げ、ラベルの枚数が最終的に 5~7 枚に収まるまで行った。ラベル番号は、1 段階目を「A001」、2 段階目を「B001」、3 段階目を「C001」のように表示し、どの段階のラベルかが常に検証できるようにした。その後、最終ラベルの関係性に着目して、テーマに対する関係性を探り、最終ラベルの訴える内容が意味上で最もわかりやすく、落ち着いたものがある相互関係になるように配置した(空間配置)。また、それぞれの最終ラベルが意味するところを【シンボルマーク】として付けた。【シンボルマーク】は、【事柄：

エッセンス】の2重構造になっている。その上で、ラベル同士の関係性を関係記号や添え言葉で示し、最終的に出来上がった図解について、論理的に叙述化した。

(2) 家族同居高齢者の総合分析

まず家族独居高齢者 N7～N12 の個別分析から得られた最終ラベルより 2 段階下のラベルを集め、総合分析のデータ(元ラベル)とした。次に、ラベルのすべてに目が行き渡るよう一面に広げ、ラベルの文章全体で訴える意味の類似性に着目して 2～3 枚集めてグループ編成し、グループの意味を表現する文章(1 段目の表札)を考え記述した。これをグループ編成プロセスの 1 段階とし、2 段目表札、3 段目表札の作成というように同様の作業を繰り返し、段階ごとに抽象度を上げ、ラベルの枚数が最終的に 5～7 枚に収まるまで行った。ラベル番号は、1 段目を「A001」、2 段目を「B001」、3 段目を「C001」のように表示し、どの段階のラベルかが常に検証できるようにした。その後、最終ラベルの関係性に着目して、テーマに対する関係性を探り、最終ラベルの訴える内容が意味上で最もわかりやすく、落ち着きのある相互関係になるように配置した(空間配置)。また、それぞれの最終ラベルが意味するところを【シンボルマーク】として付けた。【シンボルマーク】は、【事柄：エッセンス】の2重構造になっている。その上で、ラベル同士の関係性を関係記号や添え言葉で示し、最終的に出来上がった図解について、論理的に叙述化した。

9. 妥当性の確保

分析のプロセス及び結果の妥当性については、大学の公衆衛生看護学分野で 15 年以上教育研究を行っている専門家とのディスカッションや質的統合法(KJ 法)研修会への参加、及び当該分析法専門家からのスーパーバイズによって担保している。スーパーバイズについては、個別型で対面またはオンラインによるビデオ会議形式にて受講し、元ラベルや表札の作成など各段階ごとに方法論の展開が適切であるかを評価していただくとともに、ラベルの統合法などについて指導を受けた。

10. 倫理的配慮

本研究は、日本赤十字九州国際看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て実

施した（承認番号 18-023）。研究者は A 市の地域包括支援センターに文書と口頭にて、対象者への広報を依頼し、文書にて承諾を得た。その後、同センターに、文書を用いて対象要件を満たす者に広報していただき、研究協力の意思を持った者から研究責任者に直接連絡を受けた。その上で、対象候補者に対し、研究目的や方法、個人情報の取り扱いと保護、研究への参加は自由意思によるものであること、協力に同意後も自由に協力を中止し、同意を撤回できること等について紙面と口頭で説明を行い、研究協力の同意が得られた独居高齢者 6 名と家族同居高齢者 6 名の合計 12 名を本研究の対象とした。

また、対象者のプライバシー確保に関する対策（個人情報等の取扱い方法）を次の通りとした。本研究では、人を対象とする医学系研究に関する倫理指針に則って対象者のプライバシー確保に関する対策を実施した。取得した個人情報は、本研究の目的以外で利用することは一切ないことや取得した対象者の個人情報は分析前に識別情報を取り、対象者の個人情報とは無関係の記号又は番号を付けて管理し、得られたすべてのデータは、研究責任者の研究室内における鍵付きキャビネットで施錠して保管することにより対象者の秘密保護に十分配慮すること等を文書及び口頭で説明した。また、インタビューは対象者の希望を尊重し、対象者の自宅あるいはプライバシーの保護が確保された行政施設の会議室個室を利用して行った。さらに、研究成果の公表については、対象者を特定できる情報を含めないようにし、匿名性を確保することを説明した。

第4節 結果

1. 独居高齢者の個別分析の結果

1) 独居高齢者6名の概要(表1)

本研究の参加者,独居高齢者6名(N1~N6)は,男性3名,女性3名の計6名で,年齢は最少68歳,最高85歳で,平均は75.7歳であった.年齢分布について男女別にみると,男性3名は最少68歳,最高74歳で平均年齢が72.0歳,女性3名は最少71歳,最高85歳で平均年齢が79.0歳であった.また,独居年数は最少1年,最大13年で,高齢者サロンや自治会,見守りボランティアなどに各自参加していた.独居になった経緯については,配偶者と死別または離別の者を対象とし,未婚者等は除外した.

表1 研究対象者(独居高齢者6名)の概要

	年齢	性別	居住歴	独居年数	独居理由	参加している地域組織活動	活動年数
N1	80歳代	女	55年	7年	配偶者と死別	高齢者サロン	9年
N2	70歳代	女	29年	1年	配偶者と死別	高齢者サロン, 見守りボランティア	11年
N3	70歳代	男	36年	3年	配偶者と死別	老人クラブ, まちづくり委員会	10年
N4	80歳代	女	26年	13年	配偶者と死別	老人クラブ, 見守りボランティア	7年
N5	60歳代	男	31年	2年	配偶者と死別	自治会, 高齢者サロン	7年
N6	70歳代	男	12年	6年	配偶者と離別	自治会, 老人クラブ, 見守りボランティア	2年

2) 個別分析の結果

独居高齢者 N1~N6 について,各事例ごとに個別分析を行った.その結果について,事例ごとに記述する.

(1) N1の個別分析

A. N1の対象特性

N1は,80歳代の女性である.現在の居住地に約55年暮らしている.7年前に夫と死別し,月1回高齢者サロン(手話教室)に参加する.難聴や狭心症を持ち,シルバーカー歩行である.

B. N1のシンボルマークと図解の叙述化

N1の元ラベルは82枚,6段階を経て7枚の最終ラベルとなり,次の7つの【シンボルマーク】を付けた.①【本来の目標志向:日常や地域組織活動での出来事を喜びに変換】②【主観的幸福感向上:心の通った清々しさ】③【地域内での相補的關係性の形成:同年代同士の互助】④【嫁との關係性に帰属する要因:嫁との適当な距離感】⑤【自身に帰属する要因:体調管理,夫と死別後も持続,活動の

喜び】⑥【現代社会の世知辛さ：一人暮らしゆえに犯罪に狙われる恐怖】⑦【時代の変化による人間関係の複雑さ：他世代との距離感】である。図4は空間配置にシンボルマークを付けて図解化したものであり、【シンボルマーク】の『事柄』と〔エッセンス〕を用いて、得られた図解を叙述化すると次の通りになる。

N1は、『本来の目標志向』によって、日々の生活の中で得た健康情報や自分に起きた出来事などを月に1回の地域組織活動の自己紹介の場で発表し、〔日常や地域組織活動での出来事を喜びに変換〕し、自ら喜びを作り出していた。そしてこの目標志向行動は、地域の人との挨拶等を通じて〔心の通った清々しさ〕を獲得し『主観的幸福感向上』を得ることと互いの体調を気遣い助け合うという〔同年代同士の互助〕による『地域内での相補的關係性の形成』に繋がっていた。また、地域組織活動への参加継続は、〔嫁との適度な距離感〕といった『嫁との関係性に帰属する要因』と普段からの〔体調管理、夫と死別後も持続、活動の喜び〕といった『自身に帰属する要因』によって成り立っていた。一方、このように充実した生活の中にあっても、N1は『現代社会の世知辛さ』の中で〔一人暮らしゆえに犯罪に狙われる恐怖〕を抱え、〔他世代との距離感〕など『時代の変化による人間関係の複雑さ』を感じていた。

C. シンボルマークが示す意味

次に、各最終ラベルと下位ラベルを示しながらシンボルマークについての説明を行う。最終ラベルは< >、下位ラベルは「 」とし、末尾には(ラベル No.)を提示している。

①【本来の目標志向：日常や地域組織活動での出来事を喜びに変換】

最終ラベルは、< 日常での出来事や地域活動の成果等、何事も人前で披露するという事は、取り組み上での一つの目当てとなり得るため、非常に楽しい(E002).>となった。

「敬老会のときにハーモニカを吹く人やらタンバリンを叩く発表があつて、みんなに披露1年に1回ご披露をする。だから、結果が出るんですよ。これもいいなと思いました。ただ習って楽しんで帰るのもいい。だけど、目標がある、敬老会に発表しようという。そういうのが非常にいいですよ(022).」や「私は、手話教室の自己紹介では、1カ月間の出来事だけでなく、テレビや新聞で見た楽しいことや悲しいニュースへの感想も含めて悲喜こもごも、喋りすぎなくらい話している(A025).」などとなり、N1は人前で発表したり、話したりする機会を大切に捉えていることがわかった。

②【主観的幸福感向上：心の通った清々しさ】

最終ラベルは、<地域の人との挨拶や言葉の掛け合いは、一人暮らしの私に、心の通った清々しさという心地よさを与えてくれる (F001) .>となった。

N1 は、「家の前の道路を毎日運動のために掃除していると、段々そこを通る人と接点が生まれて、通勤者と互いに労いの声掛けするようになっていたり、きちんと挨拶する子に感心する等、交流が広がる喜びを感じることができる (C013.)」や「家の前の道路を毎日運動のために掃除していると、知らない顔をして通る子もいるけど、びっくりするほどきちんと挨拶をして通る子に会った時には胸が高鳴るくらい感心する (B010) .」のように、近隣の人との交流による心地よさを覚えていた。

③【地域内での相補的關係性の形成：同年代同士の互助】

最終ラベルは、<80 歳を過ぎた同年代の交流とは、年相応に互いの体調を気遣い、人生経験を尊重し合い、助け合うことによって形成され、地域の輪にもつながると感じる(F002) .>となった。

「長年勤めていたのでこれまであまり近所に同年代の知り合いはいなかったが、最近では同年代の人との交流が広がってきて、輪の広がりとは互いに体調や生活面に課題を抱えている者同士心配して声をかけ合ったり、解決するための提案をし合ったりすることだと感じている (C001) .」や「80 歳を過ぎてある程度人生経験もしている同年代同士だから、苦しみや悲しみ、また戦争をはじめ生きてきた時代を共感し合うことができ、だんだん輪が広がっている (B009) .」のように、N1 は同年代の交流ゆえの助け合いがあることを述べていた。

④【嫁との関係性に帰属する要因：嫁との適度な距離感】

最終ラベルは、<我が家のように姑の体調や生活スタイルを思いやりながら支援してくれる嫁もいれば、隣家のように無慈悲な嫁もいて、嫁の関わりとは私の心情を大きく揺さぶるものであると感じる (D001) .>となった。

「嫁は私の体や友達付き合いを気遣い、適度な頻度で栄養のある手料理を持って訪問してくれて、一方で病気の付き添いや困った時など肝心な時は必ず来てくれるので私は幸せだ (C008) .」や「(お隣の人は)嫁さんに通帳を預けてあって、嫁さんが引き出して現金封筒で送ってくるって。それ聞いて、“えっ、持って来るんじゃないのね” って言ったら “だからね、現金封筒で送ってくるのよ” って。もういつも悩み事ばかり聞かされて。だから、私は自分の嫁のことを褒められないんですよ、可哀想で (069) .」というように、N1 は隣の人と自分の境遇を比べて、嫁の在り方によって自分の幸せが変わるものだと感じていた。

⑤【自身に帰属する要因：体調管理、夫と死別後も持続、活動の喜び】

最終ラベルは、＜地域活動への継続には、夫の死後も途切れず参加できたことや、その時々体調や天候、活動がもたらす喜びなどが影響している (E001) .> となった。

「夫の死後寂しかったので、彼と一緒にいていた手話教室への参加をすぐに再開したが、今は一緒に行っていたことさえも忘れるくらいに充実している (A017) .」や「夫と一緒に通っていた手話教室は、夫の死後も途切れなかったことや県民歌等色々習うことができ楽しいため、結果的に長く通いつけている (C003) .」や「地域活動には、一つでも多く参加したいという気持ちはあるが、実際はやむを得ず体調や天候等に左右されることがあるため、可能な限りで参加するように心掛けている (D008) .」のように、N1 の地域組織活動の継続には、体調管理や夫と死別後の持続、活動の喜びなどが関わっていることを示していた。

⑥【現代社会の世知辛さ：一人暮らしゆえに犯罪に狙われる恐怖】

最終ラベルは、＜私の家は今まで何度も泥棒に入られていて、しかも夫の葬儀の日にも入られるという失望的な経験もしているので、鍵を閉めていても怖くてたまらない (C004) .> となった。

「警察がいつも言うのが、奥さんとはね、この辺で一番狙われてますよって。家が広いし、ましてや城かヤクザのような家。狙われてね。こっち入っても裏から出れる。だからね、気を付けなさいって言われる。と言うのがね、3 回入られたの、泥棒に (073) .」や「鍵をしめていたのに主人のお葬式の日に入られた経験もあって、一人暮らしで一番嫌なことは泥棒に入られることで、広い家なので鍵をきちんと閉めたらもう開き直って奥にいようって思うくらい怖くてたまらない (A024) .」のように、N1 は一人暮らしゆえの恐怖を感じていた。

⑦【時代の変化による人間関係の複雑さ：他世代との距離感】

最終ラベルは、＜私が勤めていた時代の子どもと大人の関係は、危険なことにはその場で怒る等わかりやすく素直な関係性で、教員として今でも生徒と繋がっているくらい信頼関係が強くあったが、今は親への気遣い等が影響し関係が複雑になっている (D004) .> となった。

「教員である限りは子どもに対して向き合うことは、教員だった自分がよくわかっているが、危ない行動には直接叱ることができた昔と違って、今は先生が親に気を遣うなど現実の極端な変化を感じている (A014) .」や「今は我が子を殺すという驚くようなこともあるが、昔は地域みんなで子どもをかわいがっていて、この家でも庭の柿の木に子どもが登ったらおじいちゃんらはよその子どももしっかり怒って、愛情を持って接していた (B002) .」のように、N1 は時代の変化に伴う人間関係の複雑さを感じていた。

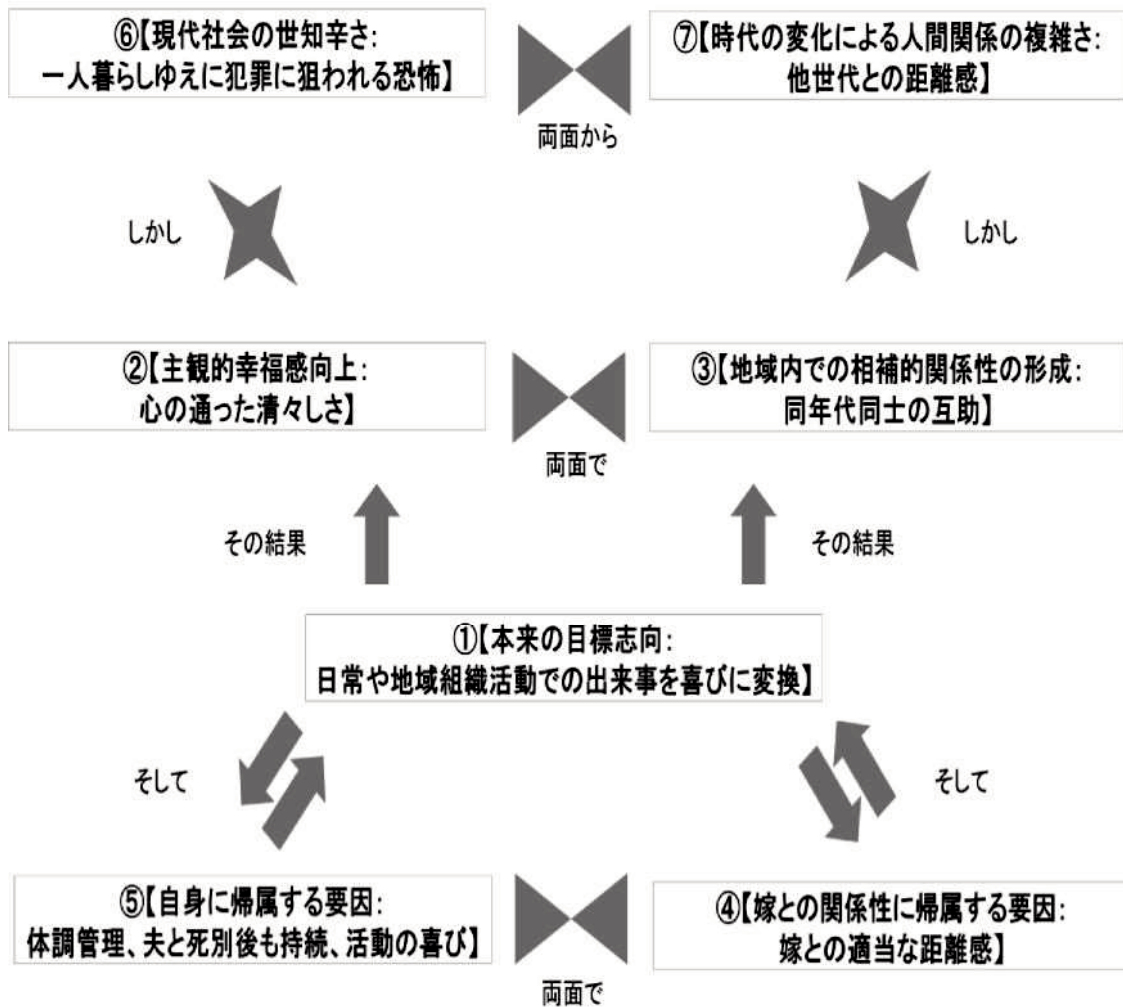


図 4 地域組織活動での相互交流による N1 の健康維持

(2) N2 の個別分析

A. N2 の対象特性

N2 は、70 歳代の女性である。現在の居住地に約 29 年暮らしている。1 年前に夫と死別し、現在は地域の高齢者サロンや見守りボランティアに参加している。

B. シンボルマークと図解の叙述化

N2 の元ラベルは 70 枚、6 段階を経て 5 枚の最終ラベルとなり、次の 5 つの【シンボルマーク】を付けた。①【身体的効果：病気の予防】②【心理的効果：死別による悲しみからの脱却】③【参加継続する要：生活への張り合いを感じつつ分相応を意識した活動遂行】④【活動存続の要：メンバー同士の適度な距離感】⑤【居

場所の獲得：仲間からの承認】である。図5は空間配置にシンボルマークを付けて図解化したものであり、【シンボルマーク】の〔事柄〕と〔エッセンス〕を用いて、得られた図解を叙述化すると次の通りになる。

N2は、地域組織活動を継続することにより、〔病気の予防〕という〔身体的効果〕と夫との〔死別による悲しみからの脱却〕という〔心理的効果〕を得ていた。一方で、〔生活への張り合いを感じつつ分相応を意識した活動遂行〕することは、〔メンバー同士の適度な距離感〕の持続と通底し、自分が〔参加継続する要〕と〔活動存続の要〕になると認識していた。そして、この認識を踏まえつつ地道に活動を積み重ね顔が見える関係になる中で、自分の〔居場所の獲得〕という形で〔仲間からの承認〕を実感していた。また、この実感は心身の効果と相乗的に働き合い、更なる地域組織活動継続に繋がっていた。

C. 各シンボルマークが示す意味

次に、各最終ラベルと下位ラベルを示しながらシンボルマークについての説明を行う。最終ラベルは< >、下位ラベルは「 」とし、末尾には(ラベル No.)を提示している。

①【身体的効果：病気の予防】

最終ラベルは、< ボランティアで人に教えることは対象者に効用をもたらすだけでなく、この準備運営に付随する楽しみや努力によって自分も病気や認知症を予防でき、益々の研鑽意欲向上を沸き立たせてくれる(F002).>となった。

「人に教えるための準備や勉強は、これからも続けていきたいと思うほど、認知症予防などの自分の健康につながっていると感じる(D003).」や「私は喘息を持っており以前は肺炎などで入院や点滴治療をすることがあったが、ボランティアを始めて色んな人と接するようになってからは病気をしなくなったと心底から実感している(A008).」のように、N2は地域でボランティアとして活動することは、病気や認知症の予防につながっていると認識していた。

②【心理的効果：死別による悲しみからの脱却】

最終ラベルは、< 私にとって夫と死別後における地域活動は、仲間からの心配や励ましによって自身の気持ちが前向きに転換するなど双方向性の交流を心強く感じるとともに、活動継続への意欲を高める意味をもつ(F004).>となった。

「数十年付き合う仲間の言葉のおかげで、死別した夫を思って悲しむ私の気持ちが前を向くようになったとしみじみ感じ、仲間からの励ましには、悲しみを乗り越えていくための効果があるように思う(C007).」や「夫と死別後、特養のボランティアを休んでいた私のことを心から心配し、元気になったことを喜んでく

れる仲間の気持ちと、もうこれ以上迷惑をかけられないという私の仲間への思いが入り混じって再びボランティアに行くようになった (A007)。」のように、N2の死別による悲しみからの脱却には仲間との間の双方性の思いやりが関わっていることがわかった。

③【参加継続する要：生活への張り合いを感じつつ分相応を意識した活動遂行】

最終ラベルは、<今日も見てやらんと危ないなど子どもの安全を考えることは、朝きちんと起きる気持ちなど生活への張り合いになっており、地域の中で出しゃばらないように気を付けつつも 11 年続ける原動力になっている (B001).> となった。

「(子どもの見守りが)なかったら、朝も起きないかな。子どもがまた今日もそこを見てやらんと危ないなと思ったら、やっぱり起き上がって出て来ます。まあだから、そういうのが張り合いになってるかな (005)。」や「ボランティアで子どもの見守りを始めた頃は、地区の役員でもないのに何でしているのか等と言われることもあったが、子どもの安全を考えて、でしゃばらないように気を付けつつも、めげずに立ち続けて、11 年間になる (A005)。」のように、N2 は出しゃばらないように気を付けつつも、子どもを守るためにという信念を持って長く続けていることを示していた。

④【活動存続の要：メンバー同士の^族度な距離感】

最終ラベルは、<私のようによそから来た者は別として、サロンメンバー同士は結婚以来のつながりを基盤に、狭いが深い絆を構築している一方で、私的なことは話さないなど距離感を持ってつきあうことで、程よい関係性を持続していると感じる (F001).> となった。

「サロンの参加者はもう結婚してから、すぐからの付き合いの人がほとんどじゃないですか。今日今(サロンに)いらっしやる方も、もう何十年も嫁いでからずっといらっしやる人たちですもんね、うん。この地の方に結婚して来られてるから。よその土地から夫婦で入って来たっていうのじゃないから、やっぱり絆が深いと思います (B032)。」や「そういうの(料理の話題とか)は入ってるけど。あんまりこー私的なことは、極力みんな避けてますからね、うん。もうこの場で公にしてもね、当たり障りのないことでやってますので (025)。」のように、N2 を含め参加者同士は深い絆を持ちつつも距離感を考慮していることが分かった。

⑤【居場所の獲得：仲間からの承認】

最終ラベルは、<自分の居場所とは、とりあえず地域の活動に飛び込んで顔が見えるようになっていく中で、意図せずも自分の過去の経験等が加勢してできて

いくものである(F003).>となった。

N2は、「一人暮らしの人が地域で活動することは、きっかけは何であれ、飛び込んでみて顔が繋がってくれば、居場所がつかれるものである(E005).」や「サロン内で出しゃばらないように気を付けつつも、若い頃から夫の理解のもとに籠作りをはじめ身につけてきた色々な創作が、今はメンバーのチャレンジ活動として役立ち、自分の居場所づくりにも繋がっていると感じる(E003).」のように、まずは飛び込んでみることや過去の経験が地域での居場所の獲得につながっていくと感じていた。

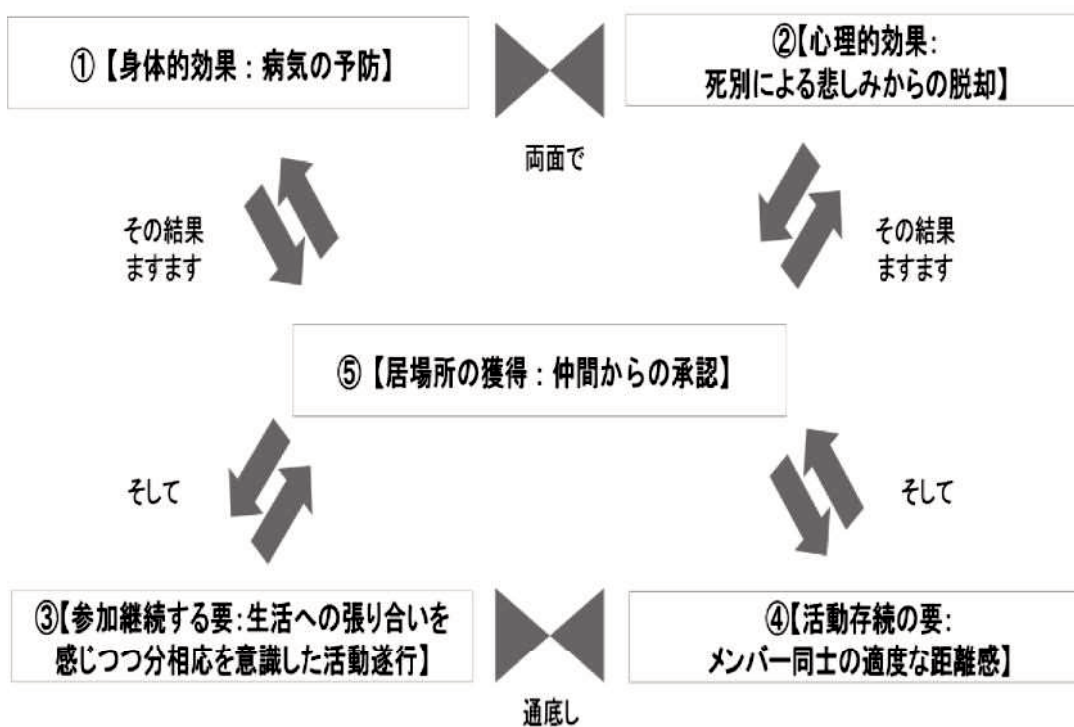


図5 地域組織活動での相互交流によるN2の健康維持

(3) N3の個別分析

A. N3の対象特性

N3は、70歳代の男性である。現在の居住地に約36年暮らしている。3年前に妻と死別し、現在は地域の老人クラブやまちづくり委員会に参加している。

B. N3のシンボルマークと図解の叙述化

N3の元ラベルは70枚,5段階を経て6枚の最終ラベルとなり,次の6つの【シンボルマーク】を付けた.①【地域活動実践に適した距離感を模索：深い付き合いに消極姿勢の日常】②【分相応の活動範囲：深い関わりの民生委員は辞退】③【継続した活動による充実感：多忙さを超える心地よさ】④【役割遂行による満足感：顔なじみの増加と支持される喜び】⑤【地域活動がもたらす成果の範囲：交流範囲や期間の有限を認識】⑥【地域活動の将来への懸念：巡回活動とサロンの行く末を心配】である. 図6は空間配置にシンボルマークを付けて図解化したものであり,【シンボルマーク】の〔事柄〕と〔エッセンス〕を用いて,得られた図解を叙述化すると次の通りになる.

N3は,〔地域活動実践に適した距離感を模索〕して,〔深い付き合いに消極姿勢の日常〕を過ごしていた.それ故に,〔分相応の活動範囲〕の識別として,〔深い関わりの民生委員は辞退〕してそれ以外の地域組織活動に参加し,〔継続した活動による充実感〕,つまり〔多忙さを超える心地よさ〕と,〔役割遂行による満足感〕,すなわち〔顔なじみの増加と支持される喜び〕を得ていた.一方で,N3が地域組織活動を行うのに適した距離感を模索する理由として,〔地域活動がもたらす成果の範囲〕について〔交流範囲や期間の有限を認識〕していたり,〔巡回活動とサロンの行く末を心配〕するなど〔地域組織活動の将来への懸念〕を抱いたり地域活動の範囲と限界を感知していることがあった.

C. 各シンボルマークが示す意味

次に,各最終ラベルと下位ラベルを示しながらシンボルマークについての説明を行う.最終ラベルは< >,下位ラベルは「 」とし,末尾には(ラベル No.)を提示している.

①【地域活動実践に適した距離感を模索：深い付き合いに消極姿勢の日常】

最終ラベルは,<地域では,活動を通して知り合った知人等と日常出会えば挨拶程度はするが,忌憚なく男の一人暮らしという境遇や気持ちを共有して付き合い合えるほどの人がいない状況に一抹の寂しさを感じる(E004).>となった.

「とにかく地域には男の一人暮らしという同じ境遇の者はほとんどおらず,夜は飲み方も何もなく退屈で寂しい(D006).」や「地域活動では沢山のひとと知り合いになり,通りがければ挨拶くらいはするが,基本的に付き合いは活動の時だけで結局は生活に結びつくほど深いものではない(C007)」のようにN3は,男性の一人暮らし高齢者として感じる寂しさを持っていることがわかった.

②【分相応の活動範囲：深い関わりの民生委員は辞退】

最終ラベルは、<家のことも忙しい上、民生委員の仕事は、もともと妻の身代わりに仕方なく引き受けたものであって、実際訪問や情報収集などの活動においても、男の自分だけでは非常にやりづらさを感じた (E001) .>となった。

「7時過ぎて言うたらですよ.1人やったら、朝ご飯も食わにやいかんと.何もかんもせないかん時に.前は行って帰って来たら、もうちゃんにご飯の準備が出来とったから.すつと食うて、帰ってから今度はあれするかとかなったらですよ (070) .」や「民生委員をされていて、妻が生きていた頃は、あその人はどうだとか妻が井戸端会議から知り得てくる情報に助けられたが、一人になってからは、それが無くなり、かといって自ら近隣を回る時間も取れず、とにかくにも近所の情報が入らなくなった (A018) .」「民生委員として訪問した時、中にはよく話してくれる人もいたが、私が男だからか、頭から断られることもあり、とにかくとっつきにくかった (C005) .」のように、男性一人での生活の場合は、妻がいた時とは同じようにはいかない苦悩が認められた。

③【継続した活動による充実感：多忙さを超える心地よさ】

最終ラベルは、<妻と死別後は子どもたちに閉じこもりになるのではと心配さえされたが、自分の意思で退職後から続けてきた地域組織活動は、何でも頼まれごとを好意的に受ける性格も加勢して、超多忙な反面、心地よい充実感をもたらしている.(E002) >となった。

「妻が亡くなってから子どもたちは、私が家に閉じこもって落ち込んでしまったら困ると心配していたが、今は以前体のためにとしていた散歩をする間もないくらい役員活動が忙しく充実した日々を過ごしているので手が要らないと喜んでいる (C008) .」や「大会時は早朝から出るし、昼間は県の役員等様々な活動や、合い間は事務作業をやっていて、地区のグランドゴルフには努めて顔を出すのがやっとなほど忙しい (C011) .」のように、N3 は忙しい中に充実感を感じていることを示している。

④【役割遂行による満足感：顔なじみの増加と支持される喜び】

最終ラベルは、<大会のお世話や遊びの段取りなど、誰かがしないといけない役割を自分が引き受けることで顔なじみが増えたり、みんなも喜んでくれて嬉しい (D001) .>となった。

「特に夫を亡くした女性らは積極的なのだが、私が遊びや大会への参加を段取りするとみんなは楽しみに参加している (C003) .」や「グランドゴルフの大会のお世話は誰かがしないといけないのでしているわけであるが、すれば顔なじみも増えて、こちらが覚えていない人からも声をかけてもらえることがあり嬉しい (C006) .」のように、N3 は人や行事のお世話役をすることで自分を慕ってくれる

人が出てきたり、顔なじみが増えることを嬉しく思っている様子であった。

⑤【地域活動がもたらす成果の範囲：交流範囲や期間の有限を認識】

最終ラベルは、<地域組織活動を通じてできた仲間や子どもとのつながりは、住民同士のふれあいや教育的交流を生み出す一方で、顔ぶれの範囲や交流の期間には限りがあると感じる (E003).>となった。

N3 は、「長く朝の子供の見守り活動を続けてきたので、これを通じて知り合った子供たちは、普段も挨拶をしてくれたり、また公民館のネットにぶら下がるなど不適切な行為をしたと感じたときは子どもの方から謝ってきたりするなど、子どもは素直なので、実直なやりとりができる (A006).」や「地域活動を通じて広がってきた子どもや仲間とのつながりだが、子どもとのつながりは概ね中学生の時期くらいまでだったり、様々な活動の顔ぶれは結局同じだったりというように、時期や範囲には限りがあるものである (C001).」のように、地域組織活動を通じて交流が芽生える一方で、顔ぶれや交流の範囲には限りもあると感じていることを示していた。

⑥【地域活動の将来への懸念：巡回活動とサロンの行く末を心配】

最終ラベルは、<今まで青パトや地域サロンなど色んな活動を行ってきたが、青パトのように活動が巡回のみであったり、サロンの参加者が減少する等成果を感じにくい時は不安な気持ちになる (E005).>となった。

N3 は、「有事にも備えながら青パトで巡回するなど、今まで様々な活動を行ってきたが、それらは単なる一方通行の活動だったのではないかと切なく感じる (C002).」や「地域活動の参加者は、みんな足腰の痛みなど体調に不安がある人ばかりで、特に男性がどんどん減っていて、加えて今はみんな 70 歳まで働いていたなど背景は様々だが新規加入はめったにないため、今後もっと減少するのではと心配している (C010).」のように、地域組織活動の成果を感じにくいときは不安になることを示していた。

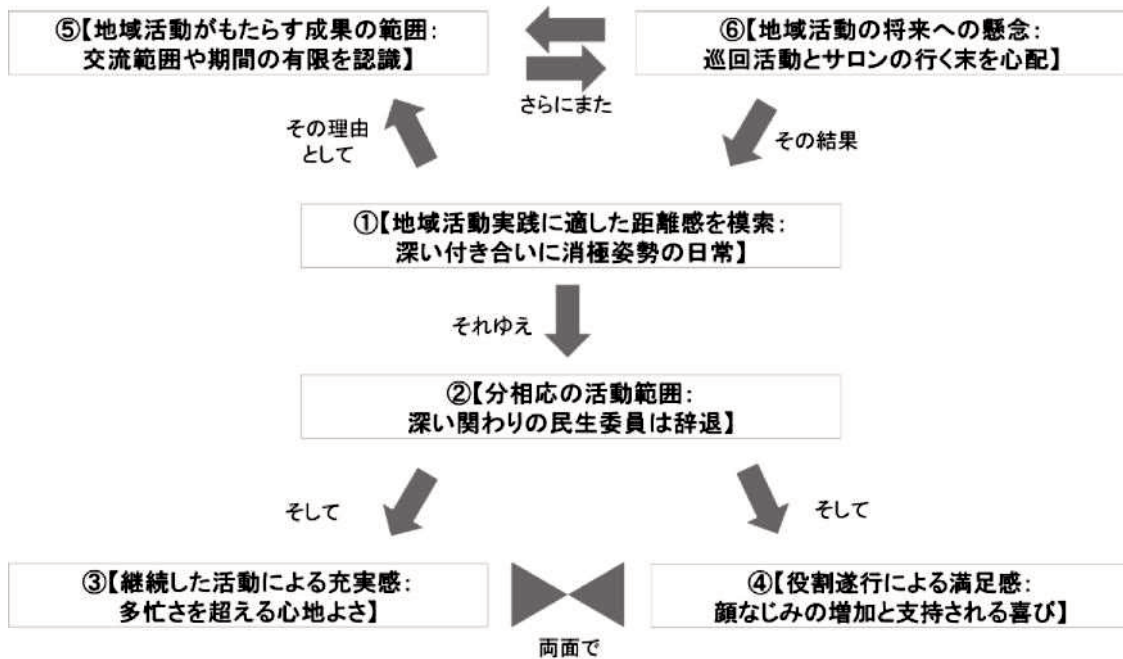


図 6 地域組織活動での相互交流による N3 の健康維持

(4) N4 の個別分析

A. N4 の対象特性

N4 は、80 歳代の女性である。現在の居住地に約 26 年暮らしている。13 年前に夫と死別し、現在は地域の老人クラブや見守りボランティアに参加している。

B. シンボルマークと図解の叙述化

N4 の元ラベルは 69 枚、5 段階を経て 6 枚の最終ラベルとなり、次の 6 つの【シンボルマーク】を付けた。①【平穏な日常：独居生活と地域とのつながりが調和】②【互いに気遣い合う関係性：元気をもらえる】③【高齢者の中での老若に配慮：無理強いしない】④【人との触れ合い：相手が頑張る姿から励みもらえる】⑤【コネクションを重視：自分なりの工夫、継続意欲】⑥【交友関係での配慮：信用できる人かを判断】である。図 7 は空間配置にシンボルマークを付けて図解化したものであり、【シンボルマーク】の『事柄』と『エッセンス』を用いて、得られた図解を叙述化すると次の通りになる。

N4 の『平穏な日常』は『独居生活と地域とのつながりが調和』によって成り立っており、それは、地域組織活動を通じて仲間と『互いに気遣い合う関係性』を築き『元気をもらえる』と感じること、『高齢者の中での老若に配慮』し活動

参加などを〔無理強いしない〕こと,〔人との触れ合い〕から〔相手が頑張る姿から励みをもたらえる〕こと,〔コネクションを重視〕し〔自分なりの工夫,継続意欲〕を持つ一方で〔交友関係での配慮〕として〔信用できる人かを判断〕することの実践によって実現していた.また,〔人との触れ合い〕と〔コネクションを重視〕することは相乗的に作用し合っていた.

C. 各シンボルマークが示す意味

次に,各最終ラベルと下位ラベルを示しながらシンボルマークについての説明を行う.最終ラベルは< >,下位ラベルは「 」とし,末尾には(ラベル No.)を提示している.

①【平穏な日常：独居生活と地域とのつながりが調和】

最終ラベルは,<私が生活の中で大事にしているのは,大好きな草花を育てることや夫のお墓に行くこと,それから近所の人とおすそ分けなどを通して日常的なちょっとしたやり取りをすることである(E001).>となった.

「地域活動の機会などを利用しながら,大好きな草花いじりをしたり,夫のお墓に行って嗚咽する時間を持つというのは自分にとってとても大事な時間である(D001).」や「以前は孫に料理を届けたりしていたが最近は億劫に感じるようになり,今はフキノトウやお芋などを近所の人とやり取りすることが嬉しいと感じるし生活の一部になっている(C008).」のように,N4は好きな草花を育てることや夫のお墓に行くこと,ならびに近所の人との日常的な接触が,自分にとって大切な時間であると感じていた.

②【互いに気遣い合う関係性：元気をもらえる】

最終ラベルは,<この地区では,地域組織活動を通してみんなが顔なじみになり,何がなくともお互いが気遣い合う関係になっていることが,私の元気にもつながっていると思う(E002).>となった.

「活動の時は,みんな互いに顔を見て,それとなく会話しながら相手の様子を気遣いあうような雰囲気である(C001).」や「朝の旗持ちなどで互いの顔がわかるようになって,行くと挨拶し合ったり,来てない人の心配をしあったり,また別の場所の会合で会った時も和んだり顔を見て元気が出るので嬉しい(B007).」のように,N4は地域組織活動を通じて互いに元気が出るような気遣いの関係を築いていた.

③【高齢者の中での老若に配慮：無理強いしない】

最終ラベルは,<私はメンバーがだんだん減っていくクラブのために新しい人を誘って組織の役に立ちたいとも思うが,高齢者の中にも老若の意識があるので,

無理強いにならないよう気を付けている(E003).>となった。

「地域にはメンバーが減って活動規模を縮小せざる得ないクラブもあり,私は何か組織のために役に立ちたいと思っている(D005).」や「定年退職をしたばかりの人を誘ってはみたものの,年寄りばかりだと言われ妙に納得したので,無理しなくていいよと引き下がった(A017).」のように,高齢者の中でも年齢による気遣いが必要であることを示していた。

④【人との触れ合い：相手が頑張る姿から励みをもたらえる】

最終ラベルは,<地域活動では周囲の人が亡くなったり病気になったりして辛く感じることもあるが,一方で病気から回復するために頑張る人と触れ合うこともあって励みになっている(E004).>となった。

「夫が亡くなったり,周囲で体が悪くなってこれまでとおりの生活ができない人がいることは,日常生活が変わらざる得ないことを突き付けられた気持ちで辛い(C010).」ことがある一方で,「私がグランドゴルフをしていると,寒い寒いと言いながらも(脳梗塞後の)リハビリのために歩いている男性がいつもこうして手を振ってくれて,ちょっとした触れ合いになっている(A019).」というように,N4は頑張る人の姿に励まされていた。

⑤【コネクションを重視：自分なりの工夫,継続意欲】

最終ラベルは,<私は,縁あって関わるようになった地域活動を,自分なりのペースや工夫を持つことで,これからもできるだけ続けていきたいと思う(E005).>となった。

「私は,地域の活動には自分ができるペースで取り組んだり,忘れないように,やり取りにあえてFAXを使ったりと自分なりの方法を交えることで続けていきたいと思っている(D006).」や「私もいつまでできるか分からないけど,誘われて入ったのも縁だと思うから,精いっぱいできる間はやって行こうと思う(A006).」のように,N4は地域組織活動を工夫しながらできるだけ続けていきたいと思っている様子だった。

⑥【交友関係での配慮：信用できる人かを判断】

最終ラベルは,<地域の中の人付き合いで,自慢話をしたり,プライベートなことを話して回るのは好まれず,みんなも気を付けているように感じるが,自分も相手が信用できる人かどうかをみた上で交友を大事にしている(D002).>となった。

N4は「人によっては誰彼構わずプライベートなことを話して回る人もいるので,私は果物のおすそ分けなど,ちょっとしたやり取りを重ねる中で,私のことを

信用できる人だと思って頼ってくれる人はこれからも大事にしていきたいと思っている (C005).」や「グランドゴルフの時に,自分の孫のことを自慢したり,個人的な話に踏み込んだりすることは不快な思いを生じさせてしまうといったことをわきまえて,みんな話を楽しむようにしている (B017).」のように,交友関係を築いていく上では慎重に配慮すべき側面があると感じていた。

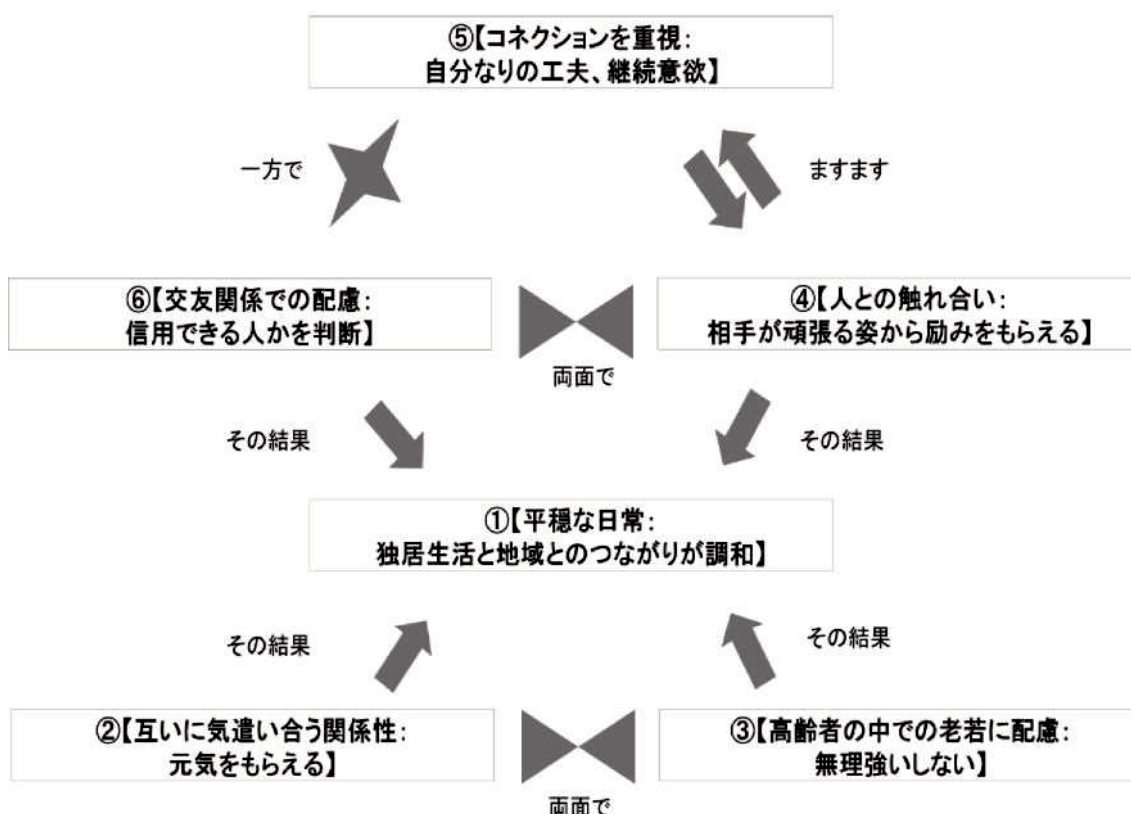


図 7 地域組織活動での相互交流による N4 の健康維持

(5) N5 の個別分析

A. N5 の対象特性

N5 は,60 歳代の男性である。現在の居住地に約 31 年暮らしている。2 年前に妻と死別し,現在は自治会活動や高齢者サロンに参加している。

B. シンボルマークと図解の叙述化

N5 の元ラベルは 113 枚,6 段階を経て 7 枚の最終ラベルとなり,次の 7 つの【シンボルマーク】を付けた.①【自助努力志向：できるだけ一人で取り組もうとする】②【自治会長としての強い責任感：自分の役割を全うしようとする】③【独居生活と地域組織活動の両立：地域活動に費やす時間や量を調整】④【独居者として受ける周囲からの気遣い：日常的な声掛けや地域組織活動への惜しみない協力】⑤【適度な距離感でのつながり：日常生活圏域が同じゆえの気遣い】⑥【参加者主体の活動を目指す：住民や保健師から意見を聞く】⑦【程よい安寧の獲得：老化防止と地域貢献の意識】である. 図 8 は空間配置にシンボルマークを付けて図解化したものであり,【シンボルマーク】の〔事柄〕と〔エッセンス〕を用いて,得られた図解を叙述化すると次の通りになる.

N5 は,何事にも〔できるだけ一人で取り組もうとする〕など〔自助努力志向〕で,且つ,〔自治会長としての強い責任感〕から必ず〔自分の役割を全うしようとする〕がゆえに,〔地域活動に費やす時間や量を調整〕して〔独居生活と地域組織活動の両立〕を図ろうとしていた.一方で,周囲は N5 に〔日常的な声掛けや地域組織活動への惜しみない協力〕という〔独居者として受ける周囲からの気遣い〕を享受していた.また,この周囲からの協力は,N5 が〔日常生活圏域が同じゆえの気遣い〕をしながら〔適度な距離感でのつながり〕を保とうとする姿勢や〔住民や保健師から意見を聞く〕ことで〔参加者主体の活動を目指す〕態度を支持していた.さらに,こうした姿勢や態度は,地域組織活動の継続をもたらして〔老化防止と地域貢献の意識〕を生み,〔程よい安寧の獲得〕に繋がっていた.

C. シンボルマークが示す意味

次に,各最終ラベルと下位ラベルを示しながらシンボルマークについての説明を行う.最終ラベルは< >,下位ラベルは「 」とし,末尾には(ラベル No.)を提示している.

①【自助努力志向：できるだけ一人で取り組もうとする】

最終ラベルは,<私は,地域活動で他者の手助けを借りることもあるが,基本的には何でも一人でやろうとしてしまう(E003).>となった.

N5 は「行事の前の買い出しは,仕事をしている役員さんや民生委員さんには何となく頼み辛いので,妻がいなくなっからは自分が担っている(A008).」や「自分が人にする相談も人から受けた相談事の対処も,内容によっては他に頼るなど柔軟に動くこともあるが,基本は自分でやるようにしている(D008).」のように,人に迷惑をかけないようになるべく自分で対処することを基本姿勢にしていることがわかった.

②【自治会長としての強い責任感：自分の役割を全うしようとする】

最終ラベルは、<私は将来余生を楽しみたいと思っているが、自治会長をしている間は責任をもって役割を果たし、仕事を全うしようと考えている(F002).>となった。

「私は今の活動に尽力しつつも、あと2年頑張っただけで自治会長の任期をきちんと全うしたらもう辞めようと思っていて、後任探しの心づもりをする等それを見据えて動いている(D003).」や「私は行事に参加するメンバーが固定していることや自治会に入っていない人へ対応することは果たすべき仕事だと感じる(E004).」のように、N5は自分が自治会長としての果たすべき役割を自覚し、責任をもって遂行している様子が認められた。

③【独居生活と地域組織活動の両立：地域活動に費やす時間や量を調整】

最終ラベルは、<妻が亡くなってから人との交流や心情には変化があったともなかったとも言えないが、一人で暮らしていくために、地域組織活動の時間帯や量を調整したりはしている(D009).>となった。

N5は「(地域組織活動関係で)色んなまだ声は掛かるんですけどね、“何々をしてくれないか”と。だけど、もう私は1人だからもうできないっていうので、色々断ったりしてるんですけどね(021).」や「妻が亡くなってからは、地域組織活動に参加するにも一緒に行動する人がいない心もとなさを感じたり、一人暮らしには何かと忙しい夜の参加はなるべく避けて朝の時間に行ったりと何かと変化が生じている(B025).」のように、一人で生活していくために時間や仕事量の調整をしていることがわかった。

④【独居者として受ける周囲からの気遣い：日常的な声掛けや地域組織活動への惜しみない協力】

最終ラベルは、<自治会長をしているので周囲の人が一人身である私のことを気遣って、家までわざわざ漬物を持ってきてくれたり、行事の時には惜しまず協力してくれることが嬉しい(E006).>となった。

N5は「なかなか一人では困難なので、色々な行事で婦人部の方が料理を作ってくれたり、みんなお願いをすれば二つ返事で集まって加勢してくれることは本当に心強い(C010).」や「これまで自治会長をしてきて周囲の人が私の身の上を知っているのためか漬物をわざわざ家まで持ってきてくれるなど独り者を気遣ってくれることがとても嬉しい(B021).」というように、周囲が独居である自分の身の上を案じ、気にかけてくれることを嬉しく思っていた。

⑤【適度な距離感でのつながり：日常生活圏域が同じゆえの気遣い】

最終ラベルは、<住民同士のつながりは様々な活動に広がりの可能性を持つが、日常生活の範囲が同じ地域の人同士ゆえに距離感を考えながら付き合うことは重要だ(F003).>となった。

N5 は「私は、会食会や認知症模擬訓練の実施に関わるような社協関連の部会だけでなく、ミニバレーをはじめ色々な大会に参加するなど、地域のあらゆる活動に参加している (C009) .」や「普段歩いている時にでも出くわすことのある地域の人だからこそ、活動の時はたくさん話をして元気をもらったりするが、普段歩いている不意に出会ったときは挨拶だけに留める等、距離感を考えるようにしている (C004) .」のように、同じ生活圏域がゆえに活動での付き合い方と日常生活での付き合い方を違えた方が良いと認識していた。

⑥【参加者主体の活動を目指す：住民や保健師から意見を聞く】

最終ラベルは、<自治会長として地域行事で大切にすべきことは、参加者主体の内容になるよう他の住民や保健師から意見をもらったり、参加者自身の考えを尊重することだと思う(F004).>となった。

「地域活動には、いつも相手や住民にとって喜びやためになることは何かを考え、包括の保健師や地域事務所から積極的に情報や意見を集めるなど、工夫を行いながら取り組むようにしている (C015) .」や「行事に参加した人が、その都度良し悪しを反応や言葉で表現してくれることはとても大切に、喜ばしいことだと感じている(D001).」のように、N5 は参加者主体の活動であるための工夫を重ねていた。

⑦【程よい安寧の獲得：老化防止と地域貢献の意識】

最終ラベルは、<地域組織活動を続けることで、老いを防いだり、子どもに心配をかけずに済んだり、地域の役に立っているという安心感が持てる(F001).>となった。

N5 は「辞めようとか色々な時期もあったんですけどね。やはり子どもたちにも色々話したんですけども、“もうお父さんね、もうなんもせんがったらどんどん老けていくよ”って。まあ一番のきっかけはやっぱ子どもたちかな (108) .」や「私が今まで地域活動を懸命に続けているのは、みんなを元気づけたい、安心して住める地域にしたいという思いと何もしなくなることで老いてしまうことを子どもたちに心配させないためだ (D005) .」、「私は、地域の活動をすることで無駄な時間が無くなってパチンコとか遊びに走らずに済むし、いろいろ勉強になるので将来のためにも良いと感じている (B010) .」のように、地域組織活動の継続によって、老いが防止できることや子どもに心配をかけないことを実現し、さらには地域に貢献できることで程よい安寧を獲得していた。

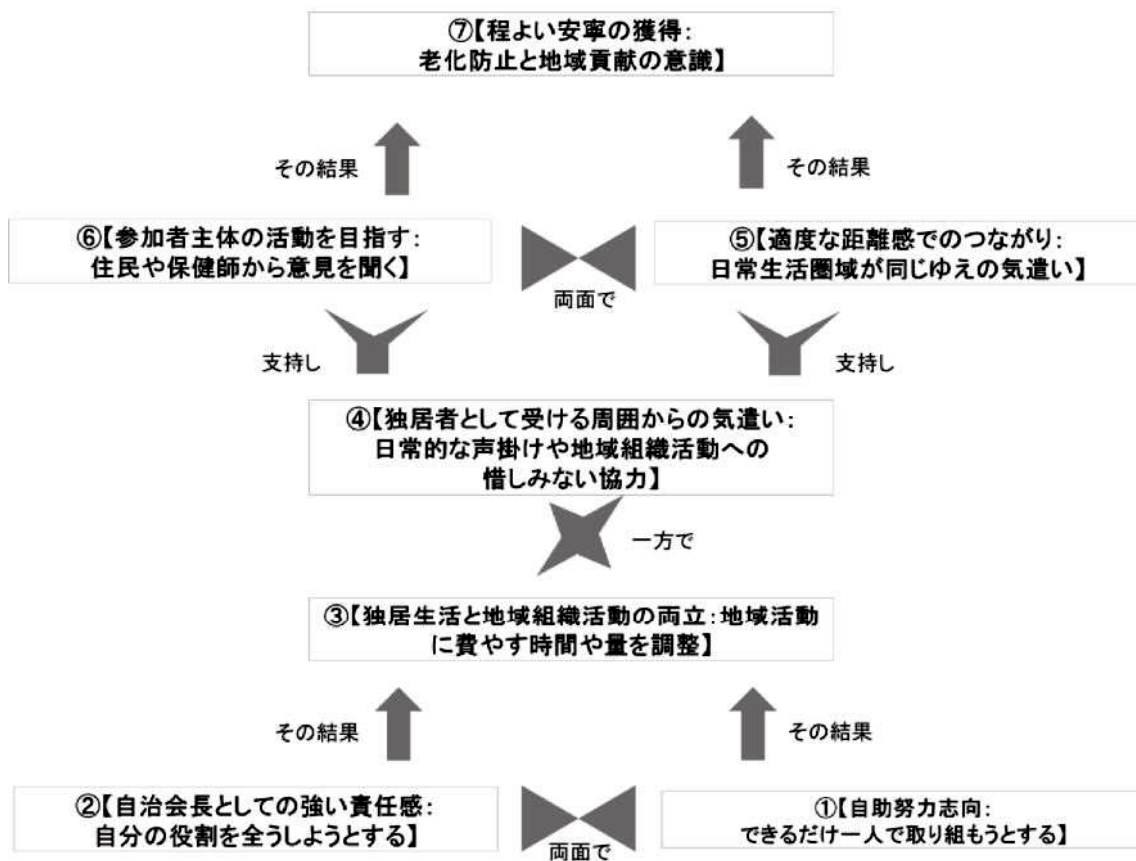


図 8 地域組織活動での相互交流による N5 の健康維持

(6) N6 の個別分析

A. N6 の対象特性

N6 は、70 歳代の男性である。現在の居住地に約 12 年暮らしている。現在は地区の自治会活動や老人クラブ活動、見守りボランティアなどの地域組織活動に参加している。40 歳代に妻が病死し、その後再婚したが離別し、6 年程前から独居生活である。

B. N6 の分析結果

N6 の元ラベルは 96 枚、6 段階を経て 5 枚の最終ラベルとなり、次の 5 つの【シンボルマーク】を付けた。①【独居者にとっての効果：地域組織活動と生活の融合により日常生活に緩急をつけるスキルを獲得】②【地域組織活動への取り組み方：家庭訪問や見守り活動では必要性を重視】③【活動仲間との互助：様々な住民や保健師と長期的な相互支援関係を構築】④【地域で役割を果たす実感：頼ら

れる充実感によって使命感を自覚】⑤【他者に迷惑をかけまいとする意思：普段からの体調管理】である。図9は空間配置にシンボルマークを付けて図解化したものであり、【シンボルマーク】の『事柄』と【エッセンス】を用いて、得られた図解を叙述化すると次の通りになる。

N6は、地域組織活動への参加を基盤にした相互交流の中で、『独居者にとっての効果』として『地域組織活動と生活の融合により日常生活に緩急をつけるスキルを獲得』していた。また、元警察官としての経験を『地域組織活動への取り組み方』に活かし、『家庭訪問や見守り活動では必要性を重視』した行動をとっていた。その結果、『様々な住民や保健師と長期的な相互支援関係を構築』するなど『活動仲間との互助』関係を形成するとともに、『地域で役割を果たす実感』を抱き『頼られる充実感によって使命感を自覚』していた。さらに、互助関係の構築と使命感の自覚は、日常生活における緩急スキルの獲得という『独居者にとっての効果』と相乗的に働き合っており、これらは娘や地域の人になど『他者に迷惑をかけまいとする意思』によって支えられ『普段からの体調管理』に繋がっていた。

C. シンボルマークが示す意味

次に、各最終ラベルと下位ラベルを示しながらシンボルマークについての説明を行う。最終ラベルは< >、下位ラベルは「 」とし、末尾には(ラベル No.)を提示している。

①【独居者にとっての効果：地域組織活動と生活の融合により日常生活に緩急をつけるスキルを獲得】

最終ラベルは、<自治会長など地域活動をする事は、平凡な毎日になるのを防いだり、頭を使うことで自分の成長の機会や認知症予防になったりと、一人暮らしの自分に良い効果があると感じている(F002).>となった。

自治会長など地域活動に携わることについて、「このままなんもせんでですよ。家にボサーッとしとったら、自分もこう人より早くボケるかなと思ったり。でも、こういうところ来るとやっぱ頭使いますよね、ある程度。気も遣いますし(067)」や「自治会長になったことでエクセルやワードの書類づくりなど勉強する機会となり、手探りで要領を掴んで取り組めた(A006).」「自治会長をしたことで平凡な毎日にならずに済み、一生懸命楽しくしたことが地域にも生きてかなと思うし、一人暮らしの自分には良い影響があったと思う(C012).」に代表されるように、日常生活の中に様々な減り張りが生まれ、認知症予防や成長の機会になったりと、一人暮らしの自分にとって良い効果があると感じていた。

②【地域組織活動への取り組み方：家庭訪問や見守り活動では必要性を重視】

最終ラベルは、<地域では家庭訪問や朝の見守り活動等を行っているが、その取り組み方には、元警察官の経験や家庭訪問の積み重ねを活かしつつも、各地域活動の目的を捉えることを大切にしている(F005).>となった。

地域で家庭訪問や朝の見守り活動等様々な実践をしているが、取り組み方については「私は、地域活動の大切さを熟知していたり、朝の見守り活動が交通違反の取り締まりになりかねない葛藤を払拭しながら取り組むなど、長短双方の影響を受けながらも元警察官の退職者としての活動の取り組み方を模索してきた(D010).」が示すように、職業経験を活かしながら取り組んできた一方で「地区によってはですよ。週に何回行けとか、月何回行けとか言う所があるんですよ。私は違うんですよ。自治会長してる時から、もう必要があるときでいいと思ってですよ(008).」のように、退職後の地域活動を始めてからの経験も踏まえ、活動の目的を重視していた。

③【活動仲間との互助：様々な住民や保健師と長期的な相互支援関係を構築】

最終ラベルは、<地域活動を通じて、様々な住民や包括の保健師さん等共に活動に精を出す仲間と出会い嬉しく感じるとともに、互いに助け合っていくことが大切だと実感している(F004).>となった。

「自治会長をしたことで自分の財産であると感じるほど人との関係が広がったが、地域活動を円滑に行っていくには、相手と互いに嫌な顔をせず補い合い助け合えるような関係性を構築することが重要である(C004).」のように活動仲間との関係性を長く続けるための態度を示している。また、「地区のことを真剣に話し合い長年繋がっている自治会長時代の同士の基盤としたグループには、包括の保健師さんも入っていて、頼りになる人で、とても良い結びつきがある(D009).」から、住民同士の関係性の構築に留まらず、関係の専門職とも円滑な関係性を築いていることがわかった。

④【地域で役割を果たす実感：頼られる充実感によって使命感を自覚】

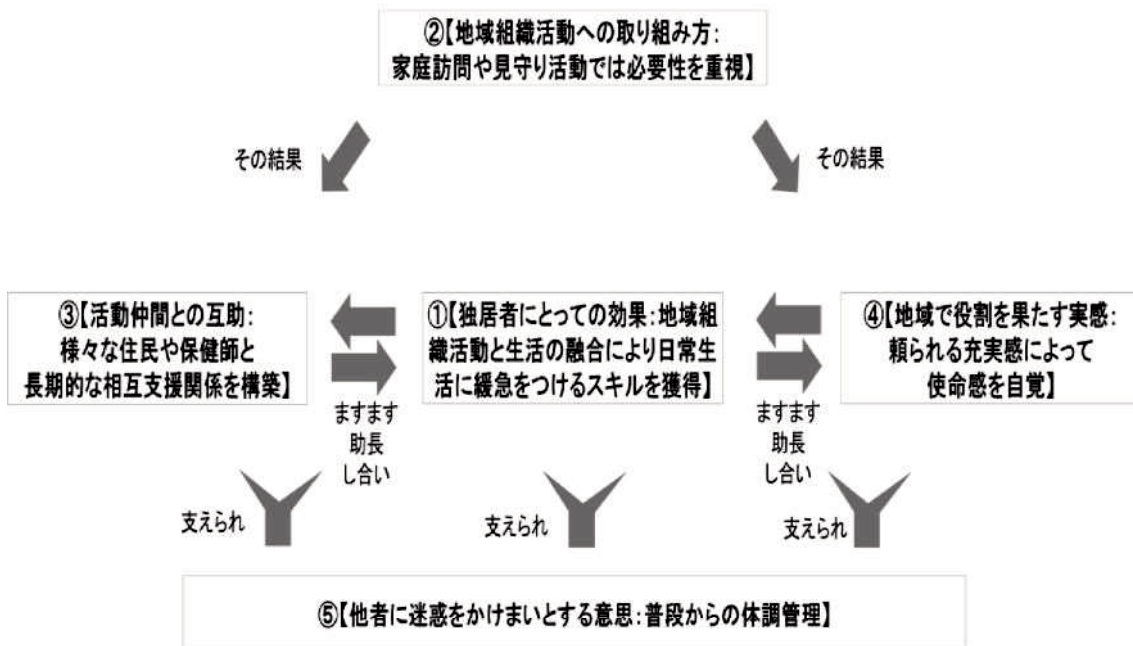
最終ラベルは、<地域の中で役員をはじめ役割を与えられたり、人から頼られることには充実感があり、自分の使命と考えこれからもやっつけようと思っている(F001).>となった。

N6は「(朝の見守り活動は)・・・まあ生き甲斐と言えば大げさになるけど、私の与えられた仕事かなってと思ってですね(051).」や「自治会長をしてからは相手の方から声をかけてもらえることも増え、人から頼られることには充実感を覚えている(C002).」のように、地域の中で役割を与えられたり、活動を通して人から頼られることに充実感を覚え、これからも続けていきたいと思っていた。

⑤【他者に迷惑をかけまいとする意思：普段からの体調管理】

最終ラベルは、＜短時間でも体を動かしたり、飲み会の前後はお酒を控える等、子どもたちや地域の人に迷惑や心配をかけないように普段から体調には気を付けている(F003).＞となった。

N6 は「健康でいたい一番のことは、子どもに迷惑は掛けたくないってこと(034)」や「自治会関係をしてる時はやっぱ病気になると、ほかの役員の人とか地区の皆さんに迷惑掛けるからとっていて.そういう意識はあったですね(036).」, 「短時間でも体を動かしたり、飲み会の前後はお酒を控えるようにする(F003).」などから、病気にならないように気を付けていることがわかった。また、「そういう(人とのつながりがあるという)意味では 1 人住まいですけども、まあいいかなと思いますね.体も悪くないし、子どもにも迷惑掛けんからですよ.いつまでこれが続くか分からんけども(020).」には、独居生活を今後も自立して続けていきたい意思が表れていた。



出典:金森ら.ケーススタディによる「地域組織活動を基盤に健康を保持する男性独居高齢者の相互交流」.リハビリテーション連携科学 2021; 22.(掲載予定)

図 9 地域組織活動での相互交流による N6 の健康維持

2. 独居高齢者の総合分析の結果

1) シンボルマークと図解の叙述化

N1～N6 の個別分析から得た合計 102 枚(N1 から 13 枚,N2 から 17 枚,N3 から 20 枚,N4 から 18 枚,N5 から 19 枚,N6 から 15 枚)を元ラベルとしてグループ編成を 6 段階まで行った結果,最終ラベルは 6 枚となり,これらに各シンボルマークを付けた.シンボルマークは,①【活動に充実感や心地よさを期待:配慮された運営や身になる企画】②【成員との友好的系譜を形成:豊富な人生経験が生む思考の幅】③【成員との友好的系譜の保持:人間関係を円滑に進める社会的スキル】④【活動による苦慮で心身の余裕を喪失:時間的,心理的活動負担】⑤【成員との関係性の中に居場所を感じる安心感:配偶者に代わる心の拠り所】⑥【活動刺激による認知的にメリハリのある日常生活:知的刺激の享受】であった.また,当分析のデータとなった N1～N6 のラベルがどのシンボルマークの元になったのかという関係と男女別の下位ラベル数を表 2 に示した.

表 2 総合分析のシンボルマークと個別分析の関係

総合分析の【シンボルマーク】	個別分析ごとの元ラベル数						男性 合計	女性 合計
	N1 (女)	N2 (女)	N3 (男)	N4 (女)	N5 (男)	N6 (男)		
【活動に充実感や心地よさを期待:配慮された運営や身になる企画】	1	3	4	4	6	1	11	8
【成員との友好的系譜を形成:豊富な人生経験が生む思考の幅】	4	3	3	2	4	4	11	9
【成員との友好的系譜の保持:人間関係を円滑に進める社会的スキル】	2	3	4	4	2	4	10	9
【活動による苦慮で心身の余裕を喪失:時間的,心理的活動負担】	1	0	7	1	3	0	10	2
【成員との関係性の中に居場所を感じる安心感:配偶者に代わる心の拠り所】	2	4	1	4	2	2	5	10
【活動刺激による認知的にメリハリのある日常生活:知的刺激の享受】	3	4	1	3	2	4	7	10
合計数	13	17	20	18	19	15	54	48

次に,【シンボルマーク】の〔事柄〕と〔エッセンス〕を用いて,得られた図解(図 10)について叙述化する.

地域組織活動での相互交流は,独居高齢者に長年の活動の中で,各人の〔豊富な人生経験が生む思考の幅〕を生じさせ,〔成員との友好的系譜を形成〕を生み出していた.同時に,〔成員との友好的系譜の保持〕のために相手に合わせた距離感のコントロールなど〔人間関係を円滑に進める社会的スキル〕をもたらし,独

居高齢者の根底に地域組織〔活動に充実感や心地よさを期待〕する感覚を覚えさせ、〔配慮された運営や身になる企画〕という観点での希望を引き起こしていた。また、このような友好的系譜の積み重ねは、〔活動による苦慮で心身の余裕を喪失〕するほどの〔時間的,心理的活動負担〕が影響しつつも,地域の中に〔配偶者に代わる心の拠り所〕を見出させ〔成員との関係性の中に居場所を感じる安心感〕を生じさせるとともに、〔知的刺激の享受〕を叶え〔活動刺激による認知的にメリハリのある日常生活〕をもたらしていた。

なお,“減り張り(メリハリ)”について,広辞苑では“ゆるむことと張ること”,加えて新辞林では“物事に緩急・強弱があること”とされているのに基づき,本研究では“生活の中で力を入れる所と抜く所の差がはっきりしているさま”という意味で用いた。

2) 各シンボルマークの意味

各最終ラベルと下位ラベルを示しながらシンボルマークについての説明を行う。最終ラベルは< >,下位ラベルは「 」とし,末尾には(ラベル No.,対象者 No.)を提示している。

① 【活動に充実感や心地よさを期待：配慮された運営や身になる企画】

最終ラベルは,< 地域活動への期待としては,交流の広がりまでは望めない厳しさがあつつも,活動の場としての充実感や心地よさが提供されるかどうかなど企画次第の側面がある(F003).>となった。これは,男性 11 枚,女性 8 枚の下位ラベルから構成されていた。

独居高齢者は,どの活動も携わる顔触れは同じであるという現状から交流の広がりには限界があることを感じつつも,「それぞれの出かける前の不安はさておき,参加者が行事後に来てよかったと感じるのに大切なことは,認知症模擬訓練時に得た認知症の理解のように,参加したことで何かをよく理解できたと感じることだろう(097,N5).」や「地域活動の運営は,関係者と情報交換をしたり,一括りにできない高齢者の年齢幅を考慮したりするなど参加者目線での内容の充実と参加の心地よさに対する配慮が大切だ.(D005,N1,N2,N4,N5,N6).」など,充実感や心地よさという視点から地域組織活動の活動企画や運営への期待を寄せていることが窺えた。

②【成員との友好的系譜を形成：豊富な人生経験が生む思考の幅】

最終ラベルは、<地域活動は、長年の活動でつくられた住民の深いつながりや各自の豊富な職業・人生経験の交流が生み出す思考の幅といった、日々の積み重ねによる友好的系譜が形成されていっている(F001).>となった。これは、男性11枚、女性9枚の下位ラベルから構成されていた。

独居高齢者は、「地域活動を積極的に行うことで、様々な年代や職業背景の人と知り合って繋がりができ、手ごたえを実感できている(B012,N2,N3,N5,N6).」や「地区のことを真剣に話し合い長年繋がっている自治会長時代の同士の基盤としたグループには、包括の保健師さんも入っていて、頼りになる人で、とても良い結びつきがある(078,N6).」のように、活動を通じて得られる様々な交流が人生の充実感に繋がっていることに喜びを感じていた。

③【成員との友好的系譜の保持：人間関係を円滑に進める社会的スキル】

最終ラベルは、<地域での活動を続けるにあたっては、人との距離感を関わる相手に合わせて整えたり、自分の取り組み姿勢を調整したりするなど成員との馴染んだ関係を維持し続けるためのコントロールを行っている(E005).>となった。これは、男性10枚、女性9枚の下位ラベルから構成されていた。

独居高齢者は地域組織活動で培った友好的なつながりを継続するために、「グランドゴルフの時に、自分の孫のことを自慢したり、個人的な話に踏み込んだりすることは不快な思いを生じさせてしまうといったことをわきまえて、みんな話を楽しむようにしている(013,N4).」など、「地域の中の付き合いでは、やり取りする相手に合わせて距離感や関わり方を調整したり、私生活には踏み込まないようにするなど相手とうまく関係性を持ち続けるための自分の中のスキルを働かせている(D001,N1~6).」ことが明らかになった。

④【活動による苦慮で心身の余裕を喪失：時間的、心理的活動負担】

最終ラベルは、<一人で暮らしながら地域組織活動をする場合、独り身の心細さを抱えて日常生活に追われつつも、関わりに神経を使うような住民への対応等をやりくりするようなこともあり心身ともに余裕がなくなる(D002).>となった。これは、男性10枚、女性2枚の下位ラベルから構成されていた。

「一人身で地域の役員を務めるというのは、地域組織活動の仕事に追われ日常

の中に自分の時間がないくらいに大変で、辞めようと思う者もいる(B010,N3,N5).」ほどで、独居ゆえに家事などの生活行為もすべて一人でこなさなければならぬ大変さや、「地域組織活動をしていると訪問がうまくいかなかったり、自治会に入っていない人に対応しないといけない等、必ずしも歓迎されない人にアプローチせざるを得ない苦労がある(B005,N3,N5).」など、地域組織活動で生じる心理的負担を一人で背負っている実態も判明した。

⑤【**会員との関係性の中に居場所を感じる安心感：配偶者に代わる心の拠り所**】

最終ラベルは、<亡き配偶者に心を寄せながら地域で一人暮らしをする者にとって、自分の居場所を感じ安心感を抱けるような人とのつながりは心の拠り所になっている(E003,N1,N2,N3,N4,N5,N6).>となった。これは、男性 5 枚、女性 10 枚の下位ラベルから構成されていた。

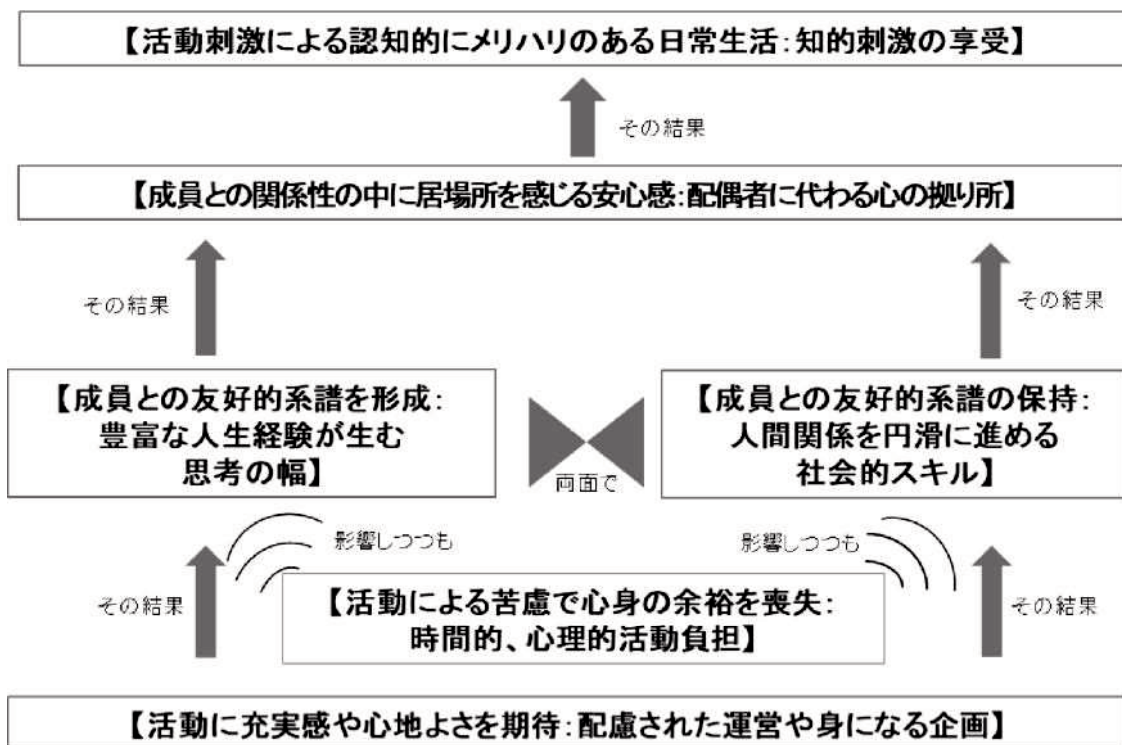
「親交の積み重ねによって構築された地域の仲間との楽しく親身なつながりは、地域の中での自分の存在を肯定できるような気持ちをもたらすとともに、夫と死別後の心の落ち込みから(独居高齢者を)救うこともあるほどである(D008,N1,N2,N4,N6).」ことが分かった。

⑥【**活動刺激による認知的にメリハリのある日常生活：知的刺激の享受**】

最終ラベルは、<一人暮らしの者の平穏な生活には、適度な社会との接点に身近な家族が安心したり、地域活動に参加して頭や気を遣い認知症予防の機会を持つなど、日常にほどよい刺激が組み込まれることが役立っている(F002,N1,N2,N4,N6).>となった。これは、男性 7 枚、女性 10 枚の下位ラベルから構成されていた。

独居高齢者は、「地域組織活動をすると日常的に頭や気を遣うことが多く毎日が充実しており、さらに勉強にもなるので、認知症の予防や自分の将来の役に立つ(C004,N5,N6).」と認識していたり、「地域組織活動が認知症予防など健康のために役立つのは、活動を通して人前で発表したり、何かを教えたりと目標を持つ機会があって、それに向かって一生懸命取り組むからだ(B004,N1,N2).」と捉えていた。また一方で、「自治会長をしたことで平凡な毎日にならずに済んだり、その時々々の家庭事情を反映したりと、地域活動と生活は密着していて一人暮らしの自分にはいい影響があったと思う(077,N6).」とも述べており、独居高齢者にとっ

て地域組織活動への参加に伴い発生する他者への気遣いや目標を持った懸命な取り組みは、平凡になる恐れのある生活の中に知的刺激をもたらし、認知的にメリハリのある日常を実現していることがわかった。



出典:金森ら.地域組織活動への相互交流によって健康を維持する独居高齢者の相互交流の構造.山口医学(2020年12月22日受理掲載予定)より改変

図 10 地域組織活動での相互交流による独居高齢者の健康維持

3. 家族同居高齢者の個別分析の結果

1) 家族同居高齢者 6名の概要(表 3)

本研究の参加者,家族同居高齢者 6名(N7~N12)は, 男性 3名,女性 3名の計 6名で,年齢は最少 67歳,最高 79歳で,平均は 72.0歳であった. 年齢分布について男女別にみると,男性 3名は最少 71歳,最高 79歳で平均年齢が 75.0歳,女性 3名は最少 67歳,最高 73歳で平均年齢が 70.0歳であった.また,家族構成は全員が配偶者との二世帯で,地域組織活動には高齢者サロンや自治会,見守りボランティアなどに各自が参加している状況であった.

表 3 研究参加者(家族同居高齢者 6名)の概要

	年齢	性別	居住歴	同居者	参加している地域組織活動	活動年数
N7	70歳代	男	42年	配偶者	民生委員, 高齢者サロン, 見守りボランティア	18年
N8	60歳代	女	32年	配偶者	高齢者サロン, 見守りボランティア, 地域のパトロール	9年
N9	60歳代	女	36年	配偶者	民生委員, 高齢者サロン, 健康運動教室	15年
N10	70歳代	女	50年	配偶者	老人クラブ, 見守りボランティア	15年
N11	70歳代	男	22年	配偶者	環境美化活動, 老人クラブ	10年
N12	70歳代	男	40年	配偶者	民生委員, 自治会, 老人クラブ, 高齢者サロン	6年

2) 家族同居高齢者の個別分析の結果

(1) N7の個別分析

A. N7の対象特性

N7は,70歳代の男性である.現在の居住地に約42年暮らしていて,配偶者と2人暮らしである.現在は,民生委員を務めるとともに地域の高齢者サロンや見守りボランティアに参加している.

B. シンボルマークと図解の叙述化

N7の元ラベルは102枚,6段階を経て7枚の最終ラベルとなり,次の7つの【シンボルマーク】を付けた.①【地域組織活動を支える信念:仲間を大切にす
る気持ち】②【健康を重要視:自分の健康も周りの健康も管理】③【地域組織活
動に潜む支え合い:気遣いを互いに表現する行動】④【億劫さを超える喜び:地

域組織活動が地域に浸透】⑤【地域組織活動に対する気持ちが変化：義務感から楽しみへ】⑥【モチベーションの維持：地域組織活動への臨み方をコントロール】⑦【家族の理解：支えられる安心感】である。図 11 は空間配置にシンボルマークを付けて図解化したものであり、【シンボルマーク】の〔事柄〕と〔エッセンス〕を用いて、得られた図解を叙述化すると次の通りになる。

自分の中に〔地域組織活動を支える信念〕として〔仲間を大切にする気持ち〕を覚えた N7 は、〔自分の健康も周りの健康も管理〕するなど〔健康を重要視〕していた。そして、この姿勢は〔気遣いを互いに表現する行動〕となり〔地域組織活動に潜む支え合い〕の礎になっていた。また、この支え合いは〔地域組織活動が地域に浸透〕していくことを促し、活動に携わる〔億劫さを超える喜び〕をもたらした結果、〔義務感から楽しみ〕へと〔地域組織活動に対する気持ちが変化〕するきっかけになっていた。同時に、N7 は〔地域組織活動への臨み方をコントロール〕することで〔モチベーションの維持〕をするとともに〔支えられる安心感〕を〔家族の理解〕により受けることで安定的な基盤を持って地域組織活動に取り組んでいた。

C. 各シンボルマークが示す意味

次に、各最終ラベルと下位ラベルを示しながらシンボルマークについての説明を行う。最終ラベルは〈 〉、下位ラベルは「 」とし、末尾には(ラベル No.)を提示している。

①【地域組織活動を支える信念：仲間を大切にする気持ち】

最終ラベルは、〈地域には、活動の活性化に向けた連携や昔からのつながりなど堅苦しいつながりから腐れ縁まで色々ある中で、私はどの仲間も大切にしている(E005).〉となった。

N7 は「昔からの関係や仕事の関係等、地域の中ではつながりが断続的な時期があったとしてもなんやかんやで繋がっており、色んな人と知り合いになれていると感じる(C013).」や「地域の人と楽しくつながりを持ってそうな場には、自分から望んで入れてもらったり、お裾分けなどでコミュニケーションを取ったりと積極的に関りの機会を持つようにしている(C014).」のように、人前で発表したり、話したりする機会を大切に捉えていることがわかった。

②【健康を重要視：自分の健康も周りの健康も管理】

最終ラベルは、<自分は、積極的に体を動かしたり、訪問先の相手の健康も真っ先に気遣ったりして、とにかく自分も周りも健康であるように気を付けている(E006).>となった。

「やっぱもう健康面をまず色々話してですね。で、まずはもう長い時間はもう、私も話すことあんまりないんですけど。まあ“上がってお茶飲みない”とか言うけど、もう玄関先でもうちょっと座って5分かそこら座って色々話したり。まあそういうことね(065)。」や「家の血圧計を使うようにしないとダメな感じがしたり、健康診断にきちんと行くようにしているなど健康づくりへの意識を高く持っている(B004)。」「自分はとにかくやれることは何でもやったり、外で日に当たったりといつも動き回っていて病気をし寝込む暇がないと感じている(B021)。」のように、N7は自他の健康を第一に考えていることが分かる。

③【地域組織活動に潜む支え合い：気遣いを互いに表現する行動】

最終ラベルは、<サロンでも日常でも地域の中では、相手の気持ちになって声をかけたり物を受け取ったりするなど気遣いを互いに表現する行動をとることで支え合いとなっている(F004).>となった。

「地域活動の参加者同士は、一人ぼっちの人が出ないようにお互いに座る場所を声掛けしあったり、目が悪い人の面倒を見てくれる人がいたりの良い雰囲気の中で助け合っていると思う(A032)。」や「参加者同士でみんなが楽しめるように声掛けをしあったり、休んでいる人がいれば気遣ったりと、助け合う雰囲気ができている(C007)。」のように、地域組織活動の相互交流の中でそれとなく互いを気遣い、助け合っている様子が認められた。

④【億劫さを超える喜び：地域組織活動が地域に浸透】

最終ラベルは、<地域活動の運営に携わることにはほんの少し億劫さを感じる時もあるが、サロンなどの活動が地域に根差していくことには喜びを感じる(F001).>となった。

「活動をするにつれてだんだん参加者が増えてきたり、よその地区からも見に来てくれるようなことがあり、これまでの活動の在り方が肯定されるようで嬉しい(C005)。」や「サロンで参加者同士が笑顔であいさつし合っていたり仲良く

している姿をみると、心底喜びが沸いてくる(C002).」 「サロンは、参加している人にとってもそうでない人にとっても、地域のみんなに共通する一つの話題とつながりになっている(D007).」 というように、地域組織活動が地域に根差していく効果を実感している様子であった。

⑤【地域組織活動に対する気持ちが変化：義務感から楽しみへ】

最終ラベルは、<地域活動の参加者からもらう感謝の言葉や喜びは、仕方なくやっている心と心のかたで感じていた私の気持ちをみんなのためにやりたいという前向きな気持ちに変化させた(F002).>となった。

「始めは民生委員としての責任感から参加していたが、参加者の楽しむ様子を見て、今は自分自身がみんなのためにできるうちに何かしたいと望むようになった (B018).」 や「サロンはお年寄りばかりだけど、色んな人と知り合いになってみんないい人ばかりでこの地区のために元気なうちにますます貢献したいと駆り立てられるくらい心底いい集まりだと感じる (A022).」 のように、地域組織活動での相互交流の中で気持ちが変化する様子を表していた。

⑥【モチベーションの維持：地域組織活動への臨み方をコントロール】

最終ラベルは、<地域活動は自分の仕事だと考え、人との関りや対応など一つ一つ楽しんだり積み上げたりすることによってモチベーションをコントロールしながら臨んでいる(F003).>となった。

「地域活動を楽しんでいるのは、人とのふれあいが好きということや、仕事だと思って臨むなどやりがいを感じているからだ (D006).」 や「一人暮らしの訪問やサロンなどの地域活動と仕事を両立するには、自分ができる範囲を見極めていくことが大切である(C017).」 のように、地域組織活動ではモチベーションを維持するためのコントロールが求められることを示していた。

⑦【家族の理解：支えられる安心感】

最終ラベルは、<まあそう子どもたちも別に何も言わないし、家内ももうまあやっぱ少し愚痴言いたいんでしょ。でも、やっぱちゃんと理解してくれてますからね.(036).>となった。グループ編成においてこのラベルと集まったラベルはなく、最後まで単独のラベルであった。

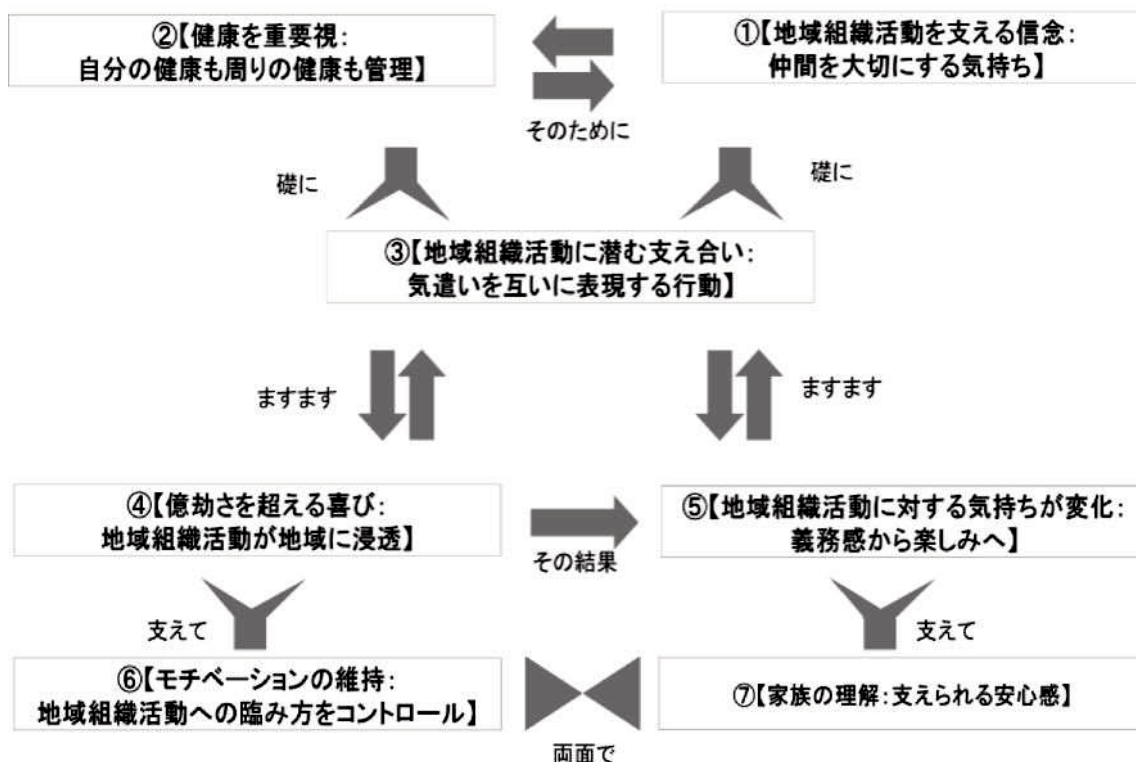


図 11 地域組織活動での相互交流による N7 の健康維持

(2) N8 の個別分析

A. N8 の対象特性

N8 は、60 歳代の女性である。現在の居住地に約 32 年暮らしている。配偶者と同居しており、現在は高齢者サロン、見守りボランティア、地域のパトロールに参加している。

B. シンボルマークと図解の叙述化

N8 の元ラベルは 90 枚、5 段階を経て 6 枚の最終ラベルとなり、次の 6 つの【シンボルマーク】を付けた。①【心地よい交流：深入りしない互いの気遣い】②【夫のサポート：良くも悪くも最大の理解者】③【自己ケア：参加を念頭に健康管理】④【心の充実：小学生や高齢者との心の通い合い】⑤【交流で得る自分の世界：母・妻としての生活範囲からの広がり】⑥【自己の成熟：豊かな考え方に変化】である。図 12 は空間配置にシンボルマークを付けて図解化したものであり、【シ

ンボルマーク】の〔事柄〕と〔エッセンス〕を用いて、得られた図解を叙述化すると次の通りになる。

N8は、地域組織活動を通して〔深入りしない互いの気遣い〕を前提とした〔心地よい交流〕を楽しんでおり、このことは〔良くも悪くも最大の理解者〕である〔夫のサポート〕を受けながら、地域組織活動への〔参加を念頭に健康管理〕を行うという〔自己ケア〕を基盤に実現していた。また、こうして実現した〔心地よい交流〕は、〔小学生や高齢者との心の通い合い〕といった〔心の充実〕や〔母・妻としての生活範囲からの広がり〕といった〔交流で得る自分の世界〕を生み出し、結果として〔豊かな考え方に変化〕するなどの〔自己の成熟〕に繋がっていた。

C. 各シンボルマークが示す意味

次に、各最終ラベルと下位ラベルを示しながらシンボルマークについての説明を行う。最終ラベルは〈 〉、下位ラベルは「 」とし、末尾には(ラベル No.)を提示している。

①【心地よい交流：深入りしない互いの気遣い】

最終ラベルは、〈私は、活動外でお茶会や食事会などのつながりを持つタイプではなく、調理や見守りなどで一緒に活動する人たちと互いに深入りせずその場での交流を楽しむことを大切にしている(D001).〉となった。

「私あまり深入りしないタイプというものもあるが、ボランティアをするみんなは余計なことは言わないとか社会的なわきまをきちんとしながら、その場の作業等を楽しんでいると感じている(B003).」や「男性は仲間同士飲みに行くこともあるようだが、私の場合は、活動以外で食事に行くなどの交流はしておらず、行事での作業を通してながら、その場での交流を楽しんでいる(A023).」のように、地域組織活動での相互交流は N8 に深入りしすぎずその場の関係性を大切にしながら楽しむ態度をもたらしていた。

②【夫のサポート：良くも悪くも最大の理解者】

最終ラベルは、〈主人はあくまでも参加はしないが、留守中の家事や送り迎えをしてくれたり、一方で余計な世話までしようとする私を思い留まらせるなど、

よくも悪くもサポートしてくれている(E006).>となった.

「近いところは自転車で往来するが,福祉センターみたいにちょっと離れたところに行くときなどは,主人が自分は参加しないけどなどと言いながら送り迎えをしてくれるようになった(B007).」や「主人は今までは一切家事をしない人だったが,私が活動するようになってからは,洗濯物を畳んでくれるなど協力してくれるようになったので,お互いのために良かったと思う(C007).」のように,夫は妻の最大の理解者であり,支援をしてくれる存在になっていることがわかった.

③【自己ケア：参加を念頭に健康管理】

最終ラベルは,<ボランティアは自分の目標にしたくなるような高齢でも元気な人に出会ったり,予定をきちんとこなすためには気候も気にせず自転車で動いたり,風邪をひかないように気を付けたりするなど健康管理に繋がっていると感じている(F004).>となった.

「(地域組織活動をすることは健康にいい影響があると)ものすごく思います.次,もう曜日全部予定が入ってるもんだから,風邪を引かないようにとか体調整えますし.朝もちゃんとその時間にと思うとですね(017).」や「元々は寒い日や暑い日に動いて回るようなタイプではなかったが,可愛い子どもたちとかボランティアのためだと思うと自転車でどこまでも頑張って動いて回れる(B001).」活動は体力の維持になると感じていて,実際サロンに来ている人たちは,自分の将来の目標であると感じるくらい 85 歳という高齢でもみんな元気だ(C004).」のように,地域組織活動を絶やさないための自己による健康管理を行っていることがわかった.

④【心の充実：小学生や高齢者との心の通い合い】

最終ラベルは,<サロンで悩みを持った参加者が段々明るい表情になっていたり,見守りをしている小学生やお年寄りに感謝や心配をされて心の通い合いを感じるととても感慨深い(F003).>となった.

「介護を抱えて最初は硬い表情でサロンに来ていた人が,段々みんなと打ち解けて活動に対し積極的になっていくのを見て嬉しく思い,地域の集まりの大切さを実感している(C012)」や「年のせいか最近は何を欲しいと感じなくなり,小学生から見守りの感謝状をもらうなど心に響くような出来事が嬉しくて,涙が出る

ほど心を満たされる(D010).」 「お年寄りなど近所の人にはちょっと話を聞いたりお手伝いするだけでも大層感謝し私の体の心配までしてくれて、本当に嬉しい(C011).」 のように、深い絆を持ちつつも距離感を考慮していることが分かった。

⑤【交流で得る自分の世界：母・妻としての生活範囲からの広がり】

最終ラベルは、<主人はあまり好んでいないようだが、ボランティアでは尊敬する仲間と一緒に人のお世話を楽しんだり、パソコンを勉強する機会を得たりと、母や妻としての狭い範囲の生活から広がって自分のための時間を生きていると感じている。(F002).>となった。

「会計のお手伝いでスマホで調べ物をしたり、議事録を作るためにパソコンの勉強をしたりと、普通のおばあちゃんなら機会がないような学びを持てることが嬉しい(C005).」 や「今までは子育てや孫などが中心の母や妻として狭い範囲の生活で動いていたけど、地域の活動をするようになってからは、自分自身の人生が広がったと感じている(A006).」 「主人は私がボランティアをすることを本当はあまり好んでいないが、今までは子どもと主人のための母親、妻としての人生だったのがボランティアをし出してからは自分の個の人生を生きている感じがあって私自身は充実している(A042).」 のように、地域組織活動を通して N8 は自分の世界が広がっていると感じていることがわかった。

⑥【自己の成熟：豊かな考え方に変化】

最終ラベルは、<ボランティアを始めてよその子やお年寄りに一層気を配ったり、仲間の成熟した考え方や行動を見習いたいと思うなど人付き合いに対する意識や関心の向け方が変化して自分の考え方を豊かにしたと感じている(F001).>となった。

「ボランティアは、自分と合わない人とでもうまく距離をもって付き合えるような人の集まりで、私も成長する機会になると思うくらいみんな成熟している(D005).」 や「ボランティアをして仲間意識が沸くようになってからは、身内が増えたような感覚になるほどよその子や見守りのお年寄りなどへの気配りの意識が一層増した(D009).」 のように、N8 は考え方が豊かになったという意識をもっていることが分かった。

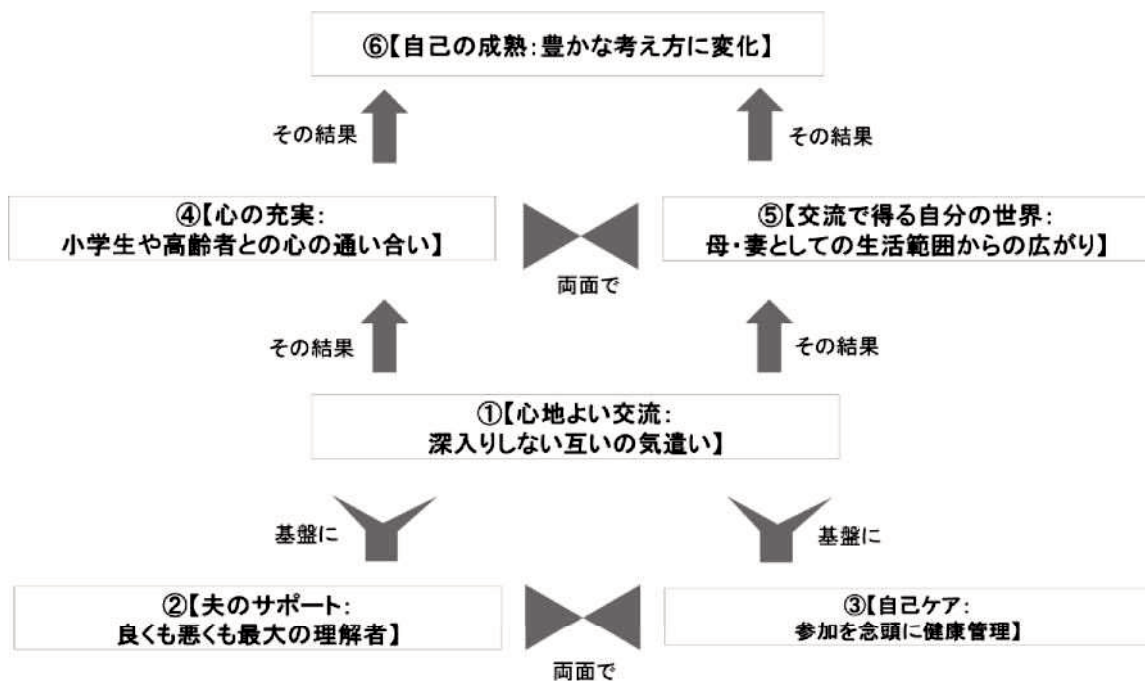


図 12 地域組織活動での相互交流による N8 の健康維持

(3) N9 の個別分析

A. N9 の対象特性

N9 は、60 歳代の女性である。現在の居住地に約 36 年暮らしている。配偶者と二人暮らしで、現在は民生委員を務めるとともに高齢者サロンや健康運動教室の運営に参加している。

B. シンボルマークと図解の叙述化

N9 の元ラベルは 70 枚、5 段階を経て 6 枚の最終ラベルとなり、次の 6 つの【シンボルマーク】を付けた。①【心の豊かさの源：様々な人との出会いで育まれる】②【世話役としての意欲：頼られるゆえの役割意識】③【持病の管理：活動を休まない努力】④【全面的な夫の支援：相談、交代、手伝い】⑤【支え合いの連鎖：みんなが互いに助け合う】⑥【参加目的意識の未成熟：自分の健康のために参加するという理解の促し】である。図 13 は空間配置にシンボルマークを付けて図解化したものであり、【シンボルマーク】の『事柄』と〔エッセンス〕を用いて、

得られた図解を叙述化すると次の通りになる。

N9 は、『心の豊かさの源』が地域組織活動での「様々な人との出会いで育まれる」と感じ、「頼られるゆえの役割意識」から『世話役として意欲』を燃やしていた。そして、このことは活動に絶やさず参加したいという意識を N9 の中に生み、「活動を休まない努力」としての『持病の管理』に繋がっており、こうした持病を管理しながらの地域組織活動は、「相談、交代、手伝い」といった『全面的な夫の支援』によって支えられていた。また、N9 は、地域組織活動を通して地域で「みんなが互いに支え合う」という『支え合いの連鎖』ができていく実感を持っている一方で、参加者の中には「自分の健康のために参加するという理解の促し」を必要とするような『参加目的意識の未成熟』な者がいることを課題に感じており、このことは N9 の役割意識をさらに向上させていた。

C. 各シンボルマークが示す意味

次に、各最終ラベルと下位ラベルを示しながらシンボルマークについての説明を行う。最終ラベルは〈 〉、下位ラベルは「 」とし、末尾には(ラベル No.)を提示している。

①【心の豊かさの源：様々な人との出会いで育まれる】

最終ラベルは、〈私は、地域の活動をする中で見習いたいと思う人や意見が食い違う人など良くも悪くも様々な人や場面に出会うおかげで、心が豊かになり元気でいられる(F001).〉となった。

N9 は「民生委員として地域で活動する中では感情の処理に苦慮するほど意見が食い違う自治会長さんと出会う一方で、年下でも見習いたいと思うような人もいるなど精神的に強くなるような刺激を様々な受ける(D001).」や「自分が元気なのは、サロンや健康体操という行く場所があるという事やそこで出会う人の笑顔に触れることができているからだと思う(C003).」のように、地域組織活動を通して出会う様々な人や場面が元気の源になっていると感じていた。

②【世話役としての意欲：頼られるゆえの役割意識】

最終ラベルは、〈私は民生委員やサロンのお世話役として地域の人に頼られると若干の無理を重ねても頑張ってしまうところがある(E001).〉となった。

「サロンを辞めたいと思ったこともあるがサロンが無くならないようにとか自分が元気な間は何とかしていこうという思いもあり,今も続けている(B013).」や「サロンでは,みんなが飽きないように内容を考えてゲームを借りに行ったり,お雛様など季節の物を作るための下準備で夜なべしたりと,結構手間暇をかけている(B008).」のように,N9には地域組織活動で人の役に立つためなら若干の無理はいとわなない様子が認められた.

③【持病の管理：活動を休まない努力】

最終ラベルは,<脊柱管狭窄症を持っていて本当は耐えがたいほどの痛みがあるのだが,活動は絶やさず続けたいと医者注射をお願いしたり,毎日必ず1時間歩くようにしている(D008).>となった.

「薬を飲んでもなかなか治らないのだが,筋肉を動かした方がいいんじゃないかと思ったり,(別居の)娘から痛くても動くよう言われるなどしたため,毎朝1時間自分のためと思ひ歩くようにしている(B006).」や「脊柱管狭窄症を持っているので,朝起きてすぐや,寒いときは痛くてきついときもあるけれど,薬を飲みながら活動は絶えず行っていた(A014).」のように,N9は地域組織活動を続けたいがゆえに持病のコントロールに尽力していることが分かった.

④【全面的な夫の支援：相談,交代,手伝い】

最終ラベルは,<主人はサロンの案内を作るのに相談にのってくれたり,活動の準備を手伝ってくれたり,時には体調が悪い私に代わって行ってくれるなどあらゆる面で大きな支えになっている(C008).>となった.

「主人は家事で忙しい私に代わって,机や椅子の準備をしてくれるだけでなく,例えば自分のために出てきてほしいなどサロンの案内でどんなことを伝えたらよいかなどの相談にものってくれる(B004).」「サロンでは様々な活動をしているが,準備の竹わりやみんなに大事なことを伝えるための工夫,さらには調子が悪い時は変わってくれる等の協力を主人がしてくれて,大きな支えになっている(B012).」のように,全面的に夫の支援を受けていることがわかった.

⑤【支え合いの連鎖：みんなが互いに助け合う】

最終ラベルは,<サロンを通して人のつながりができ,参加者同士顔を見て互

いの様子を気かけ合ったり,お世話役は支援が必要な人のために助け合ったりとみんなが支え合っていることを実感する(F002).>となった.

「いつもはきれいなのに草がぼうぼうになっていたところから,ご主人の看病で大変になっていることに気づいてたら,仲間たちが気づきにすごいねというだけでなく,一緒に草取りをしてくれて心から嬉しかった(A024).」や「心配な人は誘ったりもするが,サロンがおしゃべりだけでも来れるような雰囲気になったことで,今まで来なかった人が来るようになったり,来ていない人を心配したりできるようになり嬉しい(D003).」「まあ見守りで回るときもそうだし.サロンとか健康体操に来られて,その人の状態って言うか.笑顔なのか,あっちょっと暗いな.暗いなどか思う,会った時にね(088).」のように,地域組織活動を通じてできた人のつながりによって地域の人同士に助け合いの関係性が築かれている様子が認められた.

⑥【参加目的意識の未成熟：自分の健康のために参加するという理解の促し】

最終ラベルは,<サロンでは市の出前講座を頼んだり,自主練習をしたりと色々工夫をしており,みんなには自分の健康のために参加するという意識を持ってほしいと思っている(E004).>となった.

「市の出前講座を頼んだりはしているが,2025年問題も地域組織活動に来るのも,基本的には人ではなく自分のためであるとみんなに気づいてもらいたくて,何とか工夫していきたいと考えている(B009).」や「もう(自主練習への参加の)顔ぶれが分かってて.でも,その方は自主練習の時にも来てくださるんですよ.だからやっぱり自分の体のことを考えてらっしゃるんだな~って,やっぱり思いますもんね.で,やっぱりそんなあると,やっぱり私たちも嬉しいし(059).」のように,N9は参加者に地域組織活動に参加して相互交流することは,N9(私)のためでなく自分のためであると気づいてもらう大切さを感じていた.

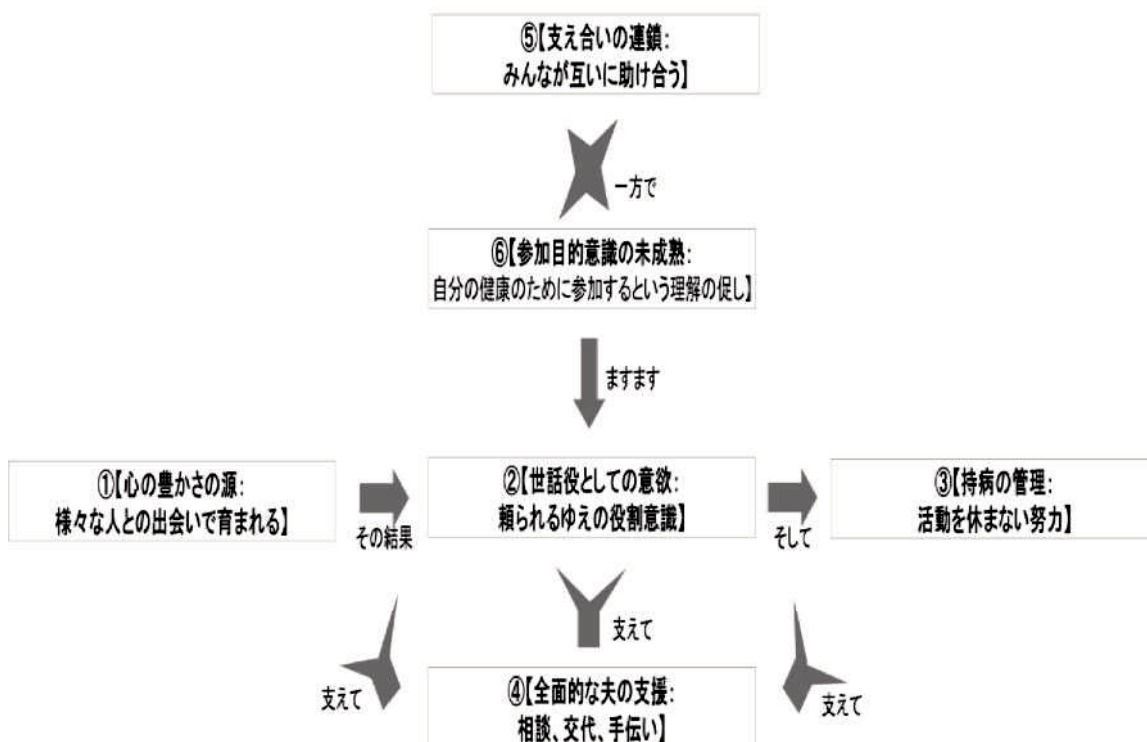


図 13 地域組織活動での相互交流による N9 の健康維持

(4) N10 の個別分析

A. N10 の対象特性

N10 は、70 歳代の女性である。現在の居住地に約 50 年暮らしている。配偶者と二人暮らしで、現在は老人クラブや見守りボランティアに参加している。

B. シンボルマークと図解の叙述化

N10 の元ラベルは 73 枚、6 段階を経て 6 枚の最終ラベルとなり、次の 6 つの【シンボルマーク】を付けた。①【横のつながりが大切：親睦を深める機会を増やしたい】②【どんなときも楽しく場に適応：人に溶け込む力】③【相手に合わせた対応：声掛けや接し方の工夫】④【一歩進んだ行動：人や行政とのつなぎ役】⑤【人の役に立つ喜び：皆が楽しむ多彩な活動】⑥【健康への気遣い：血圧測定や運動】である。図 14 は空間配置にシンボルマークを付けて図解化したものであり、【シンボルマーク】の『事柄』と『エッセンス』を用いて、得られた図解を

叙述化すると次の通りになる。

N10は、地域組織活動においては役員同士の『横のつながりが大切』であると考え、〔親睦を深める機会を増やしたい〕と望む一方で、自分自身は持ち前の〔人に溶け込む力〕を発揮し『どんなときも楽しく場に適応』できるという特長を基盤に、〔声掛けや接し方の工夫〕によって『相手に合わせた対応』をしたり、〔人や行政とのつなぎ役〕を意識した言動など『一歩進んだ行動』をとっていた。それゆえに、N10は〔皆が楽しむ多彩な活動〕の展開から『人の役に立つ喜び』を実感することで、今後も地域組織活動を継続していきたいとの思いが芽生え、〔血圧測定や運動〕など『健康への気遣い』を行っていた。

C. 各シンボルマークが示す意味

次に、各最終ラベルと下位ラベルを示しながらシンボルマークについての説明を行う。最終ラベルは< >、下位ラベルは「 」とし、末尾には(ラベル No.)を提示している。

①【横のつながりが大切：親睦を深める機会を増やしたい】

最終ラベルは、<私自身は役員をしてどんどん知り合いが増えているが、中にはあまり親睦を深めることができている人もいない人もいます。食事会や研修会など横のつながりができる機会がもう少しあっても良いと思う(D004).>となった。

N10は地域組織活動を通して「役員の中にはお茶くみなどの仕事に追われてあまり親睦が深められない人もいますし、食事や研修会などもっと横のつながりがあるとよいのと思う(B009)」や「隣町の人と健康増進のイベントで出会って友達になったり、地区内で役員同士、活動を行き来して体操を教えたりと知り合いがますます増えて嬉しい(C005)」のように、役員同士の横のつながりを作るためには親睦の機会が必要だと考えていた。

②【どんなときも楽しく場に適応：人に溶け込む力】

最終ラベルは、<地域で人と向かい合う中では、多少腹が立つことがあっても気持ちを切り替えたり、誰それから声をかけられることを楽しんだりと私にはみんなの中に溶け込む力が備わっている(E001).>となった。

「昔からのつながりもあり、民生委員になってお年寄りの中にずっと溶け込み

色んな人に覚えてもらえているようで、どこへ行っても誰それから声をかけられて嬉しい(C003).」や「私は以前は訴えてやろうかと思うくらい腹が立つこともあったけど、今はバカを相手にしても損って気づいて絶対後ろを向かないって決めていて、開き直るようにしてるから毎日がバラ色のように楽しい (B007) .」のように、N10 は地域組織活動の相互交流においてどんなときも楽しく場に適応するための人に溶け込む力を意識的に大切にしていることが分かった。

③【相手に合わせた対応：声掛けや接し方の工夫】

最終ラベルは、<私はレクレーションや訪問など高齢者向けの活動をする中では、声掛けや接し方など相手に合わせて対応を調整し、互いに心地よく過ごせるように工夫している (E002) .>となった。

N10 は「レクレーションをするときは、認知症の人にも座って体操をやらせたり、数字を数える遊びはする人に合わせて中身を変えたりするなど誰もが程よく参加できるように考えている (C004) .」や「私を信用して家庭や子供などデリケートなことまで話す寂しそうなお年寄りもいれば、訪問よりも電話の方が妥当だと感じることもあるなど、相手の様子によって対応の仕方を変えることが大切だと感じている (D005) .」のように、相手に合わせた対応をするための工夫にいつも取り組んでいた。

④【一歩進んだ行動：人や行政とのつなぎ役】

最終ラベルは、<私は、馴染みのみんなとよく話しながら行政のつなぎ役になることや活動の場が広がるよう率先した働きかけをするなど、いつも一歩進んだ行動をとるようにしている(E004) .>となった。

「歌や体操など頼まれていないことでも率先してやったり、サロンの曜日や回数を考え直してみたりと、高齢者のためにいつでも一歩進んだ行動をするようにしている (D007) .」や「包括とか色々あるが、みんなはあまり知らないから、みんなには色々話したり、聞いたことを包括の人に伝えて回ってもらったりとパイプ役みたいに使ってもらえたらいいなと思っている (A002) .」というように、N10 は地域組織の中で常に地域の人のために役立つための一歩進んだ行動をとろうとしていた。

⑤【人の役に立つ喜び：皆が楽しむ多彩な活動】

最終ラベルは、<私は、サロンでは冗談を交えたおしゃべりをしたり、それ以外でも多彩に活動できるような場づくりをして、地域の集まりを通じ、みんなの気持ち盛り上がるのが嬉しい(E003).>となった。

「若い頃は話すのにドキドキしていたが、今はお喋りすることが考えなくてもボロボロ出てきて、自分の皺をネタにするような冗談も交えたりしながら場を盛り上げている(C007).」「私は楽しいことが大好きで、体操やサロンでみんなの雰囲気を見ながらしゃべったりすると、みんながあなたがおるから楽しいとか言ってくれて何よりも嬉しい(B010).」「体が悪くて暗い感じだった人も元気になるほど、サロンをベースにした仲間がランドゴルフやカラオケなど色々な活動ができていてとても充実している(D006).」のように、N10は地域組織活動でみんなが楽しめる雰囲気づくりを通して人の役に立てる実感を感じていることがわかった。

⑥【健康への気遣い：血圧測定や運動】

最終ラベルは、<私は主人に見守られながら友達との遊びや地域の活動などに楽しく動いて回ることは元気の源だと思っており、血圧を測ったり運動をして健康に気を遣い、続けられるようにしている(F001).>となった。

「自分の元気の源である地域の活動をできる限り続けていきたいと思い、運動のために階段を上り下りしたり、血圧を毎朝測るなど健康に気を付けている(D003).」や「私にとっては友達と遊んだり旅行に行ったり、ボランティアをするのが元気の源でこれからもできるだけやっていきたいと思っているが、主人はいつも何も言わずに見守ってくれて本当に理解があると感謝している(B003).」のように、N10は夫の理解を感じながら地域組織活動を続けていけることは自分が健康で居続けるために大切なことだと感じており、今後も継続できるようにと血圧測定や運動などの保健行動をとっていた。

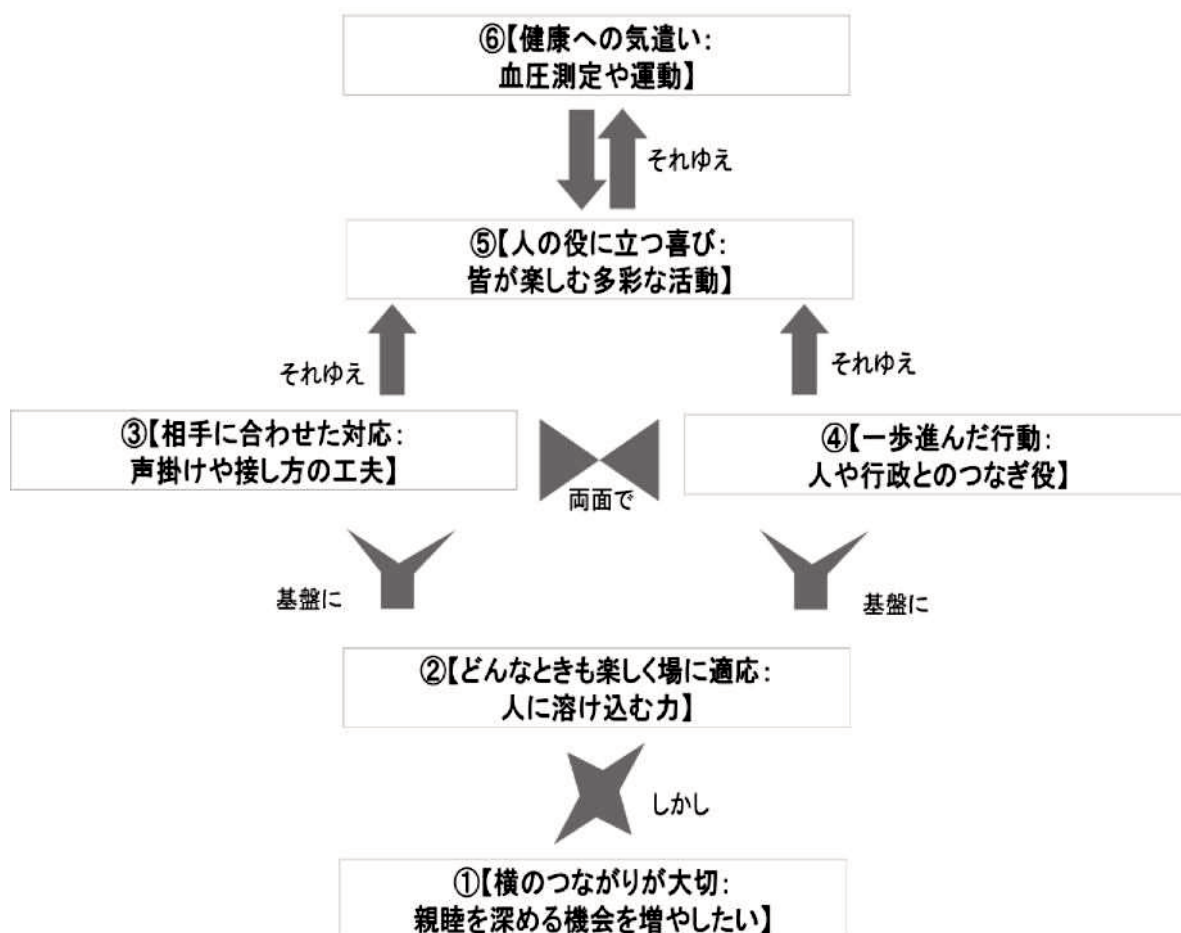


図 14 地域組織活動での相互交流による N10 の健康維持

(5) N11 の個別分析

A. N11 の対象特性

N11 は、70 歳代の男性である。現在の居住地に約 22 年暮らしている。要介護状態の妻と二人暮らしで、現在は老人クラブをベースにした環境美化活動(地域の公園清掃活動)と老人クラブのグランドゴルフに参加している。

B. シンボルマークと図解の叙述化

N11 の元ラベルは 74 枚、5 段階を経て 6 枚の最終ラベルとなり、次の 6 つの【シンボルマーク】を付けた。①【継続への意欲: 楽しい会話をもたらす人との交流】②【継続に対する葛藤: 活動負担と介護のバランス】③【住民の自助努力: 地域

への愛着を形成】④【自分自身の健康管理：介護の気分転換】⑤【妻の後押し：介護の合間のストレス解消】⑥【介護と地域組織活動の両立：介護は全て自分が背負う気概】である。図 15 は空間配置にシンボルマークを付けて図解化したものであり、【シンボルマーク】の『事柄』と〔エッセンス〕を用いて、得られた図解を叙述化すると次の通りになる。

地域組織活動をしているとちょっとした会話や労い、賞賛などの〔楽しい会話をもたらす人との交流〕があり〔継続への意欲〕を持つことができる一方で〔活動負担と介護のバランス〕から〔継続に対する葛藤〕を抱えるなど、〔地域への愛着を形成〕し〔住民の自助努力〕をすることが重要だと考えるがゆえの苦悩を持っていた。同時に、N11 は、地域組織活動への参加について〔介護の気分転換〕になると認識し〔自分自身の健康管理〕の手段であると考えており、さらには〔介護の合間のストレス解消〕になると肯定的に捉えてくれている〔妻の後押し〕を力に〔介護と地域組織活動の両立〕を図り、〔介護は全て自分が背負う気概〕であった。また、〔介護と地域組織活動の両立〕を図って〔住民の自助努力〕に貢献したいという思いと〔住民の自助努力〕を果たすために〔介護と地域組織活動の両立〕をしようとする思いは相乗的に働いていた。

C.各シンボルマークが示す意味

次に、各最終ラベルと下位ラベルを示しながらシンボルマークについての説明を行う。最終ラベルは< >、下位ラベルは「 」とし、末尾には(ラベル No.)を提示している。

①【継続への意欲：楽しい会話をもたらす人との交流】

最終ラベルは、<公園の花の手入れをしていると水やりや肥料のことをきっかけにちょっとした会話の機会があったり、いつも通りがかかる人などから賞賛や労いの言葉をかけられるなど、気持ちが晴れ晴れするようなやり取りを経験する(D004).>となった。

「公園で花の手入れをしていると人知れず見ていてくれるようで、犬の散歩の人からお疲れ様と声をかけられたり、花が綺麗なことや長く続けていることを賞賛されるなど労いを受ける気持ちになる(B011).」や「公園で花摘みや草取りをし

ていて、通りがかりの人がお疲れ様と声をかけてくれたり、喜んでくれたりすると疲れが吹き飛んでしまうような気持ちになる(D008).」のように、N11 は地域組織活動で生じる人との交流から活動を継続する喜びを感じていた。

②【継続に対する葛藤：活動負担と介護のバランス】

最終ラベルは、<妻の介護度が杖でさえ歩けなくなるほど進んでいる現状があり公園の整備は先頭ではなくお手伝い位にまわりたいと思っているが、後の人が決まらない中でも整備を地元で続けていく必要性を感じることもあり何とか続けている(E004).>となった。

「もう 83 歳を超えたような高齢の人ばかりなので、早く若い人に交代したいと思いつつ、後が見つかるまでは何とか続けないと公園がボロボロになると思い、できる範囲で工夫しながら一生懸命やっている(C002).」や「妻が以前に脳出血で倒れて、段々悪くなって行って最近は杖で歩くこともできなくなったので、公園の整備は加勢はしても先頭に立って続けるのは難しいと感じ、後の人探しをお願いしている(C006).」のように、N11 は地域組織活動に尽力する負担と妻の介護のバランスをとるといふ葛藤を抱えていた。

③【住民の自助努力：地域への愛着を形成】

最終ラベルは、<長年公園整備という地域組織活動を続ける中で、綺麗な公園を喜ぶ人の様子を見聞きしたり、自分の中に湧いてくる地域や公園への愛着を感じたりすることを通して、地元の公園は地元で手入れするという自助努力の重要性を感じている(E002).>となった。

「最初は軽い気持ちで始めた公園の整備であったが、綺麗な公園を喜んでくれる人の反応を感じながら長年続けるうちに愛着が湧いてきて、地元の公園は地元で手入れをする大切さを感じるようになった(D007).」や「草取り自体は日曜日の 7 時半からであるが、市の公園だけどやっぱり自分のところの公園だと思いと地元の自分たちでやりましょうという気持ちになる(A004).」のように、N11 は地域組織活動を長年する中で地域への愛着が芽生えたり、住民が自助努力する大切さに気付いていた。

④【自分自身の健康管理：介護の気分転換】

最終ラベルは、<公園の整備に出ることは、介護で追い込まれすぎないように気分転換をするなどあくまでも自分の健康を保つためなので、腰が痛い等体調がすぐれないときは休養をとるなど程よいペースも大事にしている(D005).>となった。

N11 は「私は家内の介護だけでは頭がおかしくなるんじゃないかと思うところもあり、暑さが堪えることもあるが空いた時間にできるので丁度いいと思って健康のために公園での活動をしている(B017).」や「時々腰が痛いとか体調が悪い時もあるので、そういう時は休養を取って元気を取り戻すようなことを繰り返しながら活動している(A007).」というように、地域組織活動で介護の気分転換を行う一方で自分自身の健康管理を重要視していることがわかった。

⑤【妻の後押し：介護の合間のストレス解消】

最終ラベルは、<家内は介護が必要な状態であっても、公園に行く私にベッド上からいってらっしゃいと声をかけてくれたり、公園に行くことはストレス解消になると肯定してくれるなどいつも背中を押してくれる(E001).>となった。

「家内も元気な時はいつも公園を歩いていたこともあってか、私が介護の合間に公園に行くことはストレス解消になっていると感じてくれているようだ(C001).」や「私の家内は介護が必要な状態だが、いつもベッドの上から公園へ行く私に行ってらっしゃいとか帰ったらお帰りなど声をかけてくれたりしてくれて理解があると感じるので公園へ行くことができている(B009).」のように、N11にとって妻の言動が地域組織活動参加への後押しになっていた。

⑥【介護と地域組織活動の両立：介護は全て自分が背負う気概】

最終ラベルは、<私が介護の合間で公園の整備をして快活さを味わえるのは、子どもにはよほどのことがない限り頼らないと割り切り、家内の介護も自分でする気概を持って、介護と公園での活動の両立を図っているからだと思う(E003).>となった。

「自分の子どもをはじめ若い人はみんな仕事を持っているので、あくまでも家内の介護は自分でするという気概で行っているし、若い人とはもし自分が倒れたら後はお願いするくらいの感じでの付き合いの方がいいと思っている(A015).」

や「やっぱり家族の協力がないとできないと思うが,子どもにはよっぽどのことがない限りは家内の介護も頼まないくらいの距離感をもっていないと公園での活動もできないと思うし,かえって元気であることもできないと思う (A016).」

「公園に来て,まあ汗かいたら気持ちいいですよ.そういう公園に行って汗かいて帰ってシャワー浴びたら,あ〜気持ちがいいってなるでしょう(024).」のように,N11 は子どもには頼らず自分の範疇で妻の介護と地域組織活動を両立させ,その中で自分も快活さを味わえることの大切さを感じていた。

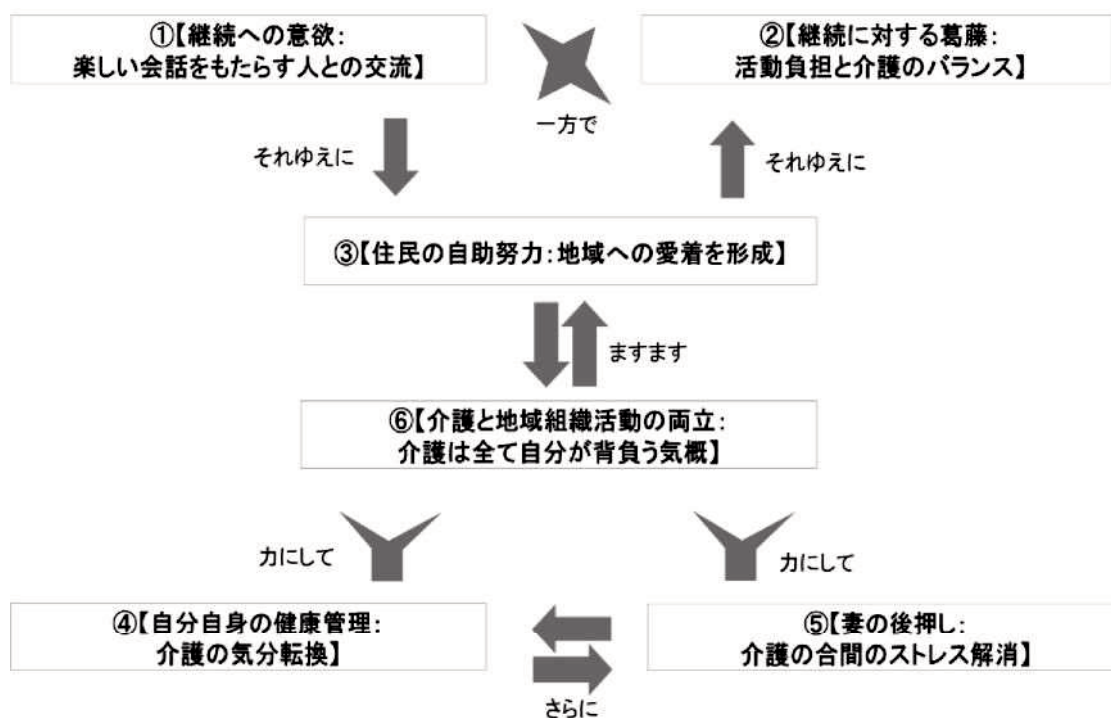


図 15 地域組織活動での相互交流による N11 の健康維持

(6) N12 の個別分析

A. N12 の対象特性

N12 は,70 歳代の男性である.配偶者と二人暮らしで,現在の居住地に約 40 年

暮らしている。現在は民生委員を務めるとともに地区の自治会活動、高齢者サロン等に参加している。

B. シンボルマークと図解の叙述化

N12 の元ラベルは 71 枚、5 段階を経て 7 枚の最終ラベルとなり、次の 7 つの【シンボルマーク】を付けた。①【認知症がもたらす困難性：周囲が気づきにくく家族にしかわからない苦労がある】②【集まりの場で人と交流：認知症を予防】③【日々にアクセントがつく：脳が活性化】④【住民のネットワーク：仲間関係の形成】⑤【地域住民の親睦：仕事が円滑に進む】⑥【自分なりの決心：うまくいかないことがあってもめげずにやる】⑦【家族からの後押し：民生委員だった父や応援してくれる妻】である。図 16 は空間配置にシンボルマークを付けて図解化したものであり、【シンボルマーク】の『事柄』と『エッセンス』を用いて、得られた図解を叙述化すると次の通りになる。

N12 が地域組織活動に取り組む理由の中心には、認知症には『周囲が気づきにくく家族にしかわからない苦労がある』と感じるなどの『認知症がもたらす困難性』があり、地域の人々の『認知症を予防』するために『集まりの場で人と交流』することを推進したり、地域組織活動に参加することで『日々にアクセントがつく』ことを望み『脳が活性化』することを期待していた。また、地域に『住民のネットワーク』ができ『仲間関係の形成』が成されることであつたり、『地域住民の親睦』が深まって『仕事が円滑に進む』ようになることは、地域全体での助け合いの構築につながり、認知症の人やその家族を助ける手段になると考えていた。一方で、地域組織活動の取り組みにあたっては、活動が思うように広がらないなどの課題にも直面するが『うまくいかないことがあってもめげずにやる』と『自分なりの決心』を決めて臨んでおり、このように地域のために尽力する背景には『民生委員だった父や応援してくれる妻』など『家族からの後押し』があることが認められた。

C. 各シンボルマークが示す意味

次に、各最終ラベルと下位ラベルを示しながらシンボルマークについての説明を行う。最終ラベルは〈 〉、下位ラベルは「 」とし、末尾には(ラベル No.)を提示

している。

①【認知症がもたらす困難性：周囲が気づきにくく家族にしかわからない苦労がある】

最終ラベルは、<認知症の人は、周囲には一見立派な受け答えをされたりするので私も全然気づけなかったりするが、認知症の親の世話をしようとして帰ってきた子どもが喧嘩して出て行ってしまう家庭をみると身近な家族にしかわからない大変さがあるのだろうと察する(C002).>となった。

「認知症の人とずっと付き合っていると同じ話を繰り返すことに気づくことがあるが、その時々にはサロンを賞賛されるなど立派な受け答えもされるので、訪問するくらいでは全然わからないというのが正直なところだ(A001).」や「認知症になると大体子どもが帰ってきて世話をすることが多いようだが、結局喧嘩して出て行っちゃってさらに認知症が進むという家庭を2つくらい見た(A008).」のように、N12は認知症は自分自身も対応をしてもなかなか気づくのが難しいと感じていることや認知症の人の家族は家族にしかわからない苦労を抱えているのだろうと察し、対応の困難性を慮っていた。

②【集まりの場で人と交流：認知症を予防】

最終ラベルは、<認知症を予防するためには、とにかく地域の集まりに出てきてみんなでしゃべって、相手と目を合わせたりすることで脳を活性化することが大事なのだ、集まりに来なくなってすぐに亡くなった人たちの前例から実感している(E003).>となった。

「サロンなどみんなが集まって顔を合わせてワイワイしゃべるだけで、相手と目を合わせたり認識したりするので脳が活性化して認知症予防になると思っている(D001).」や「集まりに来なくなると孤立するのか来なくなった後亡くなったという人が2件くらい続いたことで一層出てきてもらうことの大切さを感じみんなにも伝え続けている(C006).」のように、N12は地域組織活動を通じて人と集まり交流するだけでも認知症の予防になると考え行動していた。

③【日々にアクセントがつく：脳が活性化】

最終ラベルは、<民生委員をしていると地域のことを心配するなど、仕事や家庭のことだけで過ぎてしまいそうな日々にアクセントがつき、脳が活性化して認

知症にならずに済むのではないかと思うことがあり,自分のために励んでいる(D002).>となった.

「私はよそ者ながら始めた民生委員だが,民生委員をしているおかげで脳が良く働いてぼけたりしなくなっているのではないかと思っていて,これからも辞めずに続けようと思っている(B010).」や「仕事や家庭のことだけでぼーっと過ごすのではなく地域のこともして認知症の人を心配したり,物事の成り行きを考えるようなことで日々にアクセントを持つことが認知症にならないコツではないかと思う(C010).」のように,N12は地域組織活動に参加することによって日々の中にアクセントをつけ脳を活性化したいと考えていた.

④【住民のネットワーク：仲間関係の形成】

最終ラベルは,<私は,向こう三軒両隣が理想だと思っていて,よそ者と地の者の区別や世代を超えてみんなが互いに気にかけていたり,地域の会やクラブ同士のつながりを使ってネットワークを作ったりすることで,住民の仲間関係を形作っていけることが嬉しい(E002).>となった.

「認知症の徘徊も災害の時も向こう三軒両隣りで気を遣えるような関係や人のつながりがあれば亡くなったりするのを防げるのではないかと思う(C005).」や「自治会から消防団や老人クラブなど色々なところにつながるし,見守りのリストは民生委員が持っていることがあって,地域のためのネットワークを作るには民生委員をしながら自治会もするのが最善だと思う(C008).」というように,N12は地域で住民同士が気に掛け合えるネットワークを構築するように動けば,自ずと仲間関係の形成にもつながると考えていた.

⑤【地域住民の親睦：仕事が円滑に進む】

最終ラベルは,<うちの地区はみんな仲が良くて,私も誰とでも同じように付き合う方だが,中には付き合いが長く阿吽の呼吸で仕事が進められるほど気が合う人もいる(D003).>となった.

「うちの地区はみんな仲がいいが,中でも自治会長の友人は何も相談しなくても阿吽の呼吸で意思の疎通を図り地域の仕事を勧められるほど気が合う(B014).」や「(人とのつながりが強くなったエピソードは)ありすぎると言ったら,いいかもしれないですね.で,まあ僕は好み人の好みは言わない方だから,誰と

でも同じように付き合う。ただし、ものすごく深くその人にとっていうことは、あまりしない方なんです(013).」のように、N12 は住民同士の親しみが地域の仕事を滞りなく進めるのに役立つと認識していた。

⑥【自分なりの決心：うまくいかないことがあってもめげずにやる】

最終ラベルは、<地域の集まりなどでなかなか思うように広がらないこともあるが、気を張り過ぎないように気を付ける一方で、上手くいかなくても必ず最後までめげずにやるというのは自分の中で決心している(D005).>となった。

N12 は「地域の見守りや集まりなどもっと広がってほしいと思いつつもなかなかうまくいかないが、絶対めげずに最後まで死ぬ気でやると決めている(B003).」や「もっともっと大きく広がっていくといいんですけどね。中々広がりが目に見えては起こらない。でも、へしゃげたら終わり。だから、へしゃげない。いや、始めたら最後までやる。いや、僕は死ぬまでやるということ(045).」のように、地域組織活動には自分なりの決心をもって臨んでいることが分かった。

⑦【家族からの後押し：民生委員だった父や応援してくれる妻】

最終ラベルは、<父がしていた民生委員の仕事は自分もできないといけないという思いや何だかんだと言いながらもできる間はいいいんじゃないと応援してくれる妻の言葉が地域の仕事に関して私の背中を押している。(D004).>となった。

「民生委員だった親父の背中を見てきて、地域で仲良くする手伝いを自分もできないといけないと思っていたことがあり、頼まれたとき、二つ返事で承諾した(C001).」や「まあ家の中では“なんもかんもやってから、どうすんの”って言われるんですけど。“できる間はいいいんじゃない”って(046).」のように、N12 にとって地域組織活動に尽力する後押しは、家族の背中から学んだ姿勢や活動への理解であることがわかった。

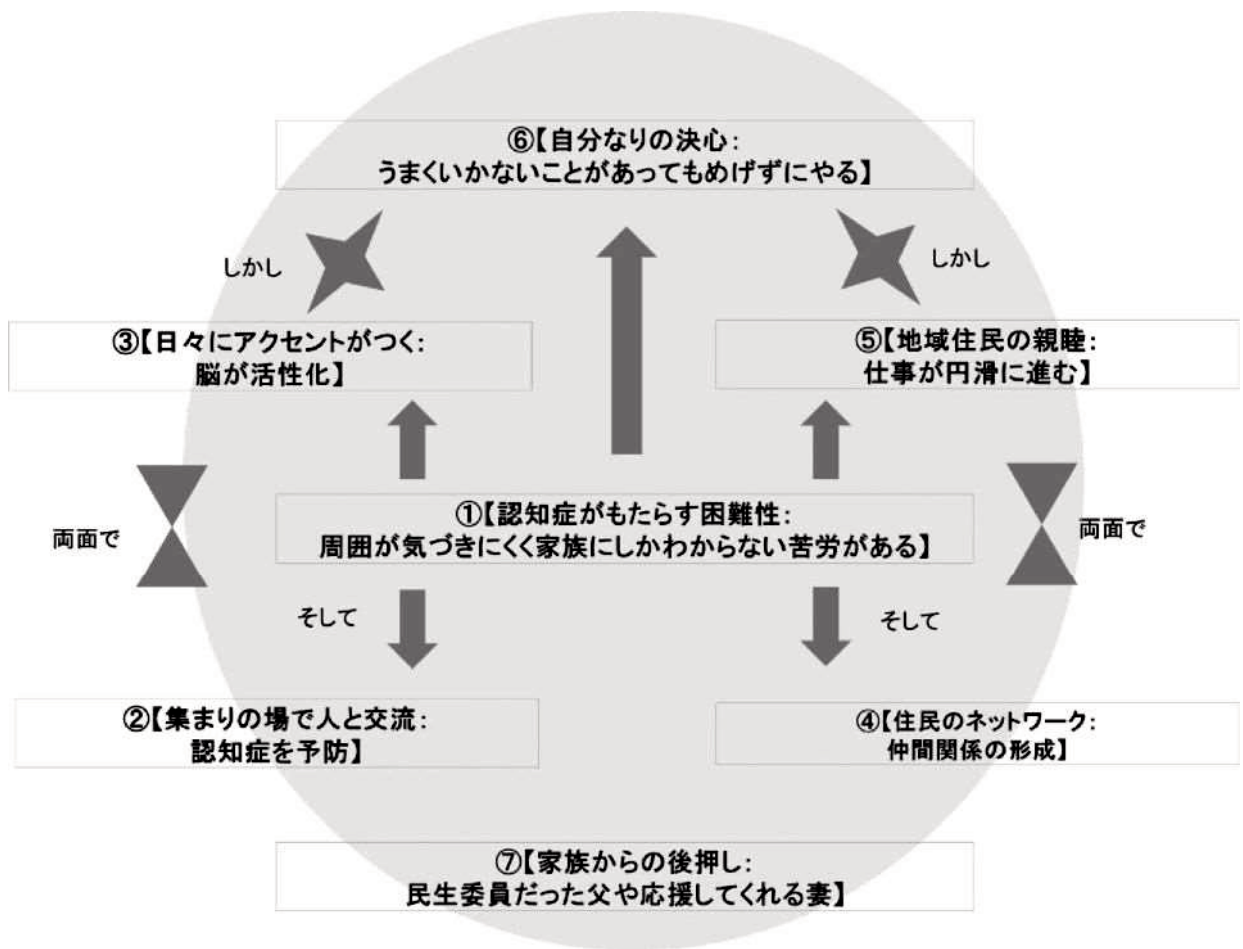


図 16 地域組織活動での相互交流による N12 の健康維持

4. 家族同居高齢者の総合分析の結果

1) シンボルマークと図解の叙述化

N7～N12の個別分析から得た合計103枚(N7から16枚,N8から28枚,N9から13枚,N10から11枚,N11から17枚,N12から18枚)を元ラベルとしてグループ編成を7段階まで行った結果,最終ラベルは7枚となり,これらに各シンボルマークを付けた.シンボルマークは,①【主体的に活動に取り組む:人任せにしない】②【他組織との関係性に配慮:随所に気を回す】③【組織における自分の在り方:人とのつながりの中の自分】④【成員との心のつながり合い:他者への意識の向上】⑤【配偶者による活動への理解:みんなのために頑張る意思を尊重】⑥【活動が生み出す人生の充実感:外出の時間,場所,機会をもたらす地域組織活動】⑦【活動に基づく健康管理意識の芽生え:心身の自己コントロール】であった.また,当分析のデータとなったN7～N12のラベルがどのシンボルマークの元になったのかという関係と男女別の下位ラベル数を表4に示した.

表4 家族同居高齢者の総合分析のシンボルマークと個別分析の関係

総合分析の【シンボルマーク】	個別分析ごとの元ラベル数						男性 合計	女性 合計
	N7 (男)	N8 (女)	N9 (女)	N10 (女)	N11 (男)	N12 (男)		
【主体的に活動に取り組む:人任せにしない】	0	0	0	1	3	1	4	1
【他組織との関係性に配慮:随所に気を回す】	2	1	1	0	3	2	7	2
【組織における自分の在り方:人とのつながりの中の自分】	5	10	5	5	2	1	8	20
【成員との心のつながり合い:他者への意識の向上】	5	1	2	1	0	5	10	4
【配偶者による活動への理解:みんなのために頑張る意思を尊重】	1	4	1	1	3	1	5	6
【活動が生み出す人生の充実感:外出の時間,場所,機会をもたらす地域組織活動】	1	8	1	0	4	2	7	9
【活動に基づく健康管理意識の芽生え:心身の自己コントロール】	2	4	3	3	2	6	10	10
合 計 数	16	28	13	11	17	18	51	52

次に,【シンボルマーク】の『事柄』と『エッセンス』を用いて,得られた図解(図17)について叙述化する.

地域組織活動での相互交流は,家族同居高齢者に対し,地域組織活動には『人任せにしない』で『主体的に活動に取り組む』態度と『他組織との関係性に配慮』し関係『随所に気を回す』ことなどが重要であるという認識をもたらしていた.その結果,常に『人とのつながりの中の自分』という姿勢で『組織における自分』

の在り方』を問うとともに、〔他者への意識の向上〕を図り〔成員との心のつながり合い〕を生み出すなど自己洞察を生じさせていた。同時に、このプロセスの後ろ盾という形での影響として、地域の〔みんなのために頑張る意思を尊重〕してくれる〔配偶者による活動への理解〕があった。そして、〔外出の時間、場所、機会をもたらす地域組織活動〕は〔活動が生み出す人生の充実感〕につながり活動継続に対する意思を引き起こし、〔活動に基づく健康管理意識の芽生え〕を生じさせ〔心身の自己コントロール〕をもたらしていた。

2) 各シンボルマークの意味

各最終ラベルと下位ラベルを示しながらシンボルマークについての説明を行う。最終ラベルは< >,下位ラベルは「 」とし、末尾には(ラベル No.,対象者 N.)を提示している。

①【主体的に活動に取り組む：人任せにしない】

最終ラベルは、<地域の活動にはきちんと続けるための自分なりの覚悟を持って臨んだり、公園の整備は市に頼るのではなく地元の人が自ら取り組むべきだと感じるなど、何事も人任せにせず自ら対応していくことが筋だと考えている(E004).>となった。

家族同居高齢者は「活動で上手くいかないことがあっても絶対にめげないと誓ったり、毎日を元気で過ごすためのルールを内心に強く持ったりするなど、地域活動を続けていくための覚悟を決めている(D005,N4,N5,N6).」や「市が手配してくれる清掃はあるものの、人が気持ちよく使える公園であり続けるためには、結局は地元の人が自分たちの手で整備に取り組んでいくことが必要であると感じている(B010,N5).」など、人任せにせず自ら対応することが基本であると考えていることがわかった。

②【他組織との関係性に配慮：随所に気を回す】

最終ラベルは、<地域で活動するにあたっては、役員の成り手不足や認知症の人の対応など多かれ少なかれ生じる困難に留意すべきだったり、自治会との関係を保っておく必要があるなど、随所に気をまわしておく必要がある(F006).>となった。

家族同居高齢者は「地域で活動するにあたっては、多かれ少なかれ立ちほだか

る困難があり、役員を引き受けてくれるような若い人がいないこともあれば、認知症の人の対応に苦戦したりすることもある (E002, N1, N2, N5, N6).」や「地域で活動する際には、自治会との関係を保っておく必要があるが、意見の食い違いに苦悩することもあるれば、活動成果をもって協力要請をアピールすることもある (C001, N3, N5, N6).」のように、活動を通じて得られる様々な交流が人生の充実感に繋がっていることに喜びを感じていた。

③【組織における自分の在り方：人とのつながりの中の自分】

最終ラベルは、<地域の役員として期待される在り方や活動に臨む自身の姿勢を考えている人は、他者の力になるために絶えず尽力し、人と人をつなぐを重視して地域活動に貢献している(G002).>となった。

「いつも地域のお年寄りのために先を見越した行動や見守りを気にかけて行動をとるなど、役員としての自分に期待される役割を果たすための心がけをしている(E003, N1, N2, N3, N4).」など、「地域に貢献できているという実感や人の役に立ちたいという気質など地域の中での自分の在り方を想定できる人は、人と人との繋がりを喜んだり、主体的に行動するなど建設的な活動ができる(E006, N1, N2, N3, N5, N6).」のように、家族同居高齢者は人をつなぐを意識しながら自分の役割を果たす活動をするを念頭においていることがわかった。

④【成員との心のつながり合い：他者への意識の向上】

最終ラベルは、<住民は暮らしの中で他者を気に掛ける意識を持つようになり、互いに声かけがなくても分かり合えるほどの親しい関係になるなど、地域活動を通じて心の通ったつながりを形成することができている(F002).>となった。

「地域では、住民同士が助け合う風潮や地域の仕事を人任せにしない役割意識が感じられるなど、助け合いながら地域で暮らすという連帯感が住民の中に醸成されてきていると思う(C004, N1, N2, N3, N6).」や「地域の活動を通じて構築される親しいつながりには、日常的に声かけをし合うような交際もあれば、阿吽の呼吸で意思の疎通を図り仕事を進められるような結びつきもある(D009, N1, N4, N6).」のように家族同居高齢者は地域組織活動を通じた住民同士の結びつきの中から、地域組織活動を円滑に進めるための心のつながり合いを形

成していることが分かった。

⑤【配偶者による活動への理解：みんなのために頑張る意思を尊重】

最終ラベルは、<配偶者は、なんだかんだ言っても最終的には意思を尊重して活動や家事の協力をしてくれたり、みんなのために頑張る自分の味方になってくれるなどいつも最高の理解者であってくれる(E005).>となった。

「配偶者が活動に参加することを肯定的に受け止めてくれたり、さりげない言動で応援してくれたりすることは活動を続けていくための後押しになる(C013,N2,N4,N5).」と認識していたり、「配偶者は、夫や妻が地域で活動することにちょっとした不満を持っていても最終的には理解を示してくれたり、家事の協力をしてくれるなど、根底ではそれぞれの地域活動に対する意志を尊重してくれている(D010,N1,N2,N6).」のように、独居高齢者が地域組織活動に尽力できる背景には配偶者の安定的な支えがあることがわかった。

⑥【活動が生み出す人生の充実感：外出の時間,場所,機会をもたらす地域組織活動】

最終ラベルは、<地域活動に参加することは、生活に活気のある時間,場所,機会を持つことになって心が満たされたり充実感が持てたりするため、心豊かな生活や健康的な生活という実感を得ることになる(F004).>となった。

家族同居高齢者は「地域の活動をすることで、密度の濃い心豊かな生活が送れているという実感を持てたり、行く場所や時間といった予定を持つことで健康的に過ごしていると感じるなど、日々に活気をプラスすることができる(E001,N1,N3,N5,N6).」や「地域活動に参加することによって、心が満たされる時間を持つことができたり、広がりのある豊かな生き方だと感じられるなど、自分の人生を充実させる満足感を味わうことができる(D003,N2,N5,N6).」など、地域組織活動によって精神的な充足感を享受していることがわかった。

⑦【活動に基づく健康管理意識の芽生え：心身の自己コントロール】

最終ラベルは、<地域で活動することによって、自分の健康は自分で守るという意識を持ったり、活動を長く続けていくための心身の自己コントロールを行う等、活動参加の継続と自らの手で健康を維持することが持ちつ持たれつになって

いる(G001).>となった.

「集まりの場に出てきて,仲間と顔を合わせたり,打ち解けたりするなど心が通い合うことで,暗い人が元気になったり,頭や心が健康でいられると感じるなど,心身に活力がもたらされるようである(D007,N2,N4,N6).」ほどで,独居ゆえに家事などの生活行為もすべて一人でこなさなければならない大変さや,「2025年問題についての講座を開催したり,体操の自主練習に出てきてくれることを嬉しく思ったりするのは,人のためではなく自分のために出てくることの大切さに気付くことが重要だと感じているからだ(C006,N3).」など,家族同居高齢者は活動を長く続けていくためには心身の健康のコントロールが大切だと認識していた.

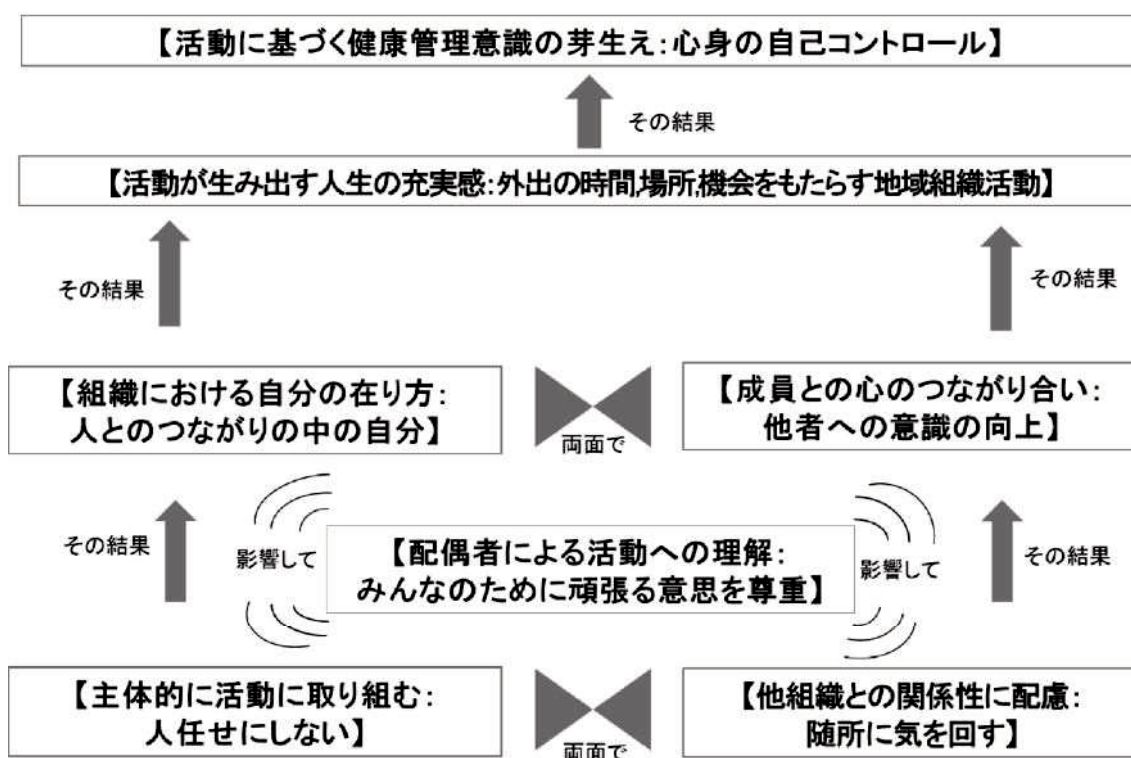


図 17 地域組織活動での相互交流による家族同居高齢者の健康維持

第5節 考察

1. 対象の特性

本研究の対象者は、独居高齢者 6 名、家族同居高齢者 6 名であった。男女比については、独居高齢者、家族同居高齢者ともに 1 : 1 で、前者の平均年齢は 75.7 歳、後者の平均年齢は 72.0 歳であった。独居高齢者の地域組織活動に関する先行研究においては、平均年齢は 74.5~77.6 歳となっており、先行研究と年齢的に同様の傾向を持つ集団であることが示唆された。また、家族同居高齢者については、独居高齢者より 3.7 歳若い集団となったが、配偶者との死別等によって生じる独居という特性を考えるとこの差は然るべきものの範囲内であると考えられる。また、参加する地域組織活動については、高齢者サロンや老人クラブ、自治会など同じ傾向が見られた。

データの質という観点では、対象者は 6 名であったが男女比、各対象のテーマに対する背景や考え方の違いなどから意見のバラエティは捉えることができ、一定程度の飽和状態にはなつたと判断している。具体的には、独居高齢者、家族同居高齢者の両者の分析において、いずれも 4 例目、5 例目あたりから、最終ラベルで意味する内容が類似するようになり、どちらも 6 例目の時点で新たな意味を持つラベルが生じなかつたことにより、このような判断に至つた。

2. 独居高齢者の特有性の同定

独居高齢者における分析結果として【活動に充実感や心地よさを期待：配慮された運営や身になる企画】【成員との友好的系譜を形成：豊富な人生経験が生む思考の幅】【成員との友好的系譜の保持：人間関係を円滑に進める社会的スキル】【活動による苦慮で心身の余裕を喪失：時間的、心理的活動負担】【成員との関係性の中に居場所を感じる安心感：配偶者に代わる心の拠り所】【活動刺激による認知的にメリハリのある日常生活：知的刺激の享受】という 6 つのシンボルマークを得た。また、当結果から得られた図解について、【シンボルマーク】の〔事柄〕と〔エッセンス〕を用いて叙述化したところ、次のようになった。

地域組織活動での相互交流は、独居高齢者に長年の活動の中で、各人の〔豊富な人生経験が生む思考の幅〕を生じさせ、〔成員との友好的系譜を形成〕を生み出していた。同時に、〔成員との友好的系譜の保持〕のために相手に合わせた距

離感のコントロールなど〔人間関係を円滑に進める社会的スキル〕をもたらし、独居高齢者の根底に地域組織〔活動に充実感や心地よさを期待〕する感覚を覚えさせ、〔配慮された運営や身になる企画〕という観点での希望を引き起こしていた。また、このような友好的系譜の積み重ねは、〔活動による苦慮で心身の余裕を喪失〕するほどの〔時間的、心理的活動負担〕が影響しつつも、地域の中に〔配偶者に代わる心の拠り所〕を見出させ〔成員との関係性の中に居場所を感じる安心感〕を生じさせるとともに、〔知的刺激の享受〕を叶え〔活動刺激による認知的にメリハリのある日常生活〕をもたらしていた。

次に、当結果を家族同居高齢者の結果と対比し考察することで、独居高齢者の特有性を同定する。

1) 成員としての主体性と自己洞察(図 18)

地域組織活動での相互交流は、独居高齢者に、活動による充実感や心地よさへの期待と長年の活動によって培われる友好的系譜ならびにその系譜を保つための社会的スキルをもたらしていた。具体的には、活動仲間との対話の延長のような食べ物や草花等のやりとりや地域組織活動への参加によって出会う元社長や看護師など自分の経験に留まらない他者との交わりによって生まれる思考の幅を喜び、見習いたくなるようなつながりのことであった。また、地域組織活動での相互交流は、こうしたつながりを保持していくための、相手に合わせた関わり方や集団ならではの周りとの距離感のコントロールなどといった社会的スキルも独居高齢者にもたらしていた。一方で、家族同居高齢者に対しては、地域組織活動に際し主体的な態度や自治会などの関係機関へ配慮する意識、さらには、常に人とのつながりの中での自分の在り方を問う姿勢や他者との心のつながり合いをもたらしていた。

以上のことから、地域組織活動での相互交流は、独居高齢者に対し、成熟の機会ともなる友好的系譜やその系譜を保つための社会的スキルをもたらす一方で、家族同居高齢者には円滑な活動運営や他者からの役割期待に応えるための自分の在り方を問う姿勢を生み出し、他者とのつながり方をコントロールする意識を引き起こしていた。つまり、独居高齢者が地域組織活動での相互交流を主体的且つ自己洞察を行いながら実践する背景には自分の成熟や友好親善を望む意識があり、家族同居高齢者が自己洞察をしながら主体的に活動するのは組織における自

分の役割を適切に果たしたいというねらいがあることがわかった。

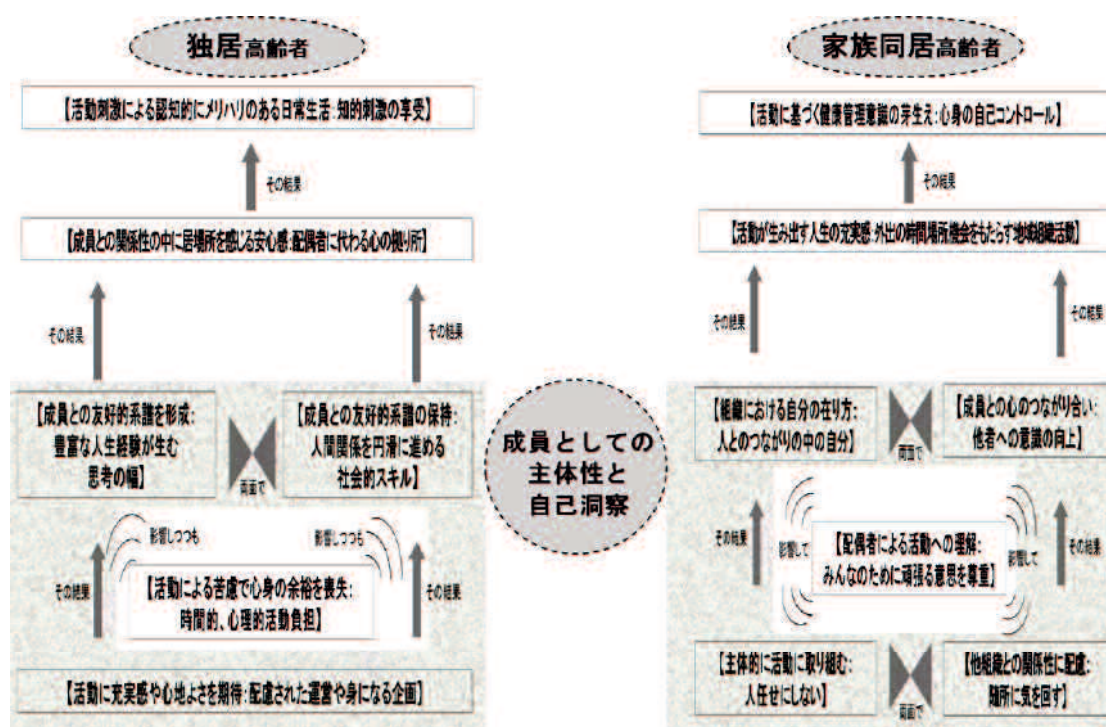


図 18 成員としての主体性と自己洞察

2) 活動遂行で欲する心の拠り所(図 19)

地域組織活動での相互交流は、独居高齢者に、独り身で地域の役員を務めるがゆえの苦慮をもたらしていた。それは、地域組織活動に追われて自分の時間が無くなるくらい大変であることや歓迎されない訪問あるいは自治会に未加入の人への対応で苦労した際などに、心身の負担をすべて一人で背負わなければならないという現実、一見多忙で充実しているように感じる毎日の中でもふと湧いてくる心細さに耐えながら生活しているという様相であった。一方で、地域組織活動での相互交流は、家族同居高齢者に対し、配偶者からの理解や尊重の享受をもたらしていた。配偶者は、地域のみみんなのために頑張る本人の意思を尊重し、地域組織活動で忙しい本人に代わって家事を行ったり、時には地域組織活動に関する相談にのるなど直接的に支援を行うこともあった。また、「行ってらっしゃい」「おかげさまで」といった言葉による肯定的な態度で本人が精を出す活動を後押しするなど、揺るぎない理解を示していた。

つまり、地域組織活動での相互交流は、独居高齢者には地域組織活動を一人身で行うがゆえの苦慮を、逆に、家族同居高齢者には配偶者からの理解に基づく支援をもたらし、相反する状態を引き起こしていた。

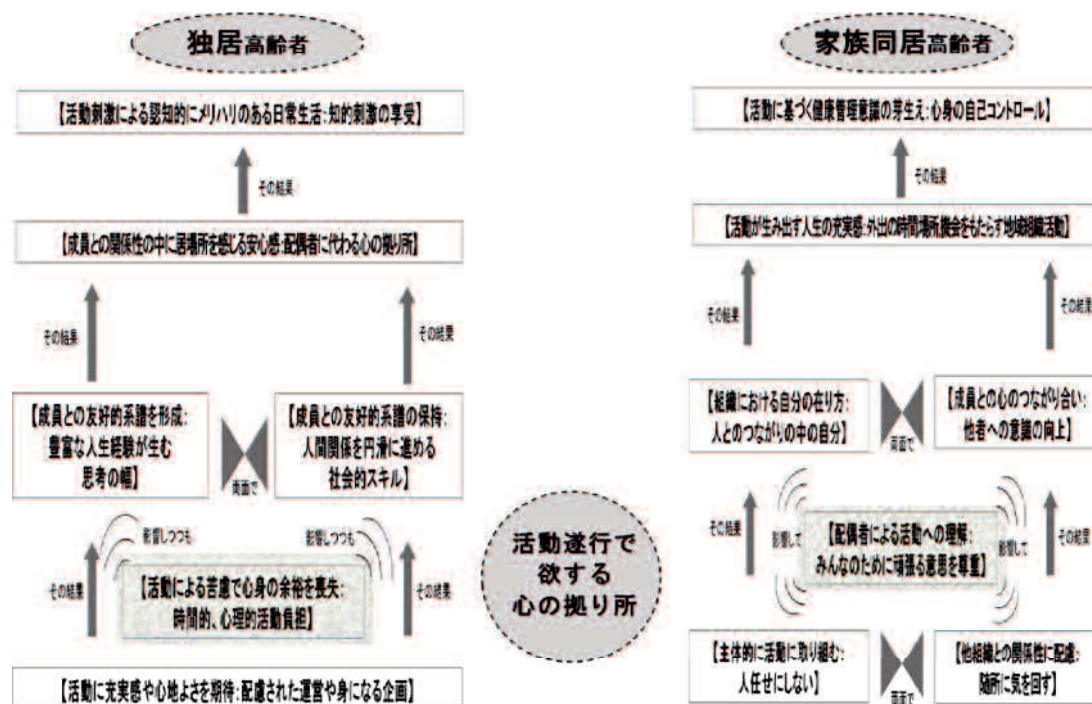


図 19 活動遂行で欲する心の拠り所

3) 活動で生じる精神的充足感(図 20)

地域組織活動での相互交流は、独居高齢者に配偶者に代わる心の拠り所として、地域の中に居場所を感じる安心感を与えていた。具体的には、地域組織活動を通じて独居高齢者は他の参加者と顔なじみになり、忌憚なく互いに体調を気遣い合ったり、意思の疎通が図れるような関係性になって、仲間との繋がりの中に自分の存在があることを感じ安心感を獲得するという様相であった。一方で、家族同居高齢者に対しては、自分の人生を主体的に生きているという満足感や外出の機会や時間、場所といった予定を持つことで健康的に過ごしているという実感、さらにはこれらによって日々活気をプラスできているという充実感を生み出していた。

すなわち、地域組織活動での相互交流は、独居高齢者には地域の中に自分の居

場所を感じる安心感を,家族同居高齢者には自身の生活や生き方に対する充実感を導いて精神的充足感をもたらしていた.そしてこれらの相違点は,家族同居高齢者は自己実現に関わる充足感であったのに対し,独居高齢者は他者からの承認に関わる充足感であることだった.

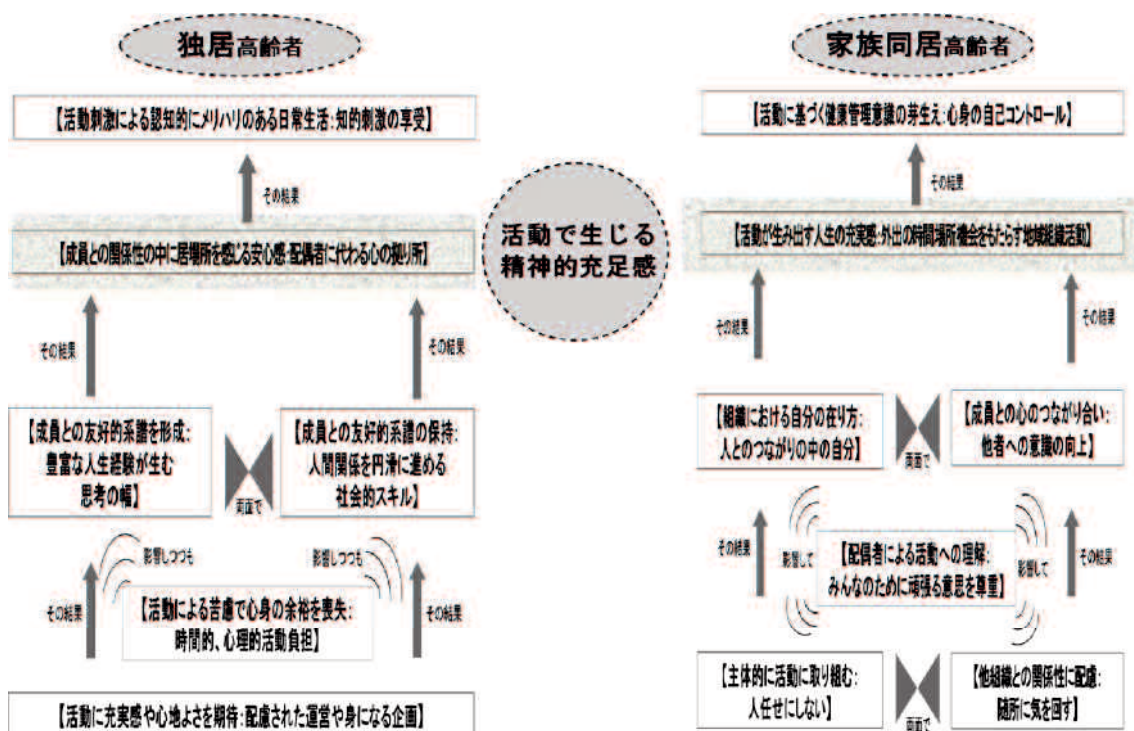


図 20 活動で生じる精神的充足感

4) QOL のコントロール(図 21)

地域組織活動での相互交流は,独居高齢者に知的刺激を提供して認知的にメリハリのある日常生活をもたらしていた.具体的には,独居高齢者が地域組織活動での相互交流によって,日常的に頭や気を遣う機会を持ったり,人前で何かを発表するなど目標を持って一生懸命取り組むことで,将来の健康や認知症予防に役立つと認識していることを表していた.一方で地域組織活動と生活は密着していて,自治会長をしたことで平凡な毎日にならずに済むなど,地域組織活動での相互交流は一人暮らしの自分にとっていい影響があると考えていることもわかった.また,家族同居高齢者には,自分の健康を自分で守るためには地域組織活動で

人と交流したり,体操したりするなど頭や体を動かすことが大切だとする認識をもたらすとともに,体調を第一に考えたり肩の力は抜いて取り組むなど活動継続を叶えるために健康管理を行い,心身をコントロールすることが大切であるという意識を生じさせていた。

これらのことから,地域組織活動での相互交流は,独居高齢者に認知的にメリハリのある生活を送ることによる QOL のコントロールを生じさせ,また家族同居高齢者に対しては活動継続を叶えるための健康管理意識を芽生えさせ心身のコントロールをもたらしていることがわかった.したがって,家族同居者は健康管理の意識の芽生えと心身のコントロールによって QOL をコントロールしようとするのに対し,独居高齢者は生活の在り方そのものを調整して QOL をコントロールしようとしていることがわかった。

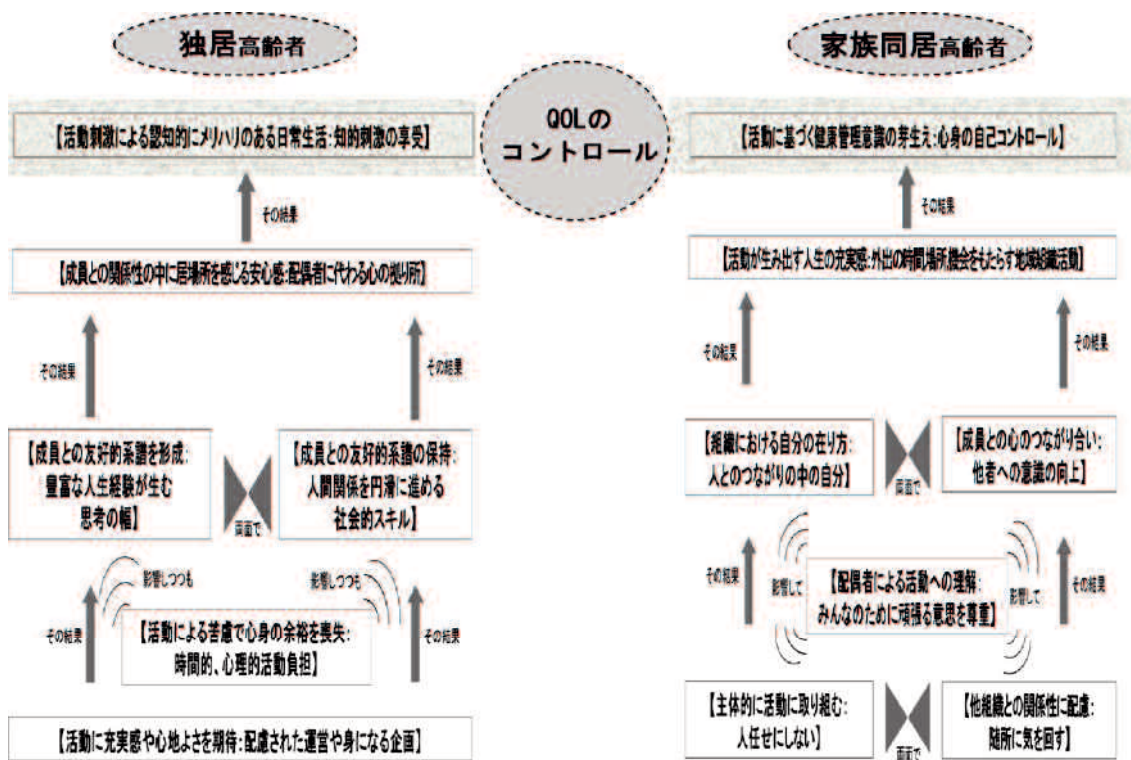


図 21 QOL のコントロール

以上のことから,地域組織活動での相互交流は,独居高齢者と家族同居高齢者のどちらにも,成員としての主体性と自己洞察,活動遂行で欲する心の拠り所,活

動で生じる精神的充足感,QOL のコントロールというプロセスで健康維持をもたらしていることがわかった.しかし,その具体的な様相は異なっていることが判明し,本研究で導いた地域組織活動での相互交流の構造は,当高齢者特有のものであることが明らかになった.

3. 独居高齢者の特性

1) 地域組織活動がもたらす友好的系譜と居場所を感じる安心感

これまでの独居高齢者を対象にした地域組織活動に関する研究では,地域組織活動への参加により友人や知人⁹⁾が増え交流が広がる¹⁰⁾ことについて述べているものは多くあったが,交流の具体的様相を明らかにしたものはなかった.しかし,本研究から,地域組織活動での相互交流は,独居高齢者に対し活動による充実感や心地よさへの期待ならびに成員との友好的系譜とそれを保持するための社会的スキルをもたらしていることが明らかになった.白砂らによれば¹¹⁾,高齢者が健康に独居生活を送ることについて身体的・精神的・社会的な側面から分類した場合,社会的健康に関わるものが最も多いとされる.また,対象者のADLはやや下がるが,合田ら¹²⁾や井上ら¹³⁾が示した独居生活を支える要因にも,「他者との関係性」や「社会的基盤」,「近隣の人への支え」があり,高齢者が独居で生活を続けていくためには社会的な繋がりが肝要であることが推察される.実際,本研究においても,家族同居高齢者は,地域組織という社会において自分の在り方を洞察し,役割を果たすことに重きがあったのに対し,独居高齢者は友好的系譜の形成やその保持のための社会的スキルを発揮することに主体性を働かせていた.よって,本研究により地域組織活動での相互交流によって独居高齢者に友好的系譜と社会的スキルがもたらされた背景には,独居高齢者が独居生活継続のための社会的基盤として,成員との関係性を捉えている可能性が考えられ,以下にその理由について考察する.

一つは,生活に必要な情報を収集するという観点である.独居高齢者は,同居者がいないため,生活に必要な情報についても,外に出て意図的に交流する中で収集しているとされるとともに¹⁰⁾,インターネット等の新しい情報入手方法が増え,情報収集が困難になることを不安に思っている独居高齢者もいるとされ¹⁴⁾,独居高齢者にとって地域組織活動での成員との交流は会話を楽しむ以外にも生活に有用な情報を入手する貴重な機会であると考えられる.このことから,独居高齢

者は、何気ない情報も含め、その共有や交換が円滑に行われるよう常に意識を働かせている可能性があると考えられた。また、地域組織活動は、共通の課題と目的を共有し、その解決のために意図的に成員間が相互作用を発揮するよう、リーダーや専門職によって働きかけられる一面がある¹⁵⁾。そのため、メンバーとの距離感は縮めやすく、且つ、成員のサブシステムの整理が組織的に図られるとともに、行政機関からの情報は地域組織を通じて住民にもたらされている状況を踏まえると、地域組織活動での相互交流には自宅近隣との付き合いだけでは満たせない生活課題の解決という利点がある¹⁰⁾と考えられた。一方で、家族同居高齢者は、同居家族からも生活に必要な情報が得られるため¹⁶⁾、地域社会が役割期待として抱く、高齢者同士で支える合うことや組織運営、美化活動等について¹⁷⁾、一心に尽力するとともに、組織との関係、組織の成員間との関係などの動的な集団の中で¹⁸⁾自分の最善の位置付けや在り方を探るための自己洞察を行い、成員との心のつながり合いを形成していると考えられた。

もう一つは、心の拠り所と居場所という観点である。地域組織活動での相互交流は、独居高齢者と家族同居高齢者の両者に活動遂行に伴い心の拠り所を持つ欲求を生じさせ、その対処の上に精神的充足感をもたらしていることがわかった。まず独居高齢者についてであるが、地域組織活動に参加することによって心身の余裕を喪失するほどの時間的、心理的負担を生じていた。これまでに地域組織活動と負担感に関わる研究は、見守り活動が日常生活の一部になるか否かで負担感が異なるといった内容が明らかにされている程度で¹⁹⁾、ほとんど焦点化されていない。そのような状況下、本研究から明らかになった独居高齢者の苦慮の様相は、歓迎されない訪問で心理的に負担を感じる、家事などとの両立が大変など独居高齢者が独りで地域組織活動に臨むことによって亡き配偶者からの支えがさりげなくも大きかったことを痛感している現実や一見多忙で充実しているように見えてもふと湧いてくる心細さに耐えながら生活しているというものであった。このことから、独居高齢者は地域組織活動を遂行するにあたって配偶者に心の拠り所を抱きつつも、実際には独居ゆえに配偶者からのサポートを受けることができない境遇が苦慮を引き起こしているものと考えられた。

加えて、活動によってもたらされる心身の余裕の喪失を構成する下位ラベルは男性10枚、女性2枚であったことから(表2)、女性よりも男性にこの傾向が強いことが推察された。独居高齢者を対象に日常生活満足度を調査した林らによれば、

「家事」「食事」「社会参加活動」「人間関係」「居住環境」「清潔維持」「経済」という「睡眠」以外のすべての項目において、男性は女性よりも日常生活満足度得点が統計的に低く²⁰⁾、男性が一人で生活を営むことに際し生活上の困難が大きいことが明らかになっており、このことは男性が地域組織活動と日常生活を両立することを難しくしている要因であると考えられた。実際、本研究の結果からも、家族同居高齢者は、地域組織活動への参加によって、配偶者に家事を代わってもらったり、地域のみんなのために頑張る意思を尊重してもらえるなど、直接的あるいは間接的に配偶者によるサポートを享受できていた。先行研究においても、家族同居高齢者は独居高齢者に比べて家事役割が少ないことがわかっており²¹⁾、家族同居高齢者が役割遂行に没頭できるのは配偶者によって心の拠り所と実働的支援の両面からのサポートを取得していることに起因すると示唆された。

また、地域組織活動への参加によって苦慮を受ける理由のもう一つの理由に、男性独居高齢者の対人関係があると推察された。男性は、対人関係について、退職後は職場仲間中心のネットワークを組織するとされ²²⁾、同時に高齢期になるまで、また配偶者がいた時までは、対人関係について配偶者中心の生活を送っているとされる²³⁾。また、その後独居になってからは「交遊」「相談」「信頼」関係にある他者のいない者が女性よりも多いという特徴を持つ²³⁾。本研究の結果から、独居高齢者は地域組織活動での相互交流の中で、歓迎されない訪問や難儀する住民への対応に苦労していることが判明したが、同時に先行研究からは活動参加者たちの参加意欲維持の困難性²⁴⁾や葛藤を抱えての役割遂行など¹²⁾、地域組織活動に伴う様々な課題を抱えていることが明らかになっている。よって、本来であれば、家族同居高齢者の様相から示されたような配偶者による活動への理解は、心理的不安を軽減するために重要であると考えられるが、独居高齢者の場合はその存在がおらず、且つ、特に男性は悩みがあっても誰にも相談せず抱え込みがちであるとされるため²⁵⁾、一層負担が増大する可能性があると考えられた。

次に、地域組織活動での相互交流は、独居高齢者に友好的系譜とともに苦慮をもたらしつつも成員との関係性の中に居場所を感じる安心感を与えていた点である。つまり、独居高齢者は本来であれば、地域組織活動に携わるにあたり、配偶者に心の拠り所を求め²⁶⁾満たされながら生活を送りたいところであるが、それが叶わない部分を含め、成員との中に配偶者代わる拠り所としての居場所を見出し、精神的な充足を図っているものと考えられた。また、先行研究から地域での役割

や居場所が独居の継続要因になっていることが示唆され^{10,27)},さらに福田は,独居高齢者は「我が家のようなこの地域は心の拠り所である」と感じていることを明らかにしている²⁶⁾.また,大森によれば高齢者は,「日常的相互関心」と「共感的相互理解」を通じて「自己の存在を確認する」ことが明らかにされており²⁸⁾,独居高齢者は常に他者との相互関係の中に自分の存在を強く意識している可能性が示唆され,地域組織活動での相互交流においても配偶者に代わる居場所を成員との中に探す意識が潜在的に働いたものと思われる.

以上のことから,独居高齢者にとって地域の中に「居場所」を持つことは,独居生活を続けていくための重要な要件であることが推察できるとともに,地域組織活動での相互交流が,その要件の獲得に向けた拠り所や土台としての役割を果たしている可能性が考えられた.また,本研究の家族同居高齢者における精神的充足感の様相が,独居高齢者とは対照的に,自分の人生を主体的に生きているという満足感など自己実現の傾向を示したことも,配偶者という拠り所の有無により地域組織活動での相互交流によってもたらされる精神的充足感の在り様が異なることを裏付けていると考える.また,地域組織活動に参加していない独居高齢者との比較においても,地域組織活動に参加する者は精神的に充足感を獲得していたのに対し,地域組織活動に参加していない独居高齢者は,抑うつ傾向が高かったり,全体的健康感が低い傾向にあり,さらには SF-36 による身体機能得点が低いことが示されている.よって,このことから,地域の中に居場所を感じる安心感に基づく精神的な充足は地域組織活動に参加する者の特性であると捉えられ,地域組織活動は健康の維持の手立てとして有効であると考えられる.

加えて,地域組織活動によって独居高齢者にもたらされた居場所を感じる安心感は,マズローの人は所属する集団や家族においての位置を切望し目標達成のために一生懸命努力するという,いわゆる愛と所属の欲求の充足²⁹⁾に関わっていると考えられた.すなわち,友好的系譜を保持するための社会的スキルの働きは,配偶者に代わる心の拠り所を地域組織活動での相互交流に求めるための努力であり,いざ独居になったとき,これまでに培ってきた友好的系譜を土台に自分の居場所を地域組織活動にシフトし愛と所属の欲求を満たすことで精神的な健康をコントロールしていると考えられた.また,先行研究で示されている地域組織活動への参加の効果は,要介護期間の短縮や介護費用削減の可能性³⁰⁾並びに緊急時対応を視野に入れた日常的な見守りや互助関係構築の視点に立ったものなどが

多かったが^{31,32)},本研究からはその背景に地域での居場所の存在があることが推察され,これまでに判明している効果の前提には地域組織活動に参加し,相互交流を図ることによって社会的健康が確保され愛と所属の欲求を充足した結果,精神的充足感を獲得していると思われた.

さらに, 成員との関係性の中に居場所を感じる安心感の下位ラベルは,男性 5 枚,女性 10 枚から構成されており(表 2),より女性の方にこの傾向が強いことが推察された.西村は,独居高齢者において,男性よりも女性の方が近隣や親族などの非親族によるサポート・ネットワークを構築しやすいとしており,その要因について女性の方が同じ境遇の人が多くことや男性の方が職場中心の生活を送ってきたことを挙げている³³⁾.他方,船木らによれば³⁴⁾,同じ境遇にある人とは親しみやすさを覚え,他の人とは違う親密な関係を持ちやすいとされ,同じ境遇だからこそお互いに共感し,理解し合えるとされている.令和 2 年度高齢社会白書によれば,男女の平均寿命の差は 6.07 歳で 65 歳以上人口に占める独居高齢者の割合は,男性 13.3%,女性 21.1%とされ女性の方が多く^{35,36)}.そのため,女性の方が確率的に同じ境遇の人に出会いやすい環境と言え,なお且つ,男性は妻がいる時から配偶者中心の対人関係であるのに対し女性は子どもや親族,友人・知人などと幅広く「交遊」「相談」「信頼」関係を築いていること²³⁾も一因なのではないかと考えられた.また,男性の対人関係が配偶者中心であることについては,1990 年代に共働き世帯が片働き世帯の数を上回るまでは,男性は就労,女性は家庭といった世帯形態が主流であった時代背景が加勢していると思われた³⁷⁾.

2) QOL のコントロール

次に,本研究の結果から,地域組織活動での相互交流は精神的充足感の提供のうち,独居高齢者は平凡になる恐れのある生活の中に知的刺激を加え認知的にメリハリのある日常を実現することによって,QOL をコントロールする営みを独居高齢者に生じさせていたことが示唆された点についてである.谷口らは知的活動によって前頭葉認知機能が改善する可能性を示唆しており³⁸⁾,平凡になりがちな日常生活の中に知的刺激が組み込まれることによって,認知面にメリハリを持った生活がもたらされるのではないかと考えられた.また,このことは「認知症予防や将来の健康に役立つ」という言葉で対象者が語っていた.一方,先行文献によれば,身体機能の低下は認知機能の低下に影響を与えるとされるが³⁹⁾,認知機能

の低下が身体機能の低下に直接的に影響を与えるとする知見は見当たらない。しかし、認知機能の低下が閉じこもり⁴⁰⁾の要因となって要介護に移行したり⁴¹⁾、注意力の低下が原因となり転倒した結果⁴²⁾、骨折するケースがあり⁴³⁾、認知機能の低下は間接的に身体機能の低下につながっている現状は否定できない。本研究の対象は、普段から見守りなどの地域組織活動によって、閉じこもりや転倒が起因となり身体機能の低下が生じた高齢者に身近に接する機会を持つ者であることから、こうした経験が認知機能の低下を予防して身体機能を維持しようとする発想に結び付き、認知的にメリハリのある日常生活によって身体的な健康をコントロールしようとする意識に転じたと考えられる。

また、この点における家族同居高齢者との相違は、地域組織活動の相互交流は家族同居高齢者には活動によって生じる自己実現に起因した精神的充足感をもたらし、活動継続のための健康管理意識を芽生えさせ、心身のコントロールを行うことによって QOL のコントロールを引き起こしていたが、独居高齢者には認知的にメリハリのある生活をもたらし、生活の在り方を起点に QOL のコントロール生じさせていたことである。つまり、独居高齢者にとっての健康維持とは、今の生活を継続するための生活コントロールそのものであり、独居高齢者にとっては独居生活を続けることができることが、健康の維持と同じ意味を持つという特性が示唆された。そのため、独居高齢者が地域組織活動を通じて健康を維持しようとする際には、生活の在り方という視点をあわせて持つことが重要である。

本論文献

- 1) 厚生労働省. 用語の定義. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-t-yosa/k-tyosa03/yougo.html> (参照 2021-01-27)
- 2) 山浦晴男, 質的統合法によるデータ統合の進め方, 質的統合法入門 考え方と手順, 第1版, 医学書院, 東京, 2012, 23-78.
- 3) 山浦晴男, 質的統合法によるデータ統合の進め方, 質的統合法入門 考え方と手順, 第1版, 医学書院, 東京, 2012, 92-93.
- 4) 谷本真理子. エンドオブライフを生きる下降期慢性疾患患者のセルフケアのありようーケアを導く患者理解の視点抽出の試みー. 千葉看会誌 2012; 18 : 9-16.
- 5) 寺尾洋介, 高橋良幸, 正木治恵, 他. 老人ホーム入居高齢者への家族の関わりを支えるものー最期まで通い続ける家族を対象にー. 千葉看会誌 2014 ; 20 : 47 -54.
- 6) 鳥田美紀代. 入院している高齢者の主体的な療養生活を支援することに関連した医療現場の課題と対策 . 千葉看会誌 2012; 18 : 11-17.
- 7) 正木治恵. 看護学研究における質的統合法(KJ法)の位置づけと学問的価値. 看研 2008 ; 41 : 3-10.
- 8) エリック・H. エリクソン, ジョーン・M. エリクソン, ヘレン・Q. キヴニツク, 朝長正徳 共訳, 他, 老年期ー生き生きしたかかわりあい 新装版, みすず書房, 東京, 1997.
- 9) 若山好美, 大岩敦子, 池田由美子, 他. 閉じこもり予防事業が高齢者にもたらす結果についてー参加者と非参加者の主観的健康感・身体・精神状態・医療費の比較からー. 地域保健 2002; 33 : 59-67.
- 10) 安孫子尚子, 原田小夜. 自主グループ活動に参加する独居高齢者の継続参加への意味づけ. 聖泉看護学研究 2017 ; 6 : 9-18.
- 11) 白砂恭子, 湊田英津子. 日本における高齢者が健康に独居生活を送れる条件に関する文献検討. 日本看護研究学会雑誌 2019; 42 : 921-931.
- 12) 合田加代子, 高嶋伸子, 太田 武夫, 他. 一人暮らし高齢者を支える地域住民の支援の特徴. 香川県立保健医療大学紀要 2006; 3 : 17-22.
- 13) 井上順子, 井手環, 奥山真由美. 要介護高齢者が独居生活を継続できる要因ー退院後一年間独居生活を継続している事例分析から. 日本看護学会論文集 地域看護 2006; 37 : 246-248.
- 14) 内閣府. 平成 27 年度一人暮らし高齢者に関する意識調査. <https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h26/kenkyu/gaiyo/pdf/kekka1.pdf> (参照 2020-12-25)
- 15) 霜越多麻美. 地域組織活動の継続要因に関する文献レビュー 看護学等, 多領域にわたる scoping review. 千葉看会誌 2018 ; 23 :1-9.

- 16) 内閣府. 平成 16 年度 高齢者の日常生活に関する意識調査結果 (全体版)
・ 7 日常生活情報. https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h16_nitizyou/19html/10.html (参照 2021-01-27)
- 17) 佐藤美由紀, 齊藤恭平, 若山好美, 他. 地域社会における高齢者に対する役割期待と遂行のための促進要因. 日本保健福祉学会誌 2014; **21** : 25-34/
- 18) 田高悦子. 地域を構成する組織への公衆衛生看護技術 組織のアセスメントと支援計画 公衆衛生看護学テキスト 2 公衆衛生看護技術, 東京, 医歯薬出版株式会社, 2019, 155-157.
- 19) 高木寛之. 「地域の実情」に応じた地域の類型化と地域づくりの支援方法に関する考察 見守り活動の構築過程を通して. 地域福祉実践研究 2020; **11** : 36-45.
- 20) 林暁淵, 岡田進一, 白澤政和. 大都市独居高齢者の全体的生活満足度における性差的特徴-日常生活満足度との関連から-. 生活科研誌 2003 ; **2** : 273-280.
- 21) 石川隆志, 湯浅孝男, 本橋豊. 秋田市在住の独居高齢者の生活リズムと生活実態-非独居高齢者との比較から-. 秋田大学医学部保健学科紀要 2006; **14** : 47-53.
- 22) 野辺政雄. 高齢者の社会的ネットワークとソーシャル・サポートの性別による違いについて. 社会学評論 1999; **50** : 375-392.
- 23) 西村昌記, 石橋智昭, 山田ゆかり, 他. 高齢期における親しい関係 - 「交遊」「相談」「信頼」の対象としての他者の選択 -. 老年社会科学 2000 ; **22** : 367-374.
- 24) 石飛多恵子, 上村尚子, 神田詩織 , 他. 住民による高齢者サロン運営の課題と対策. 島根大短大部出雲キャンパス研紀 2011 ; **6** : 125 - 133.
- 25) 稲葉陽二, 藤原佳典, ソーシャル・キャピタルで解く社会的孤立, 東京, ミネルヴァ書房, 2013, 22-49
- 26) 福田早也香, 山辺茜, 池田亜弓, 他. 農村部の女性独居高齢者が住み慣れた地域で老いていくことに対する思い. 北海道公衆衛生雑誌 2009 ; **23** : 160-166.
- 27) 清田明美. 独居の生活を継続している要介護後期高齢者の日常生活上の困難と対処. 老年看護学 2017 ; **22** : 79-87
- 28) 大森純子. 前期高齢女性の近隣他者との交流関係と健康関連 QOL との関連. 日本公衛誌 2017; **54** : 605-614.
- 29) Maslow A, 小口忠彦訳, 第 4 章 人間の動機づけに関する理論 モチベーションとパーソナリティ, 人間性の心理学, 改訂新版, 産業能率大学出版部, 東京, 1987, 68-71.

- 30) Saito M, Aida J, Kondo N, et al. Reduced long-term care cost by social participation among older Japanese adults: a prospective follow-up study in JAGES. *BMJ Open* 2019 ; **9** : e024439.
- 31) 高橋和幸. 秋田県の過疎農村地域における社会福祉面の相互扶助と住民参加に関する研究(その11)～大仙市大沢郷寺I集落における一人暮らし高齢者の生活実態をとおして～. *秋田看福大地域研報 総合第2報* 2007 ; **2** : 17-29.
- 32) 工藤禎子. 一人暮らし高齢者の地域での生活における安全の確保. *老年社会科学* 2015 ; **37** : 36-41.
- 33) 西村昌記. 一人暮らし高齢者の生活課題-サポート・ネットワークの観点から-. *老年精医誌* 2004 ; **15** : 184-191.
- 34) 船木祝, 山本武志, 旗手俊彦, 他. 高齢者の一人暮らしを支えている精神的・社会的状況. *海道生命倫理研* 2017 ; **3** : 13-26.
- 35) 1) 内閣府. 令和2年版高齢社会白書. 第1節 高齢化の状況(3). http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/html/zenbun/s1_1_3.html (参照 2020-12-07).
- 36) 内閣府. 令和2年版高齢社会白書. 第1節 高齢化の状況(1). https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/html/zenbun/s1_1_1.html (参照 2020-12-07)
- 37) 内閣府. 男女共同参画白書(概要版) 平成30年版. 第3章 仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス). https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h30/gaiyou/html/honpen/b1_s03.html (参照 2020-12-07)
- 38) 谷口優, 小宇佐陽子, 新開省二, 他. 身体活動ならびに知的活動の増加が高齢者の認知機能に及ぼす影響 東京都杉並区における在宅高齢者を対象とした認知症予防教室を通じて. *日本公衛誌* 2009 ; **56** : 784-794.
- 39) 山田和政, 大竹卓実, 木村大介. 身体バランス機能および認知機能が要介護度に与える影響. *理療科* 2018 ; **33** : 421-424.
- 40) 新開省二, 藤田幸司, 藤原佳典, 他. 地域高齢者におけるタイプ別閉じこもり発生の予測因子 2年間の追跡研究から. *日本公衛誌* 2005 ; **52** : 874-885.
- 41) 渡辺美鈴, 渡辺丈眞, 松浦尊麿, 他. 自立生活の在宅高齢者の閉じこもりによる要介護の発生状況について. *日老医誌* 2005 ; **42** : 99-105.
- 42) 村田伸, 津田彰. 在宅障害高齢者の身体機能・認知機能と転倒発生要因に関する前向き研究. *理学療法学* 2006 ; **33** : 97-104.
- 43) 鈴川芽久美, 島田裕之, 牧迫飛雄馬, 他. 要介護高齢者における転倒と骨折の発生状況. *日老医誌* 2009 ; **46** : 334-340.

終章

第1節 総括

本研究は、地域で保健医療福祉の専門職によって行われている独居高齢者支援に対する示唆を得ることを念頭に、地域組織活動への参加によって健康を維持する独居高齢者の相互交流の構造を明らかにすることを目的として実施した。

独居高齢者を対象として行った質的統合法(KJ法)による総合分析では、102枚を元ラベルとしてグループ編成を6段階まで行い、最終ラベルは6枚を得た。そして、これらそれぞれにシンボルマークを付けたところ、①【活動に充実感や心地よさを期待：配慮された運営や身になる企画】②【成員との友好的系譜を形成：豊富な人生経験が生む思考の幅】③【成員との友好的系譜の保持：人間関係を円滑に進める社会的スキル】④【活動による苦慮で心身の余裕を喪失：時間的、心理的活動負担】⑤【成員との関係性の中に居場所を感じる安心感：配偶者に代わる心の拠り所】⑥【活動刺激による認知的にメリハリのある日常生活：知的刺激の享受】となった。また、当結果から得られた図解について、【シンボルマーク】の『事柄』と『エッセンス』を用いて叙述化したところ、次のようになった。

地域組織活動での相互交流は、独居高齢者に長年の活動の中で、各人の『豊富な人生経験が生む思考の幅』を生じさせ、『成員との友好的系譜を形成』を生み出していた。同時に、『成員との友好的系譜の保持』のために相手に合わせた距離感のコントロールなど『人間関係を円滑に進める社会的スキル』をもたらし、独居高齢者の根底に地域組織『活動に充実感や心地よさを期待』する感覚を覚えさせ、『配慮された運営や身になる企画』という観点での希望を引き起こしていた。また、このような友好的系譜の積み重ねは、『活動による苦慮で心身の余裕を喪失』するほどの『時間的、心理的活動負担』が影響しつつも、地域の中に『配偶者に代わる心の拠り所』を見出させ『成員との関係性の中に居場所を感じる安心感』を生じさせるとともに、『知的刺激の享受』を叶え『活動刺激による認知的にメリハリのある日常生活』をもたらしていた。

家族同居高齢者においては、103枚を元ラベルとしてグループ編成を7段階まで行い、最終ラベルは6枚を得た。そしてそれぞれにシンボルマークは、①【主体的に活動に取り組む：人任せにしない】②【他組織との関係性に配慮：随所に気を回す】③【組織における自分の在り方：人とのつながりの中の自分】④【成員との心のつながり合い：他者への意識の向上】⑤【配偶者による活動への理解：みんなのために頑張る意思を尊重】⑥【活動が生み出す人生の充実感：外出の時間、場所、機会をもたらす地域組織活動】⑦【活動に基づく健康管理意識の芽生え：心身の自己コントロール】となった。また、当結果から得られた図解について、【シンボルマーク】の『事柄』と『エッセンス』を用いて叙述化したところ、次のよ

うになった。

地域組織活動での相互交流は、家族同居高齢者に対し、地域組織活動には〔人任せにしない〕で〔主体的に活動に取り組む〕態度と〔他組織との関係性に配慮〕し関係〔随所に気を回す〕ことなどが重要であるという認識をもたらしていた。その結果、常に〔人とのつながりの中の自分〕という姿勢で〔組織における自分の在り方〕を問うとともに、〔他者への意識の向上〕を図り〔成員との心のつながり合い〕を生み出すなど自己洞察を生じさせていた。同時に、このプロセスの後ろ盾という形での影響として、地域の〔みんなのために頑張る意思を尊重〕してくれる〔配偶者による活動への理解〕があった。そして、〔外出の時間、場所、機会をもたらす地域組織活動〕は〔活動が生み出す人生の充実感〕につながり活動継続に対する意思を引き起こし、〔活動に基づく健康管理意識の芽生え〕を生じさせ〔心身の自己コントロール〕をもたらしていた。

以上のことから、地域組織活動での相互交流は、独居高齢者と家族同居高齢者のどちらにも、成員としての主体性と自己洞察、活動遂行で欲する心の拠り所、活動で生じる精神的充足感、QOL のコントロールというプロセスで健康維持をもたらしていることがわかった。しかし、その様相は異なっていることが判明し、本研究で導いた地域組織活動での相互交流の構造は、当該高齢者特有のものであることが明らかになった。その上で、独居高齢者にとって地域組織活動での相互交流による健康維持とは、当該活動への参加を通して生活の在り方そのもの、すなわち QOL をコントロールすることで、今の生活を続けていけることであると示唆された。

第2節 研究の限界と今後の展望

本研究では、ボランティアや自治会など組織の種別は問わず、公衆衛生看護学上の観点から健康課題の解決を目的に活動する組織を地域組織活動と捉え研究した。そのため、組織の種別によって結果に異なりがあるのか等までは、見いだせていない。また、対象者は6名であったが男女比、各対象のテーマに対する背景や考え方の違いなどから意見のバラエティは捉えることができ、一定程度の飽和状態にはなつたと判断している。一方で、今回の研究は既に地域組織活動に参加している者且つ本研究に対し自らの意思で同意している者を対象にしているため、社会活動に対して一定の積極性を持つ者の特性に偏った結果になっている可能性がある。研究着手時は、研究の目的を明らかにする最善の対象を探る観点から、地域組織活動不参加者への調査の実行性についても検討したが、先行研究におけ

る対象者選定の傾向から研究者が独自に独居高齢者に接触する機会を得る困難性を推察し、ましてや地域組織活動に参加していない者となれば実行性は極めて低いと認識した。そのため、今回は地域組織活動に参加する独居高齢者の特性から健康維持について検討することとしたが、今後は、本研究を基盤に研究対象を地域組織活動不参加者にも拡大し、その者との比較等も行うことにより一層社会に寄与する結果を導いていく必要がある。

今回調査を実施した A 市は、気候が穏やかな地方都市で高齢化率約 27%の県庁所在地である。市内には、中学校区を目安に地域包括支援センターが設置され、毎年介護予防に関するシンポジウムが行われる等その推進に力を入れている都市である。今回、この地域特性を踏まえ、考察にて他の地域との差を検討しようと試みたが、先行研究に健康維持の具体的様相を明らかにしているものがなく、さらに結果のストーリーラインについて参考になりうる 1 文献については地域特性の記載が高齢化率のみで、比較に至ることができなかった。今回の調査対象は A 市内の同一の地域包括支援センター内の居住者に限られており、地域特性に応じた偏りある結果である可能性がある。そのため、普遍性、一般化においては課題が残るものであり、今後は、より対象地域を広げるとともに、地域差の視点からも検討する必要がある。同時に、本研究の結果については混合研究法等により段階的にさらなる検証を進めていくことが重要である。

今後ますます独居高齢者やその予備軍は増加する見込みである。したがって、本研究から明らかになった独居高齢者の健康維持に関する知見は、民生委員や福祉協力員がまだ参加に至っていない住民に対し地域組織活動への参加を呼び掛ける際の意味付けの強化に役立つと考えられる。同時に、地域で活動する専門職が介護保険法の地域支援事業に基づく訪問等によって、社会との繋がりが脆弱で虚弱への移行が予想される独居高齢者やその予備群への関わりを持つ際に、地域組織活動は健康維持に貢献することについて根拠を持って認識しながら対象に働き掛けることができ、まだ参加していない者への参加の動機付けに資することができる点で社会への寄与が見込まれる。

また、このことは、独居高齢者が住み慣れた自宅や地域で今の生活を続けていくことにも貢献できると考えられ、各民生委員児童委員協議会や社会福祉協力員を束ねる社会福祉協議会、ならびに専門職が所属する地域包括支援センターなどに当知見を提言することで、実践への活用を図っていきたい。

資料

平成 31 年 1 月 30 日

A 市地域包括支援センター
管理者 ○○○○ 様

日本赤十字九州国際看護大学
助教 金森 弓枝

独居高齢者の健康を保持するための相互交流に関する研究調査協力をお願い

時下、皆様ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、このたび「地域の住民グループ活動における独居高齢者の健康を保持するための相互交流の構造化」を課題とし、研究に取り組むことになりました。

近年我が国では独居高齢者数が顕著に増加する一方で、独居高齢者は、非独居高齢者に比べて地域活動への参加が少なく、将来の日常生活自立度低下が大きい等の健康課題を持つことがわかっています。しかしながら他方では、心の拠り所である家や地域で暮らしていきたいという意思を持っており、独居高齢者の健康と生活継続を支える取り組みの重要性が高まっています。このような状況下、高齢者にとって地域の住民グループ活動(以下、グループ活動)における人や組織との交流は、幸せの実感や健康の保持に寄与し、且つ独居の継続要因になるとされていますが、独居高齢者でこれに参加している者の割合は 8%程度に留まる現状です。そのため、今後は独居高齢者の活動参加による相互交流を促進する必要がありますが、独居高齢者における相互交流の構造(在り様)は明らかになっておらず、健康保持に対する意義は明確にされていません。

そこで、今回、独居高齢者のグループ活動における相互交流について、構造仮説モデルを構築することを目的に研究を実施することといたしました。このモデルの構築は、独居高齢者において相互交流を活用した健康づくり活動の実践に寄与するとともに、その理論化に貢献すると考えられます。なお、この度は、家族同居者における相互交流についても明らかにすることで、独居高齢者の特徴をより明確に導く予定です。

皆様におかれましては、ご多用の中、大変恐縮ではありますが、本研究の趣旨をご理解いただき、貴地域の対象者の皆様にお知らせくださいますようお願い申し上げます。

記

1. 目的： 独居高齢者のグループ活動における相互交流について、構造仮説モデルを構築する。
2. 対象： 1年以上独居生活を送る高齢者でグループ活動に継続的に参加している者 6名と家族同居者でグループ活動に継続的に参加している者 6名
3. 方法： インタビュー調査
4. 時期： 平成 31 年 2 月
5. 倫理的配慮： 対象者に調査への参加は自由意思であるとともに拒否できること等を口頭および文書(別添資料)にて説明し、依頼する。
6. その他： 本調査における個人的な費用負担はない

連絡先： 日本赤十字九州国際看護大学 ヘルスプロモーション・在宅看護領域
助教 金森 弓枝 Tel:0940-35-7068(直通)

平成 31 年 1 月 30 日

〇〇にお住まいの皆さまへ

日本赤十字九州国際看護大学
助教 金森 弓枝

一人で在宅生活を営まれている高齢者を対象とした
健康を保持するための相互交流に関する研究調査協力をお願い

時下、皆様ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、このたび「地域の住民グループ活動における独居高齢者の健康を保持するための相互交流の構造化」を課題とし、研究に取り組むことになりました。

近年我が国では一人暮らし高齢者数が顕著に増加する一方で、一人で生活されている高齢者は、比較的地域活動への参加が少なく、将来の日常生活自立度低下が大きい等、様々な健康課題を持つことが明らかになっています。しかしながら他方では、心の拠り所である家や地域で暮らしていきたいという意思を持っておられることもわかっており、一人暮らしの方の健康と生活継続を支える地域での取り組みの重要性が高まっています。このような状況下、高齢者にとって地域の住民グループ活動(以下、グループ活動)における人や組織との交流は、幸せの実感や健康の保持に寄与し、且つ独居の継続要因になるとされています。しかし、一人暮らしでこれに参加している方の割合は 8%程度に留まるのが現状です。そのため、今後は一人暮らしの方の健康づくりを支える一つの手段として、グループ活動での相互交流に着目していくことは重要であると考えられますが、その在り様や健康保持に対する意義は明確にされていません。

そこで、今回、一人暮らし高齢者のグループ活動における相互交流について、構造仮説モデルを構築することを目的に研究を実施することといたしました。このモデルの構築は、一人暮らし高齢者において相互交流を活用した健康づくり活動の実践に寄与するとともに、その理論化に貢献すると考えられます。なお、この度は、家族同居者における相互交流についても明らかにすることで、当該高齢者の特徴をより明確に導く予定です。

皆様におかれましては、ご多用の中大変恐縮ではありますが、本研究の趣旨をご理解いただき調査にご協力を賜りたく、何卒宜しくお願い申し上げます。

記

1. 目的：独居高齢者のグループ活動における相互交流について、構造仮説モデルを構築する。
2. 対象：1年以上一人で生活されている高齢者でグループ活動に継続的に参加している方 6 名及び家族と同居されており且つグループ活動に継続的に参加している方 6 名
3. 方法：インタビュー調査
4. 時期：平成 31 年 2 月
5. 倫理的配慮：調査への参加は自由意思です。詳しくは、別添資料をご参照ください。
6. その他：本調査における個人的な費用負担はありません。

連絡先：日本赤十字九州国際看護大学 ヘルスプロモーション・在宅看護領域
助教 金森 弓枝 Tel:0940-35-7068(直通)

インタビューガイド

インタビューガイドでは、対象者を A とする。

【留意事項】

- ・対象者がリラックスして話せるよう、受容的な態度で行い、雰囲気作りや言葉の選び方に留意する。
- ・インタビュー内容は、正確なデータを取るために、IC レコーダーに録音させていただく旨を開始前に改めて確認、その目的を口頭にて説明する。
- ・インタビュー時間は 50 分程度であることを伝える。
- ・話したくないことは、「話せない」とお伝えいただき、お話いただかなくて構わない旨を伝える。

【対象者の基本的属性】

性 別	①男性 ②女性
年 齢	歳
家族構成	①一人暮らし* ②配偶者と同居 ③子ども家族と同居 ④配偶者と子どもと同居 ⑤その他()
*の 場合： 独居 年数	年 ヶ月
独居に なった 理由	①配偶者との死別 ②未婚 ③離婚 ④子どもとの死別・離別 ⑤親との死別・離別 ⑥その他()
居住歴	年 ヶ月
参加 して いる 活動 種別	①自治会活動 ②環境美化活動(植栽・清掃) ③交通安全活動 ④老人クラブ活動 ⑤要援護者支援活動(見守り・送迎・ゴミ出し等) ⑥地域の健康教室企画・運営活動 ⑦その他()
活動 年数	活動年数： 年 ヶ月
活動 頻度	週間 日 に 1 回程度
1 回の 活動 時間	時間 分

【住民グループ活動における相互交流に関する質問】

あなたが地域で参加されている活動について質問させていただきます。

- 1) それはどんな活動ですか。

- 2) その活動はどのようなきっかけで始めましたか。

- 3) その活動では、今までに誰とどんな交流がありましたか。

- 4) 交流によりこれまでに自分自身はどんな影響を受けましたか。

- 5) 交流の中で、その方(相手)との交流はどんな風に発展していききましたか。

【面接の終了と感謝】

- 以上で面接を終了します。本日はお忙しい中研究にご協力いただき誠にありがとうございました。
- 研究結果の公表や同意の撤回などご不明な点がございましたら、研究説明書に研究責任者であります私の連絡先を記載しておりますので、ご遠慮なくお問い合わせください。

謝 辞

本研究において、面接調査にご協力いただき、貴重なお話を聞かせてくださいました A 市住民の皆様、また、研究調査の実施に際し、業務ご多忙中にもかかわらず、懇切丁寧にご対応くださいました A 市地域包括支援センターの職員の皆様、ならびに関係のすべての皆様に心よりお礼申し上げます。

本研究の遂行にあたりご指導いただきました山口大学大学院医学系研究科保健学専攻地域・老年看護学講座 守田孝恵教授に深謝申し上げます。温かなご指導と貴重なご助言をありがとうございました。

また、山口大学大学院医学系研究科保健学専攻地域看護学の先生方、博士後期課程の先輩の皆様に厚く御礼申し上げます。

最後に、これまでご支援いただきましたすべての方々に感謝の意を表します。

金森 弓枝